

JICA中部・JICA北陸
2023年度 教師海外研修 報告書



ネパール

7/31(月)~8/10(木)
11日間(現地10日間)



2023年度 教師海外研修報告書

目 次

現地研修で印象に残った2枚の写真集 (受講者10名)

I. 教師海外研修の概要 -----	1
1 ● 目的とミッション	
2 ● 訪問国と訪問先	
5 ● 研修の受講者	
6 ● 研修全体のスケジュール	
II. 出発前後の国内研修・説明会 -----	7
7 ● 事前研修	
10 ● 出発前説明会	
11 ● 事後研修①	
III. 現地研修の様子と受講者の学び -----	14
14 ● 7月31日(月) スケジュール	
15 ● 8月1日(月) スケジュール	
16 ● ① 日本語学校「Universal Training Center」、語学学校地区	
17 ● ② JICA ネパール事務所ブリーフィング/教育制度解説	
18 ● 8月2日(火) スケジュール	
19 ● ③ 現地NGO「Mitra Disaster Risk Reduction Learning Center」	
20 ● ④ 防災活動事業対象校「Bhassara Secondary School」	
21 ● 8月3日(木) スケジュール	
22 ● ⑤ 帰国研修員同窓会(JAAN)事務所	
23 ● ⑥ アサン地区～タメル地区 散策・教材収集	
24 ● 8月4日(金) スケジュール	
25 ● ⑦ Kali Devi Secondary School	
26 ● ⑧ ホームステイ組合による歓迎会その1 (挨拶・葉の皿づくり)	
27 ● ⑨ ホームステイ	
30 ● 8月5日(土)、8月6日(土) スケジュール	
31 ● ⑧ ホームステイ組合による歓迎会その2 (サリー試着、歌・踊り)	
32 ● ⑩ 現地NGO「ラブグリーンネパール」事業地	
33 ● 8月7日(月) スケジュール	
34 ● ⑪ e-Education (映像教育) 実施校「Arunodaya Secondary School」	
35 ● ⑫ 現地NGO「CWIN」(Child Workers in Nepal、シーウィン)	
36 ● 8月8日(火) スケジュール	
37 ● ⑬ ACP (Association for Craft Producers) Nepal 工場、直営店「Dhukuti」	
38 ● ⑭ JICA ネパール事務所職員等との懇親会	

- 39 ● 8月9日(水)～10日(木) スケジュール
- 40 ● ⑮-1 パシュパティナート寺院
- 41 ● ⑮-2 ボダナート寺院
- 42 ● ⑯ JICA ネパール事務所 帰国前報告会
- 43 ● ネパールでの食事
- 44 ● 宿泊したホテル
- 45 ● 街中・移動の様子

IV. 帰国後の研修報告 ----- 46

- 46 ● 研修報告書
- 46 1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度
- 49 2. 柱1「訪問国と肯定的に出会う」観点から学んだこと
- 52 3. 柱2「日本と訪問国の同一性に気づき、つながりを理解する」観点から学んだこと
- 55 4. 柱3「訪問国の課題を知り、解決に向けて共に越える」観点から学んだこと
- 58 5. その他全般を通じての感想・意見など
- 61 ● 開発教育指導者研修(実践編)第3回における報告
- 61 ● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2024に向けた準備
- 61 ● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2024での報告

V. 実践報告書 ----- 63

- 63 ● 実践報告書の内容一覧
- 64 ● 石川 敬祐：なったらいいな！自分もみんなもハッピーなせかい
- 69 ● 大島 俊介：NEPAL×JAPAN 多文化共生の街づくりへの第一歩
- 74 ● 荻 光平：我々は地球人
- 79 ● 沖 祐美帆：高校生 国際協力 アイデアコンテスト
- 84 ● 河村 知里：We're the world.
- 90 ● 鈴木 友紀：みんなが暮らしやすいIzumi TownをALTに提案しよう
- 95 ● 竹内 綾音：世界の貧困を僕らが救う！一フェアトレードで自分にできることー
- 100 ● 西村 学：今の自分、未来のジブン～いま、わたしができること～
- 105 ● 森谷 朋香：みんな なかよし だいさくせん！！
- 110 ● 渡邊 亮祐：虹色(私+あなた+世界)＝？

VI. 研修全体のふりかえり・評価 ----- 116

- 116 ● 研修受講者アンケート結果から
- 116 1. 研修の満足度について
- 116 2. 開発教育・国際理解教育の実践について
- 117 3. 学習者のより良い変化について
- 118 4. 研修内容への評価
- 120 ● 実践内容の評価

ネパールで印象に残った2枚の写真集（受講者 10 名） 1/4

● 石川 敬祐



世界に誇る！日本の文化

農村部の学校において、書道と折り紙の文化交流を行った。子どもたちも先生も興味津々で自分の好きな漢字を選んだ後、輝いた顔で夢中になって半紙に書いたり、鶴を折ったりしていた。日本の文化を誇らしく感じた。



踊りと歌が創り出したユートピア

ホームステイの歓迎会での一場面。国籍や老若男女問わず、誰もが自然と微笑み、言葉を介さなくても心が通じ合っているような夢心地を抱く空間であった。踊りと歌は、言葉の壁も様々な違いも乗り越える力があつた。

● 西村 学



知るを喜び、学びを楽しむ

カリ Devi スクールにおいて兼六園の四季を紹介している場面。写真一枚一枚に対する驚き、好奇心、それらすべてが表れている子どもの素直な表情や声に心を打ちぬかれた。伝えることの大きな喜びと感動をもらった。



「働く」とは？「お金」とは？

脂肪分の高いミルクを牛に出してもらうために夫妻は朝早くから様々な労働を行う。そのミルクでの1日の収入は約 800 円。これは労働に対して正当な対価と言えるのか。自分は「お金」について思案せずにはいらなかった。

● 萩 光平



ヤギや牛を放牧するおじさん

主要な道路から脇道にそれると山中の未舗装路につながっており、車はほとんど入ってこないため、近隣住民の散歩道になっているようだ。



カトマンズ市内の河川敷にあるスラム

とてもにぎやかで発展した様子もみられるカトマンズ市内にも、所々で貧困層の暮らしが垣間見えた。このようなスラムは町の中に点在している。

● 竹内 綾音



至る所にトウモロコシ！

街中の路地を少し入ったところや、民家と民家の隙間に、トウモロコシ畑があった。「こんな所で栽培するの？」と思うような場所にちらほら植えてあるのを見て、とても驚いた。少し調べると、ネパールのトウモロコシ栽培面積は全耕地面積の19%で、栽培面積・生産量共にイネについて2位である事を知った。



手で食べる文化！

ネパールでは、手でご飯を食べると聞いていたが、レストランではスプーンが必ず出てきた。現地の方も私たちに合わせてスプーンを使ってくれた。是非手で食べる方法を教えてと伝えると、快く指導してくれた。右手の5本指で食材を混ぜて、器のようにした指の上に置き、親指で押して舌にのせるのだとか。

● 大島 俊介



ソーラン節は言葉の壁を越える

「どっこいしょ」の意味は伝わっていないかもしれないが、日本の伝統舞踊と一緒に楽しもうという気持ちは伝わった。「ヨウ ヤー」なんて言葉は教えていないけれど、自然に出てきてしまった掛け声は何より嬉しかった。



郷に入っては郷を楽しめ

ホストファミリーと共に食べたダルバート。「スプーンあるけどどうする？」と聞かれたので、「手で食べる」と即答。「熱っ！」と言いながら食べていたので家族は大笑い。味はというと、もちろん『ミト チャ!』

● 渡邊 亮祐



フットボールフレンズ

ホストマザーのお使いの帰り道に、ストリートサッカーをする少年たちに出会った。石でゴールを作り、みんなでゲームを行う。言語の壁をたった一つのボールで簡単に乗り越えることができたそんな瞬間だった。



溢れる学びの熱

日本語学校の授業の様子。生徒一人一人の学びの熱がとても高く、眼差しが真剣そのもの。学びの雰囲気、熱量に心から感動した。

● 鈴木 友紀



日本で働きたい

日本語学校での質疑応答。「どうしたらもっとネパールがよくなる?」という学習者の声に、即答できず一緒に未来を考えていくことの大切さに気づかされた思い出深い場所。



祈りをささげる土曜日

ホストファミリーと山の寺院へ。寺院下から、裸足になり参拝場所を目指す。花、水、ティカ、ろうそく、線香で祈りの準備をする。毎週土曜日の参拝。家族にこれからも神様のご加護がありますように。

● 沖 祐美帆



コメとトウモロコシの栽培風景

ネパールの農村地帯で栽培されているコメとトウモロコシの田畑。高低差のある土地を利用して、整備が行われた素晴らしい景色だった。



首都カトマンズの商店

カトマンズには、多くの商店があった。どの店も上からスナックなどを吊り下げて、店いっぱいに商品が陳列されていた。

● 河村 知里



日々の努力とその対価

ホームステイ先の祖母が毎朝飼っている牛から得た牛乳を牛乳加工会社に運ぶ姿。一生懸命世話をし得た牛乳は、量と品質を確認され約 700 ルピー程度（日本円で約 760 円）の収入となった。努力に見合っているか疑問に思った。



相手の幸せを願うティカ

訪問先を訪れる度にティカをしてもらった。これは相手の幸せを願ったり、いい出会いがあるように願ったりするお守りのようなもの。幸せを願うティカは素敵だなと思ったし、ティカをしてもらって嬉しかった。

● 森谷 朋香



サステナブルなフェアトレード商品工房

女性の職業支援や環境に配慮した製造工程、伝統と新しい技術の融合などたくさんのサステナブルな要素があった。そのような背景も知ると、そこで作られている商品がさらに魅力的に見えた。



助け合いの精神

村の学校で日本文化の紹介の授業をした。折り鶴の作成中、できた子がまだできていない子に教えたり、分からないときはアピールして聞いてきたりして、助け合いの精神が育っているのだと感じた。

I. 教師海外研修の概要

● 目的・ミッション

(1) 目的

「持続可能な社会の創り手の育成」への貢献をねらいとし、次の2点を本研修の目的とした。

- ① 開発教育・国際理解教育の実践と裾野拡大に貢献する意欲のある教員が、開発途上国訪問や事前・事後の研修を通じ、開発途上国の現状・課題、日本との関係、国際協力の現場、さらには開発教育・国際理解教育の意義について理解を深めること
- ② 研修受講者が、研修成果を活かした学校での授業実践を通じ、「持続可能な社会の創り手」としての児童・生徒の育成を行うこと、また、汎用性のある学習指導案の作成などの取り組みを通じて他の教員等と共に開発教育・国際理解教育の普及に寄与すること

(2) 受講者が設定した「わたしたちのミッション」

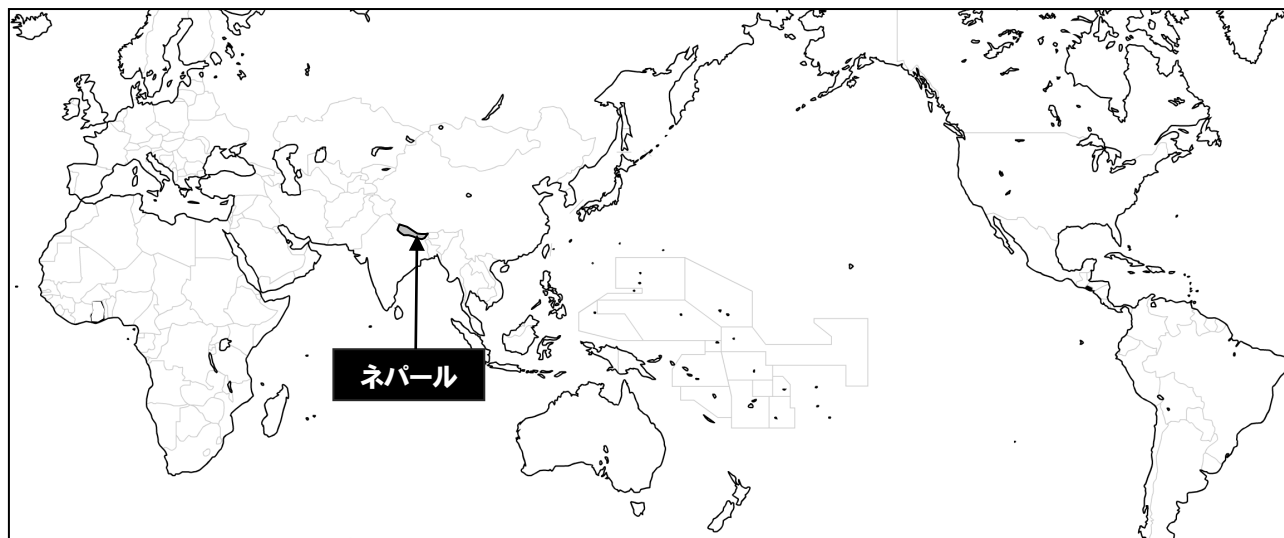
本研修の上記の目的を踏まえ、海外研修の全体のミッションを、受講者同士で次のとおり設定した。

- | | |
|-------|---|
| <現地> | <ol style="list-style-type: none"> 1. カルチャーショックを受けてくる 2. たくさん知り、感じ、体験し、気付く。 3. 日本とネパールをつなげる 4. 現地との継続的なつながりをつくる 5. ネパールでの学びを通じて、日本の良さを再発見する 6. 日本の教育、文化などの良さや悪いところを発見する |
| <教育> | <ol style="list-style-type: none"> 7. 教材・プログラムをつくる 8. 子どもたちの外国への興味を引き出す 9. 日本の子どもとネパールの子どものつなぎ、フラットな視点で肯定的な関係性をつくる 10. 学びを子ども・教員・地域に広げる |
| <私たち> | <ol style="list-style-type: none"> 11. 私たちとネパールがつながり続ける 12. 生涯にわたり協力できるチームになる 13. 次の仲間に伝える、職場の人をまきこむ |

● 訪問国と訪問先

(1) 訪問国

訪問国はネパールである。



(2) 現地研修における訪問先

訪問先は、JICA（中部・北陸）と NIED・国際理解教育センター（運営委託先）が合同で検討し、以下の手順にしたがい、JICA ネパール事務所と調整の上で決定した（具体的な現地研修スケジュールと訪問先の地図は P3~4 を参照）。

- ① 現地研修の学びの視点を満たす主要テーマを設定する
- ② 各国の概要、過年度の研修の訪問実績および現在の JICA 事業を踏まえる
- ③ 「教材化にあたっての子どもたちの学びの柱」を下表のとおり設定し、それに沿った訪問先を選定した。

教材化にあたっての子どもたちの学びの柱

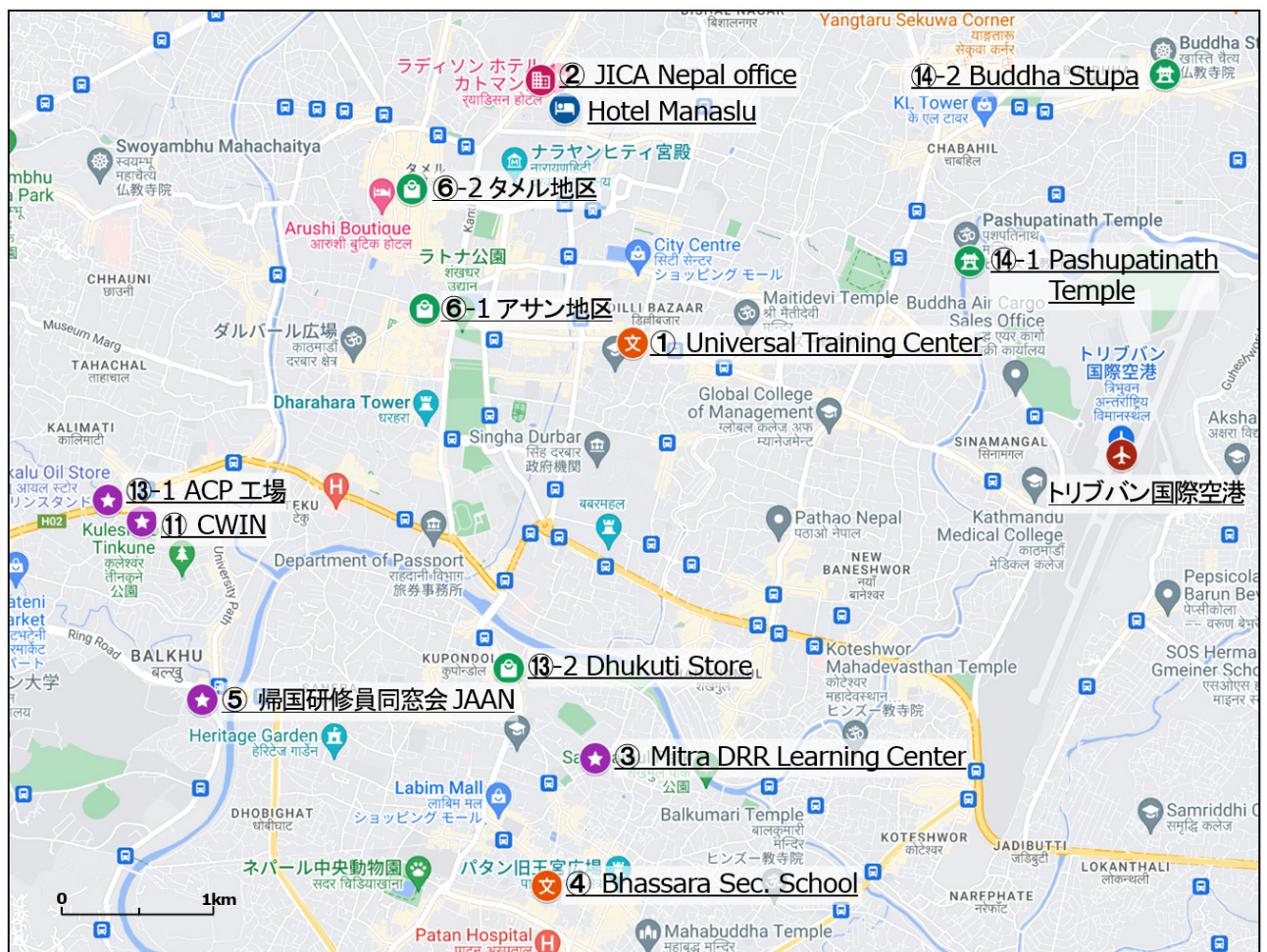
学びの柱	内容・視点
1. 訪問国に肯定的に出会う	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 世界の多様性を知り、多様な人やものと出会うこと・交流することの楽しさを伝える。 ◇ 多角的に肯定的に相手国と出会い、人の顔が見え、身近に感じられるようになる。
2. 日本と訪問国との同一性に気づく、つながりを理解する	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 国や人の多様性だけではなく、共通するものがあること（同一性）を理解する。 ◇ 地球規模で進むグローバル化の恩恵と課題を理解し、日本とネパールとのつながりに気づき、つながりを築く。
3. 共通の課題について共に考え、共に越える	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 相手を知ることで自国（自分）をふりかえり、互いの誇りや課題を確認する。 ◇ 共に学びあい、知り、考え、気づき、よりよい未来を共に築く入口を提供する。

現地研修の訪問スケジュール

期日	訪問先・内容
7/31 (月)	09:15 中部国際空港発－(KE744/2h10m) →11:25 仁川空港着 (乗継2h20m)－ 13:45仁川空港発－(KE695/6h40m) →17:10カトマンズ(トリブバン空港)着 →ホテル泊
8/1 (火)	① 日本語学校「Universal Training Center」訪問、語学学校地区 ② JICAネパール事務所ブリーフィング／教育制度解説
2 (水)	③ 【草の根】現地NGO「Mitra Disaster Risk Reduction Learning Center」 ④ 防災活動事業対象校「Bhassara Secondary School」(◆3-7年生と体験授業)
3 (木)	⑤ 【研修員受入事業】帰国研修員同窓会(JAAN)事務所 ⑥ アサン地区～タメル地区 散策・教材収集
4 (金)	★中間振り返りミーティング ⑦ Kali Devi Secondary School (◆4-8年生と体験授業) ⑧ ホームステイ組合による歓迎会 (その1:挨拶・葉の血づくり) ⑨ ホームステイ 17:00～
5 (土)	ホームステイ(続き) ホームステイ組合による歓迎会 (その2:サリー試着、歌・踊り)
6 (日)	ホームステイ ～12:00 ⑩ 【草の根】現地NGO「ラブグリーンネパール」事業地(モデル圃場・農家)
7 (月)	⑪ 【草の根】e-Education(映像教育)実施学校「Arunodaya Secondary School」 ⑫ 【現地NGO】CWIN(Child Workers in Nepal、シーウィン)
8 (火)	⑬ ACP(Association for Craft Producers)Nepal工場、直営店「Dhukuti」 ★ 最終振り返りミーティング ⑭ JICAネパール事務所職員等との懇親会
9 (水)	⑮ パシュパティナート寺院、ボダナート寺院 視察、教材収集 ⑯ JICAネパール事務所 帰国前報告会 19:20カトマンズ (トリブバン空港) 発－ (KE696/6h40m) －
10 (木)	05:15仁川空港着－ (乗継5h25m) －10:40発－ (KE741/1h50m) →12:30中部国際空港着！

注:【草の根】…草の根技術協力事業

現地研修の訪問先



※ 地図出典 : Google Map

● 研修の受講者

(1) 受講者

10名の研修受講者の属性及び同行者を含む名簿は以下のとおりである。

性別：女性5名、男性5名
 年代：20代5名、30代3名、40代2名
 地域：愛知県5名、三重県1名、静岡県2名、石川県2名
 校種：小学校7名、中学校2名、高等学校1名

教師海外研修受講者名簿

No.	名前	所属先・教科・学年	県
1	いしかわけいすけ 石川敬祐	小牧市立篠岡小学校 全教科（音楽・図工除く）、2年生	愛知
2	おおしましゅんすけ 大島俊介	津島市立東小学校 全教科、4年生	愛知
3	おぎこうへい 荻光平	磐田市立東部小学校 全教科+理科・体育、6年生	静岡
4	おきゆみほ 沖祐美帆	愛知県立常滑高等学校 地歴・公民、3年生	愛知
5	こうむらちさと 河村知里	豊明市立豊明中学校 英語、1年生	愛知
6	すずきゆき 鈴木友紀	金沢市立泉小学校 英語、3～6年生	石川
7	たけうちあやね 竹内綾音	四日市市立日永小学校 全教科+外国語、6年生	三重
8	にしむらまなぶ 西村学	金沢市立扇台小学校 全教科、4年生	石川
9	もりやともか 森谷朋香	名古屋市立富士見台小学校 全教科、1年生	愛知
10	わたなべりょうすけ 渡邊亮祐	御殿場市立御殿場中学校 社会・国語、2年生	静岡

(2) 応募資格等

【応募資格】 次の要件をすべて満たす方

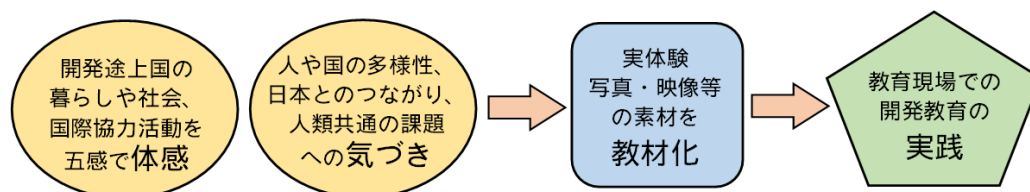
- ① 愛知県、岐阜県、三重県、静岡県、石川県、富山県、福井県の国公立、私立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校の教員（児童・生徒に開発教育・国際理解教育を継続的に実践できる立場にある教員）で、所属する学校の校長の推薦があること。
- ② JICA が実施している教師海外研修、JICA 海外協力隊、専門家、国際協力レポーター（ODA 民間モニター）等 JICA から海外に派遣された経験がないこと。

【参加条件】 次の条件を満たす方

- ① 教師海外研修の趣旨を十分理解し、同研修の実施および JICA が実施する開発教育支援事業に協力できること。
- ② 2023 年度中に授業やクラブ活動で、教師海外研修の経験を活かした開発教育・国際理解教育を実践できること。
- ③ 国内で実施される研修・説明会および現地研修の全行程に参加可能であること。
- ④ 派遣国の事情（道路状況や衛生環境等）を勘案した上で、全研修行程に参加するに耐えうる健康状態であること。
- ⑤ 帰国後、所属長の承認を得たうえで、1) 現地研修に関する報告書を提出すること、2) 所属校における授業実践内容についての実践報告書を提出すること、3) 実践報告フォーラムで実践内容を発表すること、4) これら提出物を報告書冊子や JICA ウェブサイトなどで学校名、氏名とともに一般公開されることに同意すること。
- ⑥ 本研修に関わる連絡・情報共有のため、Eメールでの連絡が可能な方。

● 研修全体のスケジュール

教師海外研修の各研修等は、以下のような年間を通した日程で行った。



回	日時	内容（予定）
事前研修	7月1日（土）13：00～17：00 7月2日（日）10：00～15：00	<ul style="list-style-type: none"> ●本研修の概要、派遣国・訪問先の説明 ●海外渡航手続き、健康・安全管理等の留意事項の説明 ●研修目標の共有、情報収集・交流の準備、役割分担
出発前説明会	7月30日（日）13：00～17：00	●JICA 安全講習、現地情報・準備事項の最終確認
ネパール 現地研修	7月30日（日）～8月10日（木） （本邦発着 11 日間／現地 9 日間）	<ul style="list-style-type: none"> ●開発途上国の現場体験、教材の素材収集 ●気づきの共有、受講者同士の学び合い
事後研修①	9月2日（土）13：00～17：00 9月3日（日）10：00～15：00	<ul style="list-style-type: none"> ●現地研修の気づきや素材の教材化 ●上記教材を使った学習者主体の授業案の作成
9月～1月：各自、学校の授業などで実践！		
11月25日（土）、1月20日（土）：教師海外研修報告の準備、実践のフォローアップ等（有志参加）		
事後研修②	2月24日（土）10：00～18：00	<ul style="list-style-type: none"> ●実践の内容、成果と課題の共有 ●フォーラムでの報告の準備
実践報告 フォーラム	2月25日（日）10：00～17：30	<ul style="list-style-type: none"> ●海外研修報告、各実践の報告（ポスターセッション） ●有志チームによる開発教育体験ワークショップ ●実践者つながりワークショップ

※ 事後研修②と実践報告フォーラムは、開発教育指導者研修（実践編）受講者と共同で行う。

II. 出発前後の国内研修・説明会

● 事前研修 7月1日(土)13:00~17:00、2日(日)10:00~15:00

<ねらい>

- ◇ 教師海外研修の目的・内容を理解し、自分たちの言葉でミッションを立てる。
- ◇ 訪問国の概要および訪問先の情報を共有する。
- ◇ 海外研修の経験を授業につなげるための教材の収集方法を検討する。
- ◇ 現地で行うチームの役割分担、係ごとの内容を検討する。
- ◇ 海外研修の準備・留意事項（フライト、持ち物、健康・安全対策など）を確認する。

<プログラム>

■ 1日目：7月1日（土）

時刻	内容	講師・資料
13:00 (5分)	1. 開会 (1) あいさつ (2) スタッフ、同行者の紹介	JICA 奥田 資料0
13:05 (5分)	2. 教師海外研修の目的・内容 (1) 研修の全体概要と受講者への期待	NIED 川合 資料1
13:10 (35分)	3. 共通基盤づくり (1) アイスブレイキング・自己紹介～お互いのことを知り合おう～ (2) 海外で学んでくる私たちが担うミッション	NIED 伊沢
13:45 (30分)	4. 海外研修の訪問国・訪問先情報の共有 (1) ネパールの概要 (2) 現地行程(案)・訪問での活動予定 (3) 質疑応答	NIED 川合 資料2,3,4
14:15 (15分)	5. 海外研修を生かした教材化の視点の確認 (1) 学習者の学びの3本柱とねらい (2) 教材づくりのポイントの説明	NIED 伊沢 資料5,13
14:30 (30分)	6. 海外体験を授業につなげるための計画①/個人作業 (1) ミッションと事前研修のねらいの再確認 (2) 「事前ー現地ー事後」研修パッケージのねらいの説明 (3) 「現地で何を見て、聞いて、調べてきたいのか？」洗い出し(付せん紙) (4) 訪問先資料集を読んで追加 (5) テーマ区分ごとに分類・整理	NIED 久世、 鉄井、伊沢 資料1,6,7,8,13
15:00	休憩 (15分)	
15:15 (95分)	7. 海外体験を授業につなげるための計画②/チーム作業 (1) 教材チーム&担当テーマ決め (2) 担当テーマの教材収集シート10人分を分類・整理 (3) 教材のねらい「〇〇のために△△を集める」の確認 (4) 全体で発表・共有→付け足し (5) 教材収集の事前準備の必要や収集方法の工夫の検討	NIED 久世、 鉄井、伊沢 資料8,13
16:50	8. 事務連絡 (10分) (1) 海外旅行保険、安全対策(セルフディフェンス研修、たびレジ等)説明 (2) その他、質疑応答	JICA 奥田 資料9

■ 2日目：7月2日（日）

時刻	内容	講師等
10：00 (10分)	9. 朝のアイスブレイキング	NIED 久世
10：10 (80分)	10. 海外体験を授業につなげるための計画③/チーム作業 (1) 前日の続き作業+重点化（これだけは絶対集める！に印を付ける） (2) 各チーム作業の成果を全体で発表&提案会 <よいぞ！>→花丸 <これも！こうしたら？>→黄色付せん紙 (3) 提案・リクエストを受けてチームで最終とりまとめ	NIED 久世 鉄井、伊沢
11：30	お昼休憩（60分）	
12：30 (50分)	11. 子どもたちとの交流&チームでの役割の検討 (1) 子どもたちとの交流、ホームステイでの交流についての検討 (2) チームとして行う各活動の内容把握と役割分担	NIED 久世 資料 10
13：20 (15分)	12. 現地での1日の流れの確認 (1) 朝起きてから夜寝るまでの標準的な活動や役割・留意事項の確認	NIED 久世 資料 10
13：35 (65分)	13. 参加の準備や注意事項 (1) 出発～帰国までのフライトなどの情報 (2) ネパール現地研修中の留意事項（安全、健康、ルールなど） (3) 持ち物・準備事項、その他留意事項 (4) 質疑応答	NIED 川合 JICA 奥田 資料 11,12
14：40 (20分)	14. 最終調整、事務連絡 (1) 出発前説明会、結団式の案内 (2) その他連絡事項	NIED 川合 JICA 奥田 資料 14

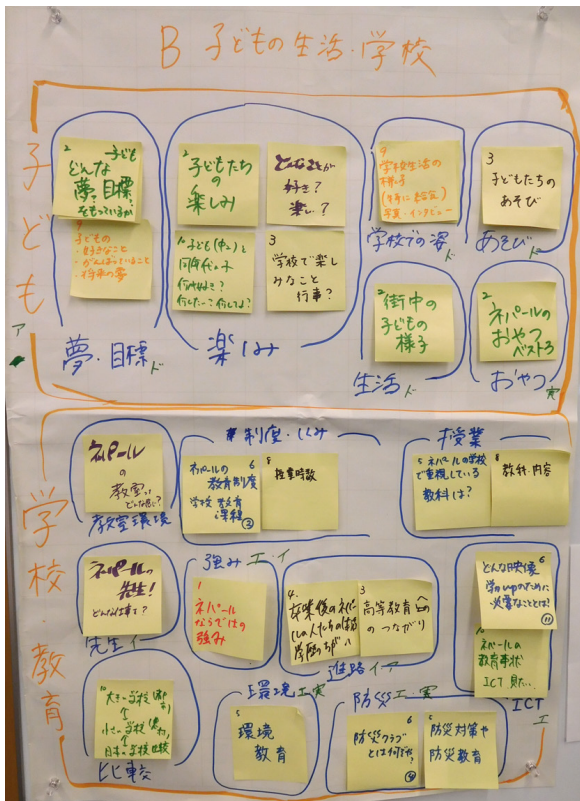
<配付資料>

- 資料 0：受講者・同行者名簿
- 資料 1：事前研修レジюме
- 資料 2：ネパールの基礎・生活情報集
- 資料 3：ネパール現地日程案
- 資料 4：訪問先と活動予定（自分の興味・関心メモ）
- 資料 5：学習者の学びの柱・ねらいの解説
- 資料 6：教材収集に係るテーマ区分（該当する訪問先など）
- 資料 7：ネパール訪問先資料集
- 資料 8：テーマ別教材収集シート
- 資料 9：海外旅行保険「無事カエルパック」・安全対策関連説明資料
- 資料 10：チーム内の係の説明+研修の1日の流れ
- 資料 11：安全・健康・ルールなどの留意事項
- 資料 12：持ち物・準備に関する資料集
- 資料 13：JICA 中部 教師海外研修ガイドブック
- 資料 14：2019 年度教師海外研修報告書

<開催の様子>



<成果物>



■ 教師海外研修の内容と目標

■ 教材収集シート B. 子どもの生活・学校
コネクト (いっしー、ちさ、モカ、りょう)

● ねらい…子どもたちが、何に気づき、どう感じ、考えられるようになるとよい？

訪問国を身近に感じられるようになる。

自分たちは異なるやり方、考え方、文化をオモシロイ！それもアリ！と思える。

自分の当たり前が世界の当たり前ではないことに気付く。

自分の中のステレオタイプ/思いこみに気付く。

● 集める方法…見る・聞く・味わう・におう・さわる～5感で学ぶ体験！

p 写真 m 動画 h 実物 i インタビュー e アンケート f 体験

● 具体的な収集物・情報 ※枠付きは重点項目

カテゴリ	収集内容	主な方法
子ども 夢・目標	<input type="checkbox"/> どんな夢や目標をもっているか <input type="checkbox"/> 好きなこと <input type="checkbox"/> がんばっていること <input type="checkbox"/> 将来の夢 <input type="checkbox"/> 自己肯定感	me
子ども 楽しみ	<input type="checkbox"/> どんなことが楽しい？好き？ <input type="checkbox"/> 学校で楽しみな行事 <input type="checkbox"/> 何がしたい？何してる？ (日本の遊びも伝え一緒に楽しむ)	e
子ども そのほか	<input type="checkbox"/> 学校生活の様子 (特に給食) <input type="checkbox"/> 子どもたちのあそび <input type="checkbox"/> 街中で子どもの様子 <input type="checkbox"/> ネパールのおやつベスト3	m h e
学校・教育	<input type="checkbox"/> 学校の比較 (都市部の大規模校ー地方の小規模校ー日本の学校) <input type="checkbox"/> 教室環境 <input type="checkbox"/> 制度・しくみ (教育制度、教育課程、授業数、実働) <input type="checkbox"/> 授業科目と内容 <input type="checkbox"/> 防災クラブとは？ <input type="checkbox"/> 防災対策や防災教育 <input type="checkbox"/> 環境教育 <input type="checkbox"/> ICT (教育現場実情、学力UPのために必要なこと) <input type="checkbox"/> ネパールの先生はどんな仕事している？ 先生の意識… <input type="checkbox"/> 重視している教科 <input type="checkbox"/> 教育上の問題点 <input type="checkbox"/> 必要な支援 <input type="checkbox"/> ICT <input type="checkbox"/> 力を入れていること <input type="checkbox"/> 不足していること <input type="checkbox"/> どんな子どもたちに育ってほしいと願っているか	h i e f

● 日本でやっておこう！

アンケートの用意 →日本の子ども達にもアンケートを実施 (内容の検討)

ネパールの先生へのインタビュー項目検討

ネパールの子どもに何を紹介するか？何を一緒にするか？決めておく

● 出発前説明会 7月30日(日)13:00~17:00

<ねらい>

- ◇ 海外研修の最新情報について共有し、出し物・お土産・情報収集などの最終調整を行う。
- ◇ 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけを決め、結団し、出発する。

<プログラム>

時刻	内容	講師等
13:00 (5分)	1. はじめに ・主催者あいさつ、本日のねらいの確認	JICA 藤原課長 NIED 川合
13:05 (55分)	2. 最新情報と確認事項 ・マナビノオトの見方、使い方 ・その他各種留意事項 ・質疑応答	全体説明：NIED 川合
14:00 (20分)	3. 教材収集の確認 ・教材収集シートでの情報収集内容の確認・共有	進行：NIED 久世
14:20	休憩 (10分)	
14:30 (30分)	4. 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけ ・仲間として ・個人として	進行：NIED 鉄井
15:00 (50分)	5. チーム活動の準備・調整 ・役割チーム (お土産、会計、ネパール BOX) ・学校での交流授業チーム	進行：NIED 久世
15:50	準備 (10分)	
16:00 (60分)	6. 結団式 ・主催者からエール→参加者からの抱負 ・飲食、歓談	進行：JICA 奥田、課長挨拶 会費制

<開催の様子>



● 事後研修①※ 9月2日(土)13:00~17:00、3日(日)10:00~15:30

<ねらい>

- ① 現地研修で集めた情報を使ったアクティビティのアイデアを共有する。
- ② 教師海外研修で学んだことをもとにした個人の実践アクティビティ・プログラムを作成し、評価指標の活用や相互提案などを通してより実践的な内容に深める。
- ③ 実践報告フォーラムでのワークショップ提供の準備を行う。

<プログラム>

■ 1日目：9月2日（土）

時刻	内容	講師等
13:00	1. あいさつと研修のねらい・スケジュールの確認	JICA 奥田、NIED 久世
13:05	2. アイスブレイキング	NIED 久世
13:15 (15分)	3. ネパール現地研修のふりかえり (1) 教師海外研修報告書「学びの3つの柱」の共有	NIED 久世
13:30 (30分)	4. 収集した現地素材の共有と活用法のアイデア出し (1) 教師海外研修ガイドブック、マナビノオトの確認 (2) 現地素材を使ったアクティビティのアイデア出し→共有	NIED 鉄井
14:00 (40分)	5. 個人の授業実践プログラム作り①「ねらいの設定」 (1) プログラム様式への対象、実践時間数の記入 (2) 子ども達と一緒に考えたいテーマの連想図 (3) 「知る・気づく／考える・行動する」対比表 (4) プログラムのねらいの設定	NIED 久世 鉄井、伊沢、川合
14:40 (40分)	6. 個人の授業実践プログラム作り②「プログラム素案の作成」 (1) プログラム全体の展開（四行詩、起承転結等）の作成 (2) アクティビティの当てはめ・プログラムの流れの作成 (3) 主アクティビティにおける発問、現地素材の記述	NIED 久世 鉄井、伊沢、川合
15:20	休憩 (10分)	
15:30 (10分)	7. 個人の授業実践プログラム素案の自己点検評価 (1) 6つの指標を使った点検評価	NIED 久世
15:40 (60分)	8. 個人の授業実践プログラム素案の小グループ相談会 (1) 3～4人グループで各実践プログラム素案の発表、相談 (1人につき発表5分+相談10分)	NIED 久世 鉄井、伊沢、川合
16:40 (15分)	9. 個人の授業実践プログラム作り③「プログラム案のまとめ」 (1) プログラム案をまとめ、A3用紙から模造紙へ	NIED 久世 鉄井、伊沢、川合
16:55	10. 事務連絡 (1) 実践報告関連（フォーラム、実践報告書） (2) その他	NIED 川合

※「事後研修②」については、2023年度開発教育指導者研修（実践編）第4回と合同実施のため、同研修の報告書をご参照ください。

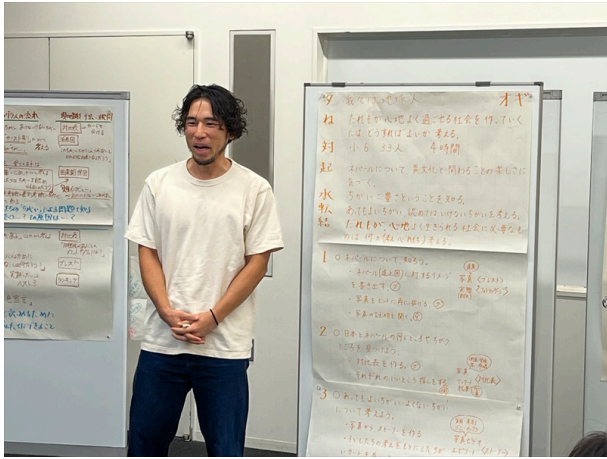
■ 2日目：9月3日（日）

時刻	内容	講師等
10:00	1. アイスブレイキング	NIED 久世
10:05 (55分)	2. 個人の授業実践プログラム作り③「プログラム案のまとめ」 (1) 1日目の続きをまとめあげる	NIED 久世 鉄井、伊沢、川合
11:00 (30分)	3. 個人の授業実践プログラムの発表&提案会① (1) 発表者：プレゼンテーション (6分) ×3人 (2) 聞き手：よかった点/よりよくするための提案 (4分) ×3人	NIED 久世、鉄井
11:30	休憩 (60分)	
12:30 (20分)	4. 個人の授業実践プログラムの発表&提案会② (1) 発表者：プレゼンテーション (6分) ×2人 (2) 聞き手：よかった点/よりよくするための提案 (4分) ×2人	NIED 久世、鉄井
12:50 (40分)	5. 個人の授業実践プログラム案の改善検討 (1) よかった点/提案をふまえてプログラムの改善、個別相談	NIED 久世 鉄井、伊沢、川合
13:30 (25分)	6. 授業実践に向けての私宣言！&エール (1) 受講者全員の実践プログラム案のギャラリー方式による確認 (2) 車座で今後の授業実践に向けた抱負とエールを交換	NIED 久世
13:55 (30分)	7. 実践報告フォーラム 2024 教師海外研修報告の検討 (1) 20分間の発表内容と役割分担	NIED 久世
14:25 (30分)	8. 実践報告フォーラム 2024 有志ワークショップの検討 (1) ワークショップ提供する有志メンバーの選定 (2) 提供プログラムの決定と今後の予定・役割等の検討	NIED 久世
14:55	9. 事務連絡 (1) 中間会合 (11/25、1/20) への参加確認 (2) その他	NIED 川合 JICA 奥田、甲斐

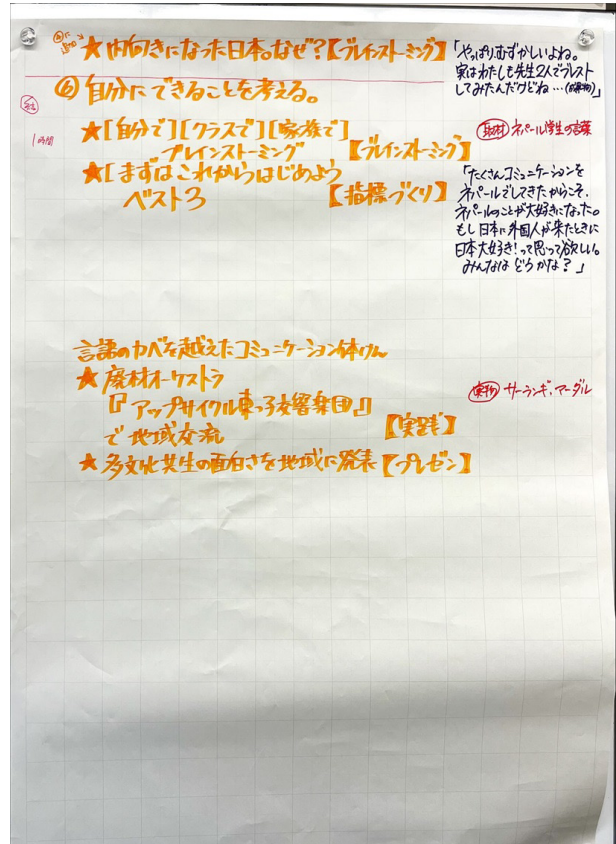
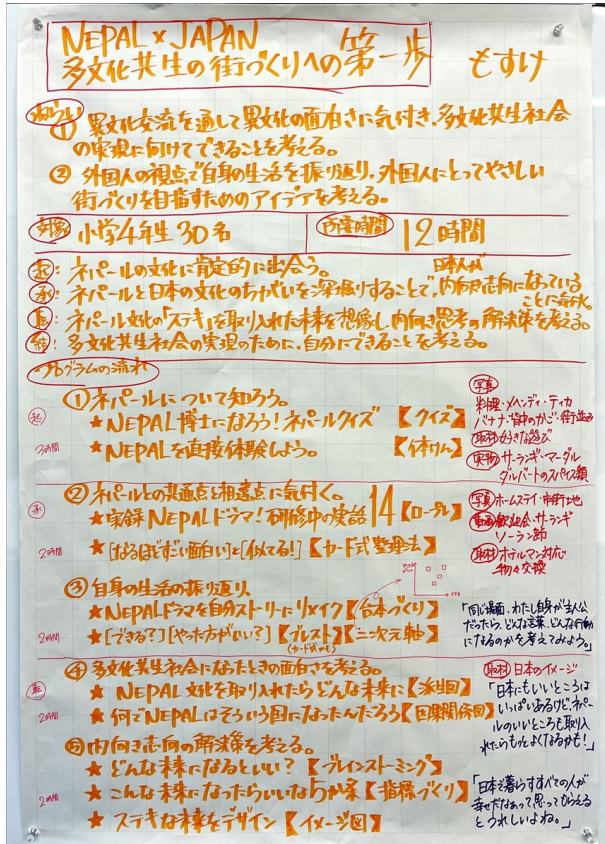
<配付資料>

- 資料1：事後研修レジュメ (本資料)
- 資料2：教師海外研修報告書「学びの3つの柱」
- 資料3：授業実践プログラムの6つの評価指標
- 資料4：実践プログラム作成様式 (A3版)
- 資料5：実践プログラム作成例
- 資料6：実践報告書の記入解説および様式
- 教師海外研修ガイドブック
- 各自のマナビノオトおよび振り返りシート
- 教師海外研修の写真・動画・資料集 (データ共有)
- ネパールBOX

<開催の様子>



<成果例> ★ 受講者が作成した授業実践プログラム例



III. 現地研修の様子と受講者の学び

■ 7月31日(月)

時刻	スケジュール	備考(★出迎・案内者)
朝	<朝食> ホテル内 6:00~	
06:45	ホテルロビー集合 (チェックアウト)	
07:00	中部国際空港 3階国際線大韓航空Aカウンタ前集合 ◇チェックイン/受託荷物預け ◇搭乗券・クレームタグ受取り	★見送：NIED伊沢・川合 ◇受託荷物23kg 3辺の和158cm以内
08:40	出発ゲート前集合、記念撮影 ◇保安検査→税関→出国審査→搭乗ラウンジ	◇機内持込 3辺の和115cm +身の回り品合計10kg以内
09:15	中部国際空港 発 (KE744便) 仁川空港へ ↓	空港コード： NGO [所要時間：2時間10分]
11:25	仁川国際空港 着 Terminal 2 ◇トランジット	空港コード： ICN [時差] なし/日本
13:45	仁川国際空港 発 (KE695便) ↓ <食事> 機内 (出発後、到着前軽食) ↓	[所要時間：6時間40分]
17:10	トリブバン国際空港 (カトマンズ) 着 ◇検疫→入国審査→受託荷物受取→税関 ◇到着ロビー...運転手出迎え	空港コード： KTM [時差] -3時間15分/日本
18:30	マイクロバスでホテルへ	
19:00	ホテル着 → チェックイン	◆ Hotel Manaslu (1泊目)
夜	<夕食> ホテル内 ♪ワークショップ (WS) 本日のふりかえり ・ワークシート「ネパールの第1印象とこれからの想い」	

■ 8月1日(火)

時刻	スケジュール	備考(☆出迎・案内者)
朝	<朝食>ホテル内	
08:40	ホテル発 日本語学校へ	★同行：ティミルシナ 職員 (JICAネパール事務所)
09:00	① 日本語学校「Universal Training Center」 語学学校地区の散策 ◇挨拶 ◇授業参観 ◇学生との意見交換	★案内： [日本語学習者 情報] ・生徒400人程度、10-20歳代 ・朝6-11時授業、教員3名 ・オンラインもあり ・特定技能…介護・外食・農業
11:00	<昼食>語学学校の食堂で現地先生と懇談	
12:00	語学学校地区の車移動+散策	
13:30	JICAネパール事務所で情報共有	
14:00	② JICAネパール事務所ブリーフィング ◇司会・業務連絡 ◇受講者による研修の抱負 (3-4分/人) ◇事業概要、Q&A ◇保健・安全 -休憩- ◇教育制度、Q&A	★飯塚次長 ★健康管理員、安全担当 ★教育担当
17:00	移動 徒歩ホテルへ	◆Hotel Manaslu (2泊目)
18:15	ホテル近隣散策	
19:00	<夕食>中華 ♪WS 本日のふりかえり ・ワークシート「ネパールの！と？」	
21:00	ホテル着	

● ① 日本語学校「Universal Training Center」、語学学校地区



● 石川敬祐

日本語学校に着き、教室に入るや否や、誰もが真剣な眼差しで日本語の解説を聴いている光景を目撃した。また、耳を澄ますと、助詞や助動詞など、日本人である自分ですら少し悩んでしまうくらい細かい品詞や文法を学んでいることに衝撃を受けた。さらに、近くの学生さんに話を聴くと、今やっているのは宿題の答え合わせだと言っていた。何ページもの日本語のテキストを読み込み、コミュニケーションに生かすための問題を大量に解いて、授業に臨んでいたのだ。授業参観後、何人かの学生さんと対話をする時間があって、「なぜこんなに一生懸命に日本語を学んでいるのか」と尋ねると、日本文化を知りたい、新しい世界を見てみたい、そして、日本で働き家族をサポートしたいと力強く答えてくれた。日本語学校の学生さんから、目的をもって学ぶことの大切さ、日本に対するポジティブなイメージは、これまでにネパールを訪れた日本人の振る舞いによって形成されていることを学んだ。

● 荻光平

日本で就労、就学するためにたくさんの人たちが学習していた。学生の年齢は10代から30代と幅広かった。海外に出稼ぎに行くことは、ネパールでは、一般的であり実際に学生さんの兄妹がすでに日本で働いたり、留学していたりする方もいた。日本語に限らず、外国語学習のニーズは多く、あちこちに外国語学校があった。学校の設備は、十分であるとは思えなかった。ビルの狭い一室に30人近い生徒がいて、小さな机付の椅子がたくさん並べられている教室で授業していた。黒板の前で教師が読み上げた日本語を、真似して声に出したり、動詞の正しい活用を選ぶ問題に取り組んだりしていた。授業後の学生さんとの対話では、日本語である程度、意思疎通を図ることができた。東京や大阪、名古屋といった都市で、飲食店や介護、農業の仕事を考えている人が多い。日本のインフラが整っていることや安全な国であるというのも、就労就学先に日本を選ぶ理由になっていると話を聞くことができた。

② JICA ネパール事務所ブリーフィング／教育制度解説



● 大島俊介

JICA ネパール事務所の飯塚次長の講話を聞いた。ネパールへの支援の3つの柱として、①経済成長・貧困削減、②防災・気候変動対策、③ガバナンス・行政の紹介を受けた。その中でも教育に関わるのは①貧困削減であった。教員の指導力の向上や教材の充実、学校運営機構の整理など、支援の内容はさまざまであった。

ネパールの教育制度は5歳から5年・3年の基礎教育（無償の義務教育）と2年・2年の中等教育を受けるように決まっているが、年齢相応で卒業できている人は約25%（2018年）である。この背景には貧困層の児童の退学や中等教育中の進級試験や大学入試資格取得の全国統一試験がある。日本と同様の学歴社会であり、中等教育後に雇用を求めて専門学校に通ったり、国外への出稼ぎを目当てに語学学校に通ったりする人が多いようだ。

ネパール人の子ども達は、将来の安定のために勉学に励んでおり、日本はこの学習意欲を見習うべきである。

● 沖祐美帆

ネパールにおける教育制度で日本と異なっている大きな特徴は、留年者数が多いということ、教育格差が大きいということの2点である。1点目の留年者数が多いという点については、特に低学年の子どもたちの留年率が高い。さらに、就学したとしても約21パーセントの子どもは基礎教育修了前に学校を退学してしまう。2点目の教育格差が大きいという点については、地域的要因、経済的な困難さ、公立校・私立校による違いによって教育格差が生まれている。以上の2点から、国家レベルでの教育の無償化や女子やダリッドへの奨学金の支給等を行っても効果は十分ではないということを知った。親や地域の教育に対する意識など国民全体に教育の重要性が理解されなければ、留年者数の減少や教育格差の是正を図ることは難しいと気づいた。

■ 8月2日(水)

時刻	スケジュール	備考(☆出迎・案内者)
朝	<朝食>ホテル内	
08:45	ホテル発 MDRRLCへ	★同行：ティミルシナ 職員 ★通訳：Ms.Sara Bharati
09:10	③現地NGO「Mitra Disaster Risk Reduction Learning Center」 ◇挨拶 ◇センター紹介 ◇事業紹介、Q&A	★案内：Mr. Deepak
11:20	移動 車で事業対象校へ	
11:30	④事業対象校「Bhassara Secondary School」 ◇挨拶 ◇授業参観 ・通常クラス1-8年生授業を見学	★案内：
12:30	<昼食>	
13:30	◇生徒による防災知識の説明 (1時間)	
14:50	◇受講者による体験授業・交流会 ・2年...石川・森谷 ・3年...沖・渡邊 ・4年...大島・西村 ・7年...竹内・鈴木 ・8年...河村・荻 ◇一斉でソーランタイム	☆各クラス25人程 ☆英語力：英検3-準2級程
16:30	◇質疑応答	
17:00	移動	
17:30	ホテル着	◆ Hotel Manaslu (3泊目)
19:00	<夕食> ♪WS 本日のふりかえり ・ワークシート「日本の学校とネパールの学校、共通点と相違点」	

③ 現地 NGO 「Mitra Disaster Risk Reduction Learning Center」



● 荻光平

日本の大学などの機関と連携していたり、自助、共助、公助などといった言葉を掲げていたり、日本の防災に対する知識がネパールでも生かされていると強く実感できる NGO 団体だった。主に、地域や学生、児童向けに防災意識を高める活動をしている。内容に関して、日本との相違点がいくつか見られて面白かった。例えば、地震が起きた直後、日本では、通常机の下に入り頭部を守ることを教えているが、ネパールでは、なるべく早く建物から離れると周知している。日本とネパールの建築レベルの違いから、初動の動きが変わるのだと思うが、新鮮な印象をもった。日本で教えている防災教育を見直すきっかけにしたい。この NGO 団体では、ゲームを使って、防災教育を推進していることも印象的だった。子どもたちが、楽しみながら防災知識をつけられるように、工夫している。私の防災教育は、ただの教え込みになってしまっているので、子供たちが自ら楽しく学べる工夫をしていることは見習う点だと感じた。

● 河村知里

ネパールも日本も地震大国という共通点がある。ネパールの人々が自分の身は自分で守る (Self-Defense) ということを知り、広めるために防災教育の活動をしていると学んだ。日本と共通する点も多かったが、ネパールの実態にあった方法も取り入れていた。例えば、日本だと地震が起こったら、まず机の下など身を守ることを教える。しかし、ネパールでは地震が起こったらまず広場や空き地などに避難することを教える。なぜかという、ネパールは頑丈な建物は少ないため、地震で崩れて建物の下敷きになる可能性があるからだ。他にも、防災教育のためにたくさんのゲームを考案し、学校現場で先生だけではなく、生徒達にも教えていた。先生や生徒達に教えることで、生徒の保護者や地域へと広げることができると話していた。ゲーム内容も、地域にあったものに作り変えるなど工夫がされており、地方では土砂崩れから身を守る方法も含めたゲームになっていた。実態に合わせつつ、楽しみながら防災について学ぶ事ができる工夫を多く学ぶ事ができた。日本では、避難訓練のみで防災教育が終わることも多い。今回学んだ方法も学校で取り入れていきたい。

④ 防災活動事業対象校「Bhassara Secondary School」



● 沖祐美帆

Bhassara Secondary School で最も印象に残っていることは、子どもたちが自ら積極的に防災について学んでいるという姿勢である。Bhassara Secondary School では、子どもたちがゲームやクイズを通して、防災について学んでいた。そして、私たちが訪問した際、子どもたちが防災ゲームやクイズを紹介したり体験させてくれたりした。その際、教員が主導になって子どもに指示を出したり説明するのではなく、完全に子どもたちだけで運営を行っていた姿には非常に驚かされた。Bhassara Secondary School では様々な年代の子どもが学んでいるので、上級生が下級生をリードする姿も見ることができた。これらの様子から子ども同士での共同的な学び合いは、学ぶ意欲を向上させたり、創造的な思考を生み出したりするということに気づかされた。

● 鈴木友紀

生徒がクラブの活動やアクティビティを英語で説明して進めていた。実物や絵カードなどを使い、体を動かす場面も取り入れながら、楽しく工夫して、防災について考えることができるようになっており、生徒主体で、防災の観点で進めていく手法は、日本の学校で行われている避難訓練だけでなく、さらに児童自身が身を守ることを考えていくヒントになりそうだ。

授業参観では、教室を2グループに分け、お互いに考えた質問をし合う活動。挙手が続き活発な生徒の声が聞こえた。間違いは即座に訂正するも、最後のふり返り場面では先生の生徒へのねぎらいやお褒めの言葉がある。日本同様、先生のフィードバックがあることで生徒の意欲継続につながっていると感じた。

クラブ活動授業参観後の Team Teaching での自分たちの授業では、英語での指示は、ジェスチャーを交えながらではあったが、伝わった。生徒は、日本文化紹介、日本の歌やレクチャーに楽しそうに応じた。「翼をください」は数回のリピートにより歌えるようになった。聞いて模倣する力が素晴らしい。中庭でのソーラン・自由ダンスに自主的に参加し個性豊かに楽しむ様子が印象的だった。

校長先生の話では、先生方、地域の方にも日本で言う道徳教育の講義を行っており、地域育成にも力を入れているという視点到気付かされた。日本でも、学校から地域へのつながりが広がるように意識して情報発信、共に活動する場を設定していけたら良いと考える。

■ 8月3日(木)

時刻	スケジュール	備考(☆出迎・案内者)
朝	<朝食>ホテル内	
09:25	ホテル発 JAANへ	★同行：ティミルシナ 職員 ★通訳：サラさん
10:00	⑤帰国研修員同窓会(JAAN)事務所 ◇挨拶 ◇JAANについて説明 ◇経験談共有① JICA事務所コンサルタント ◇経験談共有② JAAN会長 ー休憩ー ◇経験談共有③ JAAN事務局長	★案内：ムシャーールさん ※日本語で発表 ★バッタチャンさん ★ラムさん ★シャクヤさん
12:05	<昼食> 研修員と一緒に弁当	
13:30	移動 アサン地区へ	
14:00	⑥アサン地区・タメル地区 ◇アサン地区からタメル地区まで徒歩移動 ◇2つのグループに分かれ散策・教材収集 A班...ティミさん・久世さん+受講者5人 B班...サラさん・後藤さん+受講者5人	
17:15	移動 タメル地区発ホテルへ	
17:30	ホテル着	◆ Hotel Manaslu (4泊目)
夜	<夕食> ♪WS 本日のふりかえり ・ワークシート「今日、見つけたこと、わかったこと」	

⑤ 帰国研修員同窓会 (JAAN) 事務所



● 河村知里

話をしてくれた3名とも、日本との交流を始めたきっかけはネパールに来た日本人との出会いがあったためであり、ネパールをより良い国にするために日本を訪れていた。ネパールに帰った後も、日本とネパールのつながりが途切れないように、活動を続けている。そのおかげで、日本人がネパールに来て何か活動を行う際は、ネパール側からの協力が得られやすくなっているということを知った。

研修員の1人バッタチャンさんから日本とネパール、それぞれの良さや課題を学んだ。特に課題についての話が心に残っている。日本は「内向きになっている。もっと世界を見る必要がある。」こと。ネパールは「出稼ぎに行ってしまう、帰ってきて自国のために働く人を育てる」こと。バッタチャンさんは課題解決のためや、日本とのつながりを強くするために活動をしている。私も課題を解決するために、教員として今回学んだことをしっかり学校で継続して伝え続け、将来世界のため、自国のために行動できる生徒を育てようと強く思った。

● 竹内綾音

初めにお話をしてくれたムシャールさんは、日本の農業技術をネパールに持ち帰った。元々、国家公務員だったムシャールさんは、日本の愛媛へ渡り、みかん農業から多くの事を学んで帰ったという。ネパールに帰ると、若者へ農業技術を伝える取り組みを行い、農業の担い手を育てるという活動を行った。次に、地域の人にも、野菜の作り方をレクチャーし、どうすれば上手く野菜を育てることができるのかを教えたという。その後、JAANの活動で農業を行い、飲み水の普及活動にも力をいれているとのこと。日本で学んだ技術で、ネパールの発展を更に推し進めたことがわかった。他の方からは、ネパールでは水力発電を使っていること、ネパールに電気も水道も普及していない頃日本に来てこのJAANの元の活動が始まったことをお聞きした。それほど前から、活動を続けてきてくれた人々がバトンを渡して、日本とネパールを繋いでいたことを実感した。また、日本の技術がこのようにネパールで活かされている事を知り、とてもうれしく感じるとともに、日本も発展し続けなければと思った。

⑥ アサン地区～タメル地区 散策・教材収集



● 鈴木友紀

食品、衣料、香辛料、お茶、装飾品、雑貨などを扱う、多数のショップが続く長い通りには、どの店舗にもたくさんの品物が並べられていた。マネキンが足ではなく首で固定されていたことが衝撃であったが、店舗の上からも展示されており、お客の目を引くディスプレイになっていた。人を運ぶ自転車のような乗り物（自転車タクシー）、伝統的な楽器を売り歩く人、青空の下足踏みミシンで修理する人、靴磨きをする人、商品を頭から下げて運ぶ人、野良犬、補強の必要な建物等、ネパールの人、仕事、物で溢れかえっていた。布製品になると高額なものもあるが、低価格の商品も多い。その一方で、働けずに路上で眠ってしまう人、自分の体の一部が機能しないことでお金をもらおうとする人も見られ、生活に苦しんでいる人々の様子にも気づかされた。

貧困が見え隠れするネパールの現状について知ることは、世界の様々な問題について理解を深めることができるよい機会となると考える。理解を深めた上で、自分達の身近な生活とどのように結びついていくのかを、児童と共に紐解いていくことまで授業で取り扱っていくことが大切である。

● 西村学

鳴り響くクラクションの音、行き交う人やバイク、人の群れ。現代的なファッションの人もいれば、伝統的な民族衣装に身を包んでいる人もいる。おそらく宗教的な意味であろう目を引くような化粧をした老人、田舎から作ったものを売りに来たと思われる大きな荷物を背負った人…立ち並ぶ店先には日本でよく目にするブランド名が書かれたものが信じられないような値段で展示してある。喧噪と混沌、過去と現代、嘘と真実…全てが緋い交ぜになったような場所だった。今まで見たことのないような場所であると同時に、どこか懐かしい感情を呼び起こす場所でもあった。野菜や香辛料、衣服などの商品は店先から奥まで所狭しと並べてある。相手の顔を見て値段を尋ね、交渉し、必要な量だけ買う。同じ物でも買う人が違えば値段は違う。手で紙幣を渡し、物を受け取る。当たり前な光景なのに異国だからか「買う」という行為の意味を考えさせられる。この自分のお金がこの人の今日や明日や未来の生活を支える一部になると改めて教えられた。

■ 8月4日(金)

時刻	スケジュール	備考(☆出迎・案内者)
朝	<朝食>ホテル内 チェックアウト	
08:45	★中間ふりかえりミーティング ・ワークシート「日本とネパールとのつながり感じたこと考えたこと」 ・ワークシート「ホームステイでしてこようと思うこと」	★ファシ：久世さん @ホテル会議室
10:00	自由時間	
11:00	ホテル発 ホームステイ地区へ	★同行：ティミルシナ 職員 ★通訳：サラさん
12:00	<昼食>	
13:00	移動	
13:30	⑦Kali Devi Secondary School ◇挨拶	★案内：ビルマさん
13:45	◇受講者による体験授業・交流会 ・6年16名...石川・森谷 ・7年10名...大島・西村 ・8年25名...竹内・鈴木 ・9年11名...沖・渡邊 ・10年18名...河村・荻	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p><主な内容></p> <p>自己紹介 日本・日本語紹介 日本の遊び アンケート (夢) ネパールイメージ 手紙交流、書道</p> </div>
15:00	◇敷地内見学・質疑応答	
16:00	徒歩移動	
16:20	⑧ホームステイ組合による歓迎会その1 ◇挨拶・お茶 ◇葉の皿づくり	★案内：ホストファミリー ☆NGO職員合流
18:00	⑨ホームステイ ~8/6(日) 12:00 ◇原則1人1家庭	◆ Homestay (2連泊)
夜	<夕食>ホームステイ先	

⑦ Kali Devi Secondary School



● 河村知里

この学校は、地方にある公立学校のため、都会にある私立学校との差は大きく感じた。学校施設を充実させるために、多くの NGO が協力し設立できたと知った。低学年では、ドイツの教育方法も取り入れて教育を行っていた。設備は都会の私立学校も同じだったが、パソコンなど情報機器が少なく、教育を充実させるためにもっと欲しいと話していた。子どもたちの勉強への熱は都会の子達と変わらずとても高く、英語のスピーキング力も日本より上と感じた。交流授業では、筆ペンで自分の夢について書いてもらったが、日本でいう中学3年生男の子の多くが「軍人になりたい」と書いていて驚いた。本人たちから理由は聞けなかったが、ネパールでは2006年まで内戦があり、地方は強く影響を受けたと聞いた。もしかしたら、それが影響し生徒たちは「軍人になりたい」と書いたのかもしれない。しかし、内戦が影響しているのなら、とても怖いと感じた。

● 森谷朋香

この学校は首都カトマンズから離れた、山に囲まれた田舎の学校であった。日本の NGO も建物の建設等の支援をしていると聞いた。この学校では、1～3年生と4～6年生に分かれて、マルチグレード・マルチレベルの授業をしていると聞いた。自由進度学習のようなやり方で、同じ教室でも個別の進度でプリント等を使って学び、カリキュラムをこなしているようだった。各教室には、2～3人の先生が入り、指導しているようだった。訪問した別の学校では一斉授業を行っていたので、ネパールにも、様々な授業スタイルがあるのだと感じた。このような学習スタイルのおかげであるのか分からないが、子どもたちに日本の文化を伝えるために折り紙で鶴の折り方を教えていたとき、自然と教えあったり分からないことを聞いたりする姿があった。そのような協力しあって学んでいく姿勢が素敵だと感じた。

⑧ ホームステイ組合による歓迎会その1 (挨拶・葉の皿づくり)



● 西村学

到着すると、組合長や民族衣装に身を包んだ多くの女性たちが笑顔で歓迎のティカを自分たちの額につけ、花で作った首飾りと手造りの花束をプレゼントしてくれた。席に着くと18歳のラミットの流暢な英語での歓迎のスピーチが始まった。葉で作られた皿にのったポップコーンや漬物、ミルクティ。目に映る物や人、全てに温かさを感じずにはいられなかった。コロナの影響で村として団体を受け入れるのは3年以上ぶりで、自分たちが訪れたことに対する喜びをスピーチや表情、もてなしから十二分に感じる事ができた。歓迎の式が終わると、先ほどふるまってくれた器の皿作りに挑戦した。葉を指で巧みに折り曲げ、重なった箇所を竹ひごで留めていく。不器用な自分にも笑顔で根気よく手本を示してくれた。誰かの皿が完成するたび、拍手と歓声が沸き起こる。体を動かして何かを一緒に作るという行為で村の方と少し心が近づいた気持ちになる。そうして笑顔に包まれながら、各々がホームステイ先と分かれていき、歓迎会は終わりを告げた。

● 渡邊亮祐

ホームステイ先の村に行くと、その入り口に「WELCOME PATLEKHET」と書かれた看板があった。その看板を見ただけで、歓迎されていると嬉しくなる自分がいた。歓迎会の会場に行くと、村の方々が並んでお出迎えをしてくれた。ティカを塗ってもらい、花の首飾りをかけてもらった。ネパールでは、訪問する先々で温かい歓迎を何度も受けることができ、その度に温かい気持ちと深い感動を覚えた。

歓迎会の中では、葉の皿作りを行った。この葉の皿はネパールの伝統的なもので、今でも結婚式などのお祝いの場で必ず使われるということだった。実際、アサン・タメル地区の散策の中でも何度か見かけた。

葉の皿作りでは、葉を折りたたみ、そこに竹を細く切ったものを刺して皿の形を作るのだが、非常に難しく何度も竹を折ってしまったり、葉を破いてしまったりした。その度に、村の方々が笑顔で修正してくれたり、やり直すのを手伝ってくれたりしてくれた。現地の方々が作ったものに比べると情けないような葉の皿になったが、村の人々の温かさを強く感じる時間になった。

⑨ ホームステイ



● 石川敬祐

ホームステイを通じて、様々な価値観をアップデートすることができた。特に感銘を受けたのが、「幸福」に対する価値観。パパとママと同じコミュニティの人たちと2時間ほどベンチに座り、きゅうりを食べながらお話しているとき、「どんなときに幸せを感じるか」と尋ねると、パパは、「自分の身近なことだよ。ママとおしゃべりしているとき、この景色を眺めているとき、食べ物を食べているとき、コミュニティの人たちの笑顔が見れたときかな」と満足げに答えてくれた。パパは、自分と同じ教員だったが、自分の方が物理的に豊かな生活をしている。しかし、幸せは目に見えるモノやコトだけではなく、もっと根底に存在するものだと改めて気付かされたと同時に、「豊かさ」とは何なのか考えさせられた。これからは、今ある生活、光景、モノやコト、そして、つながりがある人たちは決して当たり前ではないということを肝に銘じて、日々感謝を忘れず、自分の身近にある幸せにもっと目を向けていきたい。

● 大島俊介

ホームステイ先で面倒を見てくれた青年はホームステイの受け入れをする時に農村部の実家に帰省しているとのことだった。それは市街地でないと関心があるコンピュータや日本語の勉強ができないからだった。日本の現状と酷似していた。

農村部では大半の食事を自給自足で賄っていた。日本の山岳地域に見られる棚田が広がっており、傾斜地にはとうもろこしが作付けされる。使える土地はすべて使い、カボチャやゴーヤなどさまざまな野菜を育てる。家畜の牛にもそれらの作物を与え、ミルクをもらう。農道に生える雑草を刈るのは牛の餌のため。牛のミルクは飲用と販売用で、販売したお金で鶏を購入する。目の前で捌かれる鶏を余すことなくいただく。

ネパールでは食事を食べる前に挨拶をする文化があったので、「いただきます」というあいさつを教えた。普段から自然の恵みを十二分に利用して生活する農村部の住民とともに、命をいただくことへの感謝の気持ちを共有すると共に、命の有り難さを再確認する機会になった。

● 荻光平

主に周辺の散策と調理の手伝いをした。散策途中に牛やヤギなどの放牧をしているおじさんに会った。「どこからきたのか?」と気さくに話しかけてくれ、写真をとらせてもらってもいいかと尋ねると快諾してくれた。近所の大きな木の周りには、ベンチがいくつかあるような公園になっており、神様がまつられている。大変見晴らしがよく、少しの時間いる間にも何人か村人が通り、世間話を楽しんでいた。公園の周りで牛やヤギに草を食べさせていた。穏やかにのんびりと過ごしている様子が見られて、こちらもとても温かい気持ちになった。ホームステイのキッチンも、土間になっており地べたに座り込んで作業している。また直火のかまどを使用していた。一応ガスもあるが火力があまり強くないと言っていた。キッチンに水道の設備はなく、水がめに山の湧き水を汲んで料理や洗い物に使っていた。インフラの整備が十分に整っていない面もあるので、いろいろな家事に時間が掛かってしまうが、家族みんなで食事の準備をする時間は貴重な団らんの時間になっているのだなと感じた。

● 沖祐美帆

ホームステイにおいて最も印象的だったことは、人と人とのつながりの強さ、村の結束力である。滞在した家庭は、母・父・娘の3人家族であったが、絶えず村の人々が入り出りしたり、様々な人が話しかけてきたりした。例えば、ホームステイファミリーがマンゴーなどの果物を頻繁に出してくれたのだが、その際にもいきなり家族ではない近所の人が入ってきて、一緒になって果物やおやつを食べたり、話をしたりした。また、歩いていると村の人同士がいつでも挨拶をしあったり、食べ物や道具を共有したりしている様子を見ることができた。日本では、他人同士が挨拶したり、勝手に家に入ったりせず、プライバシーをととても重視している印象がある。もちろん、日本のプライバシーを大切にす文化も尊重されるべきだし、それも大切だと思うが、ネパールのホームステイ先での人々のつながり、結束力はとても温かみを感じる光景であった。

● 河村知里

私がホームステイをした家族は、タメル民族の家庭だった。祖父母、父母、子ども3人の3世代家族で過ごしており、英語が通じるのは3人の子どもだけだった。年齢が上になるにつれ英語を話せないという状況で、英語で子どもたちを通して祖父母や父母と交流をした。子ども3人は地域の学校ではなく、少し離れた都会の学校に行っていた。それに対して、ホームステイ先の近くに住む従兄弟は地元の学校に通っており、英語力は低い、地域のつながりは強かった。特にそう感じたのは、子どもたちと地域探検をした際、同い年くらいの子もたちが遊んでいても一緒に遊ばないホームステイ先の子に対して、従兄弟の子は積極的に交流していた。都会の学校へ行けば英語力は高いが、地域のつながりは薄れるのだらうと実感した。

祖母は朝から家畜の世話や畑仕事など、朝から晩まで働いていて大変そうだった。様子を見てみると、家事や家畜の仕事は祖母の役目、畑仕事は祖父の役目という形だった。LP ガス以外は自給自足できており、昔の日本のように感じた。

● 鈴木友紀

2泊3日のホームステイでは、小学3年生の娘さんとの時間が印象的であった。一緒に宿題をし、英語だらけの理科の教科書に驚いたが、それをすらすらと読み上げていることにさらに驚愕。英語力の高さを実感した。祖母のスマートフォンも使いこなすが、外でのボール遊びや近くの寺院のある丘での名もない遊びも楽しんでおり、自由時間の過ごし方については、日本の子ども達に近い部分もあると感じた。

11ヶ月の息子さんを中心に家族の活動が動いており、その一員として私もお世話をさせてもらった。また、母、娘さんと近所を歩けば、皆が話しかけお互いを知っている様子が見えてきた。自然の果樹、鮮やかな花々、田・トウモロコシ畑、人と自然に囲まれたかつての日本の風景が蘇る。母や祖父母のさりげない気遣いが本当

に嬉しかった。苦労はあるのだけれど、温かい幸せな生活の中に共存させてもらえた気がした。

だからこそ、この家族や地域の人々が、さらに幸せに快適に暮らしていくために、今の日本がかかえる課題と照らし合わせながら、何が課題で、何が必要となるのかを考えていくことが大切である。

● 西村学

自分を迎え入れてくれたラピンドゥラー家は妻、娘、息子の4人家族だった。4人とも本当に親切で、これ以上ない心遣いをしてくれた。その心遣いと雄大な景色のおかげで、自分にとってホームステイは心が解放され、洗われ、救われるような素晴らしい時間だった。拙い英語のため、その思いを自分は一家に十分伝えることができなかつたのがもどかしく、心残りである。滞在した約2日で、自分は「お金を使う」ことについて真剣に考えさせられた。夫妻がより脂肪分の高い牛乳を得るための労働を間近で見せてもらったが、一日に得られる収入は約800円。日本人の自分から、それは労働の対価として正当な価格とは思えなかつた。同時に、自分は価値にあったお金の使い方ができているのか自問自答せずにはいられなかつた。800円というお金の価値基準が生まれたこと。これは自分の今後の人生の「お金を使う」ことについての指針となると感じている。ラピンドゥラー家や村が温かい営みや繋がりをこれからも保ちながら、より幸せになってほしいというホームステイ時の願いを、自分はずっと心に留めていたい。

● 森谷朋香

ホームステイでは、特に、たくさんの人の温かさに触れた。受け入れてくれた家族は、私が過ごしやすいように部屋を整えてくれたり、食事の準備や農作業のお手伝いなどをやらせてくれたりした。また、つたない英語でも必死に理解してくれ、話すときも分かりやすい簡単な英語で話してくれた。おかげで楽しく快適に過ごすことができ、貴重な体験もできた。さらに、地域の支え合いも感じた。特に、子どもを地域全体で育てていると強く感じた。近所の子が、一緒に散歩しながら、村の農作物やお寺のことを丁寧に説明してくれたことがあり、地域全体で育てているからこそ、このように外国人に対しても堂々と、そして紳士的な振る舞いで村を案内できるのだと思った。他にも、近所の子たちと折り紙で遊んだり、メヘンディという、すぐに消える入れ墨のようなものをしてもらったりした。このような地域の人との交流もたくさんあり、人の温かさをたくさん感じた。

● 渡邊亮祐

ホームステイでは、三人家族のホストファミリーと一緒に生活した。ホストファミリーは、初めから温かく私を迎え入れてくださり、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。ホストファミリーの家は、いくつかの家が集まった集落にあり、そこにはたくさん子ども達が住んでいた。このホームステイで最も印象に残ったことがこの近所子ども達との交流である。「この家に行けばマンゴーが食べられる」「ここは雪解け水で冷たくて美味しいんだよ」など、子どもたちの村の中での生活を垣間見ることができ、とても貴重な体験になった。子ども達と過ごす中で感じたのが、地域コミュニティの重要性である。ホストファミリーの家に朝食の時間になると近所子ども達が集まり一緒に朝食を取ったり、自分の子どもでなくても叱るときには本気で叱ったりするなど、地域で子どもを育てている姿が見られた。子ども達もそんな大人の姿を見て、自分の仕事や役割を果たしたり、大人になったときに、また近所子ども達を大切にしたりするのだと思う。そんな温かな地域のつながりを感じたホームステイだった。

■ 8月5日(土)

時刻	スケジュール	備考(☆出迎・案内者)
朝	<朝食>ホームステイ先	☆同行者巡回
昼	<昼食>ホームステイ先	
17:00	⑧ホームステイ組合による歓迎会(その2) ◇民族衣装に着替え ◇写真撮影 ◇ネパールの民族踊り・歌	★案内：ホストファミリー
20:00 夜	移動 ホームステイ先へ <夕食>ホームステイ先	◆ Homestay (2泊目)

■ 8月6日(日)

時刻	スケジュール	備考(☆出迎・案内者)
朝	<朝食>ホームステイ先	
昼	<昼食>ホームステイ先	
11:35	ホームステイ組合集合→ラブグリーンへ	
13:30	⑩現地NGO「ラブグリーン・ネパール」事業地 ◇事業地視察 ・モデル圃場、農家	
14:10	移動 事務所へ	★案内：Mr. Bima 鈴木倫子さん
14:30	◇ラブグリーン事務所で事業説明	
15:45	移動 カトマンズのホテルへ	
18:00	ホテル着 チェックイン <夕食>	◆ Hotel Manaslu (1泊目)
夜	♪WS 本日のふりかえり ・ワークシート「ホームステイで学んだこと」	

● ⑧ホームステイ組合による歓迎会その2（サリー試着、歌・踊り）



● 森谷朋香

歓迎会が始まる前に、ホームステイ先の伝統衣装を着せてもらった。会場に行くと、各々の家の伝統衣装に身を包んでおり、祭りの前のワクワク感があった。会が始まると、民族舞踊や伝統的な歌を披露して下さった。この村では様々な民族がルーツの人たちが一緒に暮らしているようで、それぞれの民族の踊りや歌があった。違う民族でも、それぞれ全く違う踊りや曲調でも、その場にいるみんなで同じ楽しさを共有し、良さを認め合い、仲間として共に生きているという雰囲気伝わってきた。それだけではなく、お客さんである私たちも一緒に踊りに参加し、楽しんだ。また、日本の踊りである「ソーラン節」を披露し、おおいに盛り上がった。言語も、人種も、環境も全く違う人たちが音楽を通して心を通わすことができたひとときだった。

● 石川敬祐

歓迎会に出かける前、パパが民族衣装のシャツやジャケットをととても丁寧にアイロンをかけてくれている姿を目撃した。自分たちには馴染みのない衣装だったが、ネパールの人たちにとって特別なものだという想いを受け取った。その想いを感じながら民族衣装に着替え、テンションが上がったまま歓迎会に参加すると、待っていたのは、ネパールの民族踊りと歌のパフォーマンスだった。小学生以下の女の子たちのリズムよき踊りから始まり、楽器を使った踊り、男性だけの踊りなど、様々な踊りと歌を披露してくれた。途中からは自分たちも一緒に踊りに参加した。その空間は、日本人とネパール人、男性と女性、年齢など様々な差異を取り除いたユートピアのようだった。言葉を介さなくても互いの心が通じ合うような、何とも言えない居心地のよさを感じた。汗だくでホームステイ先に戻り、その余韻に浸りつつ夜景を眺めながら外の水シャワーで頭や身体を洗ったあの時間は、生涯忘れないだろう。

⑩ 現地 NGO 「ラブグリーンネパール」 事業地



● 渡邊亮祐

ラブグリーンネパールは、現地で農業支援をしている NGO である。ネパールでは、農業が主な産業となっているが、農家の収入は低く、また山岳国であるという地理的な不安定さも合わせて農業従事者が少なくなっている。また、農業と環境保全の両立という考えが浸透していないため、森林破壊などの環境問題も発生している。その中で、ラブグリーンネパールでは、環境保全の活動と農業支援の両立を目指し、様々な支援を行っていた。お話を伺った中で、特に印象に残ったのが現地スタッフの鈴木さんから伺った「人を育てる」支援の重要性である。「やってあげる」支援では、支援者がいなくなった時点でそれまで積み上げてきた支援が水の泡になってしまうことが多い。しかし、現地のモデルリーダーを育てることで、現地に支援者の思いを受け継ぐことができ、その後も活動が展開できる。実際、ラブグリーンネパールのスタッフの中には、子ども時代にラブグリーンネパールの支援を受けた方がいらっしゃるなど、支援のあり方について改めて考える機会になった。

● 大島俊介

就労支援と持続可能な農業方法の構築のために活動されていた。印象的だったことは支援が一方通行にならないように現地のニーズに応えると共に、地の利を生かすことを優先されていたことである。また、持続可能で循環型の農業のシステムを現地の人に指導することで、指導者の育成や就労支援につながるということや、資金としての援助だけでなく苗を提供するところから始めることなど、栽培技術をその土地に根付かせるための取り組みがなされていた。さらに、家畜の糞尿からバイオガスを発生させ発電したり、糞尿から肥料を作ったり、活動は多岐にわたっていた。

しかし、安定した収入を得られないことから、農業離れが進んでいるということも事実であった。そのため、少しでも多くの収入を得るために有機栽培という付加価値をつけて販売することで、高値で取引されるような戦略も立てられていた。

このことから、限られた期間の中で、現地のニーズに応えながら段階に合わせた支援・協力をしていくことが大切であることを学んだ。

■ 8月7日(月)

時刻	スケジュール	備考(☆出迎・案内者)
朝	<朝食>ホテル内	
09:00	ホテル発 Arunodaya校へ	★同行：ティミルシナ 職員 ★通訳：サラさん
10:00	⑪e-Education(映像教育)実施学校 [Arunodaya Secondary School] ◇挨拶 ◇授業参観 ◇ネパール人教員と意見交換	★案内：シェルパ絢子さん
12:30	移動	
13:00	<昼食>	
13:30	移動	
14:00	⑫現地NGO CWIN(Child Workers in Nepal) ◇挨拶 ◇事業説明	★案内：Mr. Kumar
16:30	移動	
17:40	ホテル着 ♪WS 本日のふりかえり ・ワークシート「NGOの人たちから学んだこと」	◆Hotel Manaslu (2泊目)
夜	<夕食>	

⑪ e-Education (映像教育) 実施校「Arunodaya Secondary School」



● 石川敬祐

「最高の教育を世界の果てまで」をミッションとして掲げ、都市部と農村部の深刻な教育格差という課題の解決を目指して、プロジェクトを進めていた。具体的には、理数教育の指導力向上を目指した教員研修を行ったり、YouTube による授業動画の発信ならびに活用を行ったり等、ICT 機器を活用した先進的な取り組みを行っていた。ICT 機器のさらなる普及だったり、準備に手間がかかったり等、ハード面での課題はまだまだあると感じたが、児童生徒の学びに対するモチベーションアップに一定の効果を上げていると学んだ。また、現地の先生と対談する中で印象に残ったのは、児童生徒はどんな大人に育ってほしいかという願いである。その先生曰く、公立に通う児童生徒は貧しく、将来について考えられないので、自分でどのように生きていくのかを自己決定し、歩いていってほしいと言っていた。このことは、自分が関わる児童生徒にも当てはまりうることだと思う。どのように生きていくのかを考えさせる役割が学校教育にはあると学んだ。

● 沖祐美帆

e-Education 実施校「Arunodaya Secondary School」で印象に残ったことは映像教育を実施する上での設備である。校舎内には、複数台の最新式のプロジェクターが設置されていた。一方で、電灯がないため教室内は薄暗い印象であった。また、プロジェクターが設置されている教室には、施錠できるようなドアや窓はなかった。日本の学校では、電灯や施錠設備は当然のように備えられていて、高価な機器がある部屋は必ず施錠する仕組みになっている。これらのネパールと日本の相違点にはとても驚かされた。また、映像授業を行う上での問題点として、パソコンの台数が足りないという話を聞いた。パソコンの台数が少ないために、なかなか徹底した映像授業を行うのが難しいということであった。さらに停電もあるため授業の途中でプロジェクターが使えなくなるというトラブルもあった。これらのことから、映像授業を行っている一方で、まだまだ課題はたくさんあるのだと気づいた。

⑫ 現地 NGO 「CWIN」 (Child Workers in Nepal、シーウィン)



● 竹内綾音

ネパールでは、今でも児童労働、人身売買や性犯罪があるという。子供たちの安全や権利を守るためにこのCWINの活動が行われている。チャイルドネットワークもあり、「1098」に連絡をすればいつでも電話で相談できるようになっている。2台の電話で対応を行っていたが、1日に何件も被害の電話がかかるということは、見えないところでまだ危険を感じている子供たちがネパールにいるという実態がわかった。また、インターネットでの詐欺やそれに関わる自殺なども増えていると聞き、日本も他人ごとではない内容の問題であると感じた。

ここでは、被害にあった子供たちのケアを行い、生活できるように支援していた。子供たちは私たちの事を見ると「こんにちは」と日本語で挨拶をして、にこりと笑って出迎えてくれた。彼女たちから、恐怖や被害を受けた様子は感じられず、ここで穏やかに過ごす事ができているのだと感じた。ネパールの子供たちの権利を保護するこのような活動があると知り、日本でももっと関心を持たなければいけないと感じた。

● 大島俊介

ネパールには児童労働や性的虐待、人身売買、早期結婚など、子どもの人権を侵害する問題が蔓延っていた時代があった。35年前大学生のグループが人権問題に声を上げたことをきっかけに少しずつ改善されていったという。しかし、現在も1日に100件近い相談の電話が入っているそうだ。

CWINでは、電話によるヘルプラインを開設しており、相談窓口や一時保護ができる施設の運営を行なっている団体である。訪問した保護施設では、一時的に保護された子ども達が笑顔で生活している姿に出会うことができた。日本語を勉強しているんだと恥ずかしそうに話してくれた彼女が、心から笑っていてくれることを願いたい。

これらの人権侵害の背景には貧困問題が関わっており、子どもを騙してお金を受け取る人の中には、親も含まれるのだという。35年間の中で残忍な犯罪は減ったとはいえ、未だに苦しんでいる子どもは多くいるだろう。数は減ったがゼロではないということに、こんなに苦しい気持ちになったのは初めてだった。

■ 8月8日(火)

時刻	スケジュール	備考(☆出迎・案内者)
朝	<朝食>ホテル内	
09:00	ホテル発 ACP工場へ	★同行：ティミルシナ 職員 ★通訳：サラさん
09:50	⑬-1 ACP(Association for Craft Producers) Nepal工場 ◇挨拶 ◇工場内見学、女性職人数名と対話 ◇事業説明	★案内：Mr. Pawan
12:30	移動	
13:20	<昼食>Dhukuti 隣	
14:25	⑬-2 Dhukuti (ACP Nepal直営店) ◇ショッピング	
15:25	移動	
15:50	ホテル着	☆通訳ここまで
16:00	★最終ふりかえりミーティング ・ワークシート「援助とは何か」 ・ワークシート「教材作り展望：〇〇を使って～～を考えていく」 ・ワークシート「JICAネパール事務所報告会準備」	★ファシ：久世さん
17:30	終了、身支度後、徒歩で懇親会お店へ	
18:00	⑭JICAネパール事務所職員等との懇親会 ◇事務所有志	会費制
20:30	終了→徒歩でホテルへ	◆ Hotel Manaslu (3泊目)

⑬ ACP (Association for Craft Producers) Nepal 工場、直営店「Dhukuti」



● 荻光平

この工場を訪問するまで、フェアトレードという言葉の表面だけを捉え、ある商品を適正価格で取引できるようにしているという程度の理解しかなかった。この工場では、職人に対して適正な賃金だけでなく、研修制度や福利厚生といった支援制度を整えていることに驚いた。職人さんの労働条件は、年々改善が進んでいて、工場が抱える従業員もどんどん拡大しているとのことだった。この工場で作られた商品を購入する人々の、フェアトレードに対する意識もどんどん改善していることも感じられた。フェアトレードが生み出すのは適切な労働条件だけではなく、伝統技術や文化の継承の場にもなるという点が印象的だった。伝統工芸の技術を受け継ぐ人々は、ネパールでは、日本と同じように減少傾向にある。その理由は、収入面での不安定さである。収入は生きていくためには、切実な問題であるし、農業と同じように敬遠されがちな職業であるのは理解できるが、伝統技術、文化は、衰退し失ってはいけないと思う。フェアトレードの恩恵は本当に多角的・多面的であることを実感できた。

● 鈴木友紀

1984年に設立されたACPは、技術の進歩とスタッフ・敷地・市場等の拡大を繰り返し、2023年に3技能領域から18技能領域となった。フェルト、ガラス、木工、織物、編み物、陶器などの分野に分かれ、製品開発から、制作、検品、修理まで細かい作業が行われていた。編み物分野では、ある程度技能を持った女性がさらに技術向上を目指して取り組んでいるスペースもありさらなる人材育成に取り組んでいた。発注元の要望に合わせて、製品を丁寧に準備する職人の働きぶりがとても素晴らしい。また、色とりどりの製品の数々は本当に美しい。制作現場を間近で見たからこそ、直営店(Dhukuti)で並んでいる製品を見ると愛着がわき、その1つ1つの想いを感じて購入せずにはいられなかった。

この工場設立の経緯や、そこで働く人々の貧困脱却、生活保障、生活改善を可能としてきた現実を目の当たりにすることで、これまでの関係する方々の努力と成果に感謝しながら、さらに継続して少しでも貧困層の割合減少に向けて取り組んでいくことが必要である感じた。

⑭ JICA ネパール事務所職員等との懇親会



● 沖祐美帆

懇親会で印象に残った話は、「現地の人とのコミュニケーションの重要性」である。コミュニケーションをとる際に、英語で伝わったとしても現地の言葉を使ってコミュニケーションをとることで、現地の人との距離が縮まるという話を聞いた。また、現地の言葉をお話する際に、簡単な言葉であっても「現地のお話を話す」ということに価値があり、とてもお話しが盛り上がるという話を聞いた。これらのことから国際理解や異文化理解に重要なことは、その国の人に寄り添おうという姿勢であると感じた。もちろん、様々な言葉を流暢に話せるようになることは重要だと思う。しかし、それだけではなく、学ぶ姿勢や理解しようとする努力の大切さを学んだ。これらのことから、真の異文化理解とは、ただ知識を詰め込むのではなく、その文化に合わせた振る舞いをしていくことなのだと感じた。

● 竹内綾音

JICA ネパール事務所の飯塚次長、これまでネパールと一緒に周って来てくださったティミルシナ職員、千葉健康管理員、海外協力隊の榎本隊員など、この研修に関わってくださった方々と一緒に夕食を共にすることができた。榎本隊員は、コロナウィルスの流行が収まり、3年ぶりの協力隊としてネパールにやってきたとのこと。

レレ村に住み、ネパール語の習得をしているという。協力隊に参加することに勇気がいったのではないかと質問に、彼女は興味のほうが強いという話をしてくれた。好きなものを追いかけ、海外でボランティア活動を始めるその行動力や決断力に胸を打たれた。

ネパールの人々との関わりを、JAANの活動で聞いたように、榎本隊員もバトンをつなぐ一員となって日本とネパールの歴史を紡いでくれていると感じた。それは、協力隊だけではなく、私たち教師海外研修の仲間も、JICA ネパール事務所の職員の皆さんも、それに関わるすべての人たちが1人1人つないでいることをこの会で実感した。

■ 8月9日(水)～10日(木)

時刻	スケジュール	備考(☆出迎・案内者)
朝	<朝食>ホテル内	
08:45	ホテル発	★同行：ティミルシナ 職員
09:15	⑮-1 パシュパティナート寺院 ◇視察	★通訳：サラさん
10:00	移動	
10:30	⑮-2 ボダナート寺院 ◇視察	
11:30	<昼食>ボダナート寺院内	
13:00	ホテル着、休憩、チェックアウト	
14:10	ホテル発	
14:30	⑯ JICAネパール事務所 帰国前報告会 ◇司会・業務連絡 (ティミさん) ◇受講者から研修報告、集合写真、アンケート	★次長
16:45	終了→空港へ	
17:15	トリブバン国際空港 (カトマンズ) 着	空港コード：KTM
19:20	トリブバン国際空港 (カトマンズ) 発 (KE696便) ↓	[所要時間：6時間40分]
夜	<食事> 機内 (出発後)	
朝	<食事> 機内 (到着前軽食) ↓	
05:15	仁川国際空港 着 Terminal 2 ◇トランジット、ラウンジで休憩、食事 ♪WS 研修のふりかえり等 ・ワークシート「ネパール/日本のいいところ・共通するところ」 ・ワークシート「来る前のわたし、今のわたし」 ・ワークシート「学び合う仲間へ：みんながみんなのサポーター」	空港コード：ICN [所要時間：1時間50分]
10:40	仁川国際空港 発 (KE741便) ↓	空港コード：NGO
12:30	中部国際空港 着 Terminal 1 ◇検疫→入国審査→受託荷物受取→税関 ◇写真・動画データ、ネパールBOX教材の回収	★出迎：NIED伊沢・川合
14:00頃	解散！	

● ⑮-1 パシュパティナート寺院



● 西村学

パシュパティナートはネパール最大のヒンドゥー教寺院である。荘厳な数々の建物が立ち並び、神の姿が壁画として描かれている所もある。自分たちは寺に面しているバグマティ川で、川の水で故人の身体を清める場面、火葬されている場面に遭遇した。周りにはたくさんの旅人が歩いているし、旅人に商品を買わないかと声をかける現地の人も数多くいる。死は当たり前にある生活の一部なのだと感じた。近年、日本では死があまりにも遠い所に行き過ぎていると言われている。徐々に死に近づいていく姿を見ることで五感を通じて命そのものについて考えることができるのに、と。川での葬儀を見ながら、自分は祖父の死に寄り添った時間を思い出していた。あの時間は自分に先人への感謝を抱かせてくれた。パシュパティナートは自分の中に眠っていた記憶や思いを呼び起こしてくれる、そんな場所であるように思う。機会があれば、再訪してもう一度ゆっくりその光景を眺めてみたい。そうすることで自分の中にどんな感情が湧き上がってくるのかを確かめたい。

● 河村知里

ネパール最大のヒンドゥー教寺院で、シヴァ神を祀っている寺だと学んだ。日本の寺を想像して入ったが全然違い驚いた。敷地内には川が流れており、川の近くは火葬場となっていた。私たちが訪れた時も火葬が行われており、日本では葬式や火葬は建物内で行うが、誰の目にも入る外の場所で葬式を行なっていることに衝撃を受けたし、人が悲しむ姿を見て辛かった。火葬している近くでは、男性親族が髪を切っていた。髪を切るとは喪に服することだと知った。女性は1週間白い服装を着て喪に服すると聞き、日本だと白はお祝いのイメージで黒が葬式というイメージだが、ネパールでは逆なのだと思った。川の近くで火葬を行う理由を聞いたところ、遺体の足を川の水で清めるため。そして、火葬後に遺灰を川に流すためだと学んだ。日本だと遺骨をお墓に入れるが、ヒンドゥー教の多くは火葬で遺灰を川に流す事が主流のため、お墓が寺の中にも街中にもなかった。宗教によって、葬式の仕方や考え方も違うのだなと感じた。

● ⑮-2 ボダナート寺院



● 鈴木友紀

カトマンズ都市部を走行中、突如現れたボダナート寺院。世界のチベット仏教の中心地として有名な場所である。一步足を踏み入ると、ブッダのお骨が埋められている巨大仏塔が出迎えてくれた。ネパールの至る所で見かけたブッダの目のデザインは、この仏塔の上部に描かれているものであったことを知った。仏塔先端から四方八方へ、タルチョーと呼ばれる、白、赤、緑、黄、青の小さい旗の連なりが何本にも張り巡らされていた。白壁の部分を美しく保つため、白い塗料を人力で投げかけている様子に驚いた。仏塔を小さなマニ車が無数に取り囲んでいる。中心の礼拝場所まで1つ1つ回しながら進み、礼拝を終えるとまた、1つ1つ回していく地元の方の祈りの様子が見えた。仏塔の周囲は、お土産屋や飲食店が軒を連ねており観光客が買い物を楽しむ。その間に3階建ての寺院があった。2階は自由に一般参拝でき、3階は有料参拝の場所のようであった。3階から向かいの仏塔を眺めると仏塔の中の様子も見えた。

観光と参拝が見事に融合された場所となっていたが、荘厳な趣は、身が研ぎ澄まされる想いのする場所であった。世界遺産として今後も大切に保存されていく場所となっている理由が理解できた。

● 森谷朋香

ボダナート寺院は、白く巨大な建物に大きな目が描かれていたり、カラフルな旗が四方八方から中心に向かって掲げられてあったりして、独特の雰囲気を感じられた。仏陀のお骨が納められているといわれており、チベット仏教の聖地として、地元の信者は毎日参拝するとのことだった。また、世界遺産に登録されており、外国人観光客も多く、周りにある土産店や飲食店も賑わっていた。

⑩ JICA ネパール事務所 帰国前報告会



● 竹内綾音

『なぜ日本が途上国に支援するのか。』JICA ネパール事務所の飯塚次長から、ネパールに来て最初のブリーフィングで出された課題について、この研修の間考え出したそれぞれの答えをここで発表した。発表した全員の回答に共通していたのは、価値観の変化だった。私が出した答えは、まず「支援＝助けてあげること」だと勘違いしていたことに気づかされたことだった。途上国というイメージから、安心や安全からかけ離れ、大変なイメージを持っていた。しかし、実際にネパールを見てみると、多様性を受け入れ合い、海外志向を持って学業にも熱心な人々に出会い、現地の人々の心の豊かさを感じた。外国語を教える立場として、海外に目を向けている方だと思っていた私でさえ、このことに今気づいた。他の日本人は海外に目を向けることができているだろうか。また、海外の問題を日本の問題として、考えることができているだろうか。海外の問題は日本の問題であり、人類の問題であることに気づかされた。日本が支援するのは、「助けてあげる」ではなく「助け合い」であること。回りまわって自分事の問題であると気づかされた。

また、最後に課題を貰った。『何を達成するために、教員をするのか。』といったものだ。これを考え続けて日本に帰って行動に移したいと感じた。

● 渡邊亮祐

報告会では、改めてこの研修での学びの大きさや、チームネパールと出会えた喜びを強く感じた。この報告会では、一人一人が研修で学んだこととあわせて「日本が途上国に支援を続けることの重要性」について考えを述べた。その意見交換の中で感じたことは、「支援と教育は同じ」ということである。この研修を通して出会った様々な支援に尽力される方々が共通して話されていたことが「人を育てる」ことの重要性であった。やはり、現地のリソースパーソンを育てなければ、支援されたことが持続されず、支援が単発の打ち上げ花火になってしまう。そのためにも、支援は現地のニーズを把握し、支援者と現地の人々の二人三脚で進む必要がある。これは、教育も同じであると思う。私たちは、人を育てる仕事をしている。子ども達は、私たちを通してネパールやここで出会った人々に出会い、それぞれの学びを得ることができる。そうすることで、世界に目を向け、世界のために尽力したいと考える子どもも生まれるだろう。研修を通して改めて教師という仕事の良さを実感することができた。

● ネパールでの食事



● 大島俊介

ネパール式小籠包「モモ」やネパール式焼きそば「チャウミン」などのネパール料理、マンゴーやバナナなどの果物など、安価で楽しむことができた。その中でもやはり強調すべきはネパールカレー「ダルバート」である。ダル（豆のスープ）とバート（ご飯）を、タルカリ（野菜のおかず）やアチャール（漬物）と一緒に一つのプレートに盛り付けたもののことを言う。多民族国家であることもあり、民族の名前がつけられたカレーもたくさんある。

ヒンズー教徒は手で食べることが一番清浄だと考えられている。食器よりもよく洗った手の方が清潔だと考えられているからである。ホームステイで初めて挑戦した手で食べたダルバートは、食器で食べたダルバートよりもありがたく感じた。命をいただいている感じが手を使うことでより伝わったのではないかと思う。

● 石川敬祐

ネパール料理と聞くと、カレー、スパイシー、ナンといったイメージをもっていたが、野菜を中心とした私たち日本人の口に合う料理にたくさん出会うことができた。まず、私たちが抱くカレーというより、豆のスープやポタージュのようなダルとアチャール（漬物）、おかずのタルカリ、そしてバート（ご飯）がワンプレートとでセットになった「ダルバート」という食事を一番多く口にしました。チキン以外は、おかわり自由ということで、お店やホームステイ先でも何度もおかわりを勧められた。アチャールは、スパイシーなものもあったが、ダルと共にご飯と混ぜて食べると、とてもおいしかった。また、ナンに似ている「ロティ」（クレープのような全粒粉の無発酵パン）や「アルプラタ」（ロティにつぶしたじゃがいもを挟んで揚げ焼きしたもの）もダルバートと共に食べるが多かった。そして、最も気に入った料理は、「モモ」（野菜やひき肉を包んで蒸したり、揚げたりしたもの）である。牛肉は食べてはいけないが、水牛は食べていたのが不思議だった。

● 宿泊したホテル



● 森谷朋香

ホテルの玄関にマンホールのようなものがあり、話を聞くと、ヒンドゥー教の神を表したものであった。他にも神の銅像、絵画、壁や柱の装飾など至る所に、神をあらわしたものが多くあった。その神の姿がさまざまで、動物の姿や、鬼のような姿、人間の姿だけど腕がたくさんあるものなどがあつた。そのようなものを発見していくたびに、神の姿にも多様性があるのだと感じた。山には山の神、水には水の神のように、古来の日本の神道に似ているのかもしれないと感じた。1つの絶対的な神の存在だけでなく、いろんな神がいてそれぞれに面白い特徴があり、どれも大切、という考え方が素敵で印象に残った。

● 西村学

「郷に入らば郷を楽しめ」自分たちが決めた出発前の約束の一つである。自分はホテルで何度もこの言葉を思い出し、言い聞かせた。ホテルの外観は歴史を感じさせる素晴らしい造りで、従業員の方々の対応も申し分ない。しかし、日本のホテルを基準とすると、気になる点は多々出てくる。シャワー、虫、停電、部屋ごとの設備の違い…でも、この不便を楽しめばいいのだと思うと、自分の中で知恵や工夫が生まれてくる。それは自分に旅の力が少しいたように感じさせ、新しい自分に出会えた気分させてくれた。そんな話をもすけさんやオギくん、千明さんとしていると、昔の日本にあった「受け入れる力」「マイナスの中にプラスを見出す力」について教えられた。そう言えば祖父母も両親もこんな時、決して文句を言う人ではなかったな、受け入れる人だったな…と思い出す。今の自分の至らなさ、昔の日本にあって今の日本に失われつつあるかもしれないものを気付かせてくれたホテルでの日々だった。

● 街中・移動の様子



● 渡邊亮祐

私たちが多くの時間を過ごしたカトマンズは人ともので溢れていた。電線はまるでバーコードのように無数に絡み合っており、道路は車とバイクでいっぱいになっている。しかし、どこかゆったりとした空気が流れており、異国に来たのだということを強く実感できた。

特に印象に残ったのが、街の交通の様子である。信号はあるが、メンテナンスがされておらず光らないものがあり、交通量の多い場所では警察官が交通整理をしている。遅い車やバイクがあれば、クラクションをガンガンに鳴らしながら次々に後ろからバイクや車が追い抜いていく。交差点では、いつ事故になってもおかしくないようなタイミングで人も車もバイクも道を横断していく。日本では、まず見ることができない光景であった。交通量が多いため、大気汚染が問題になったり、道路も整備が行き届かない場所も多く、車が跳ねて進むような場所もあったりした。

● 荻光平

カトマンズでは、開発された街並み、近代的な建造物の中に古代の寺院や仏教の聖地などの歴史的な建造物が点在している。アサンやパタンの旧市街、市場は、昔ながらの雰囲気を残していた。一方で、現代的な一面もあり、賑やかなショッピングモールやおしゃれなカフェ、レストランが市内にある。交通渋滞やインフラの課題を感じる場面は多かった。夥しい本数の電線や道端に散らばるゴミなど途上国らしい風景も見られた。郊外にでると、時折、道沿いに商店が並び小さな町を作っている。盆地には住宅が集中しており、山の斜面には大自然と共存しているような家々が、ちらほら見えてくる。豊かな自然の中で、放牧されるヤギや牛、鶏などの家畜や棚田やトモロコシ畑、レンガ工場などが見られた。カトマンズと違い、ゆったりとした時間が流れているような感じがする。郊外の主要道路は、アスファルトで舗装された走りやすい道がほとんどだったが、一本脇にそれと未舗装路だった。

IV. 帰国後の研修報告

● 研修報告書

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

● 石川敬祐

私の現地研修に参加する目的は、「教育観や価値観、考え方を今一度見つめ直し、教員として人としての視野を広げること」であった。行く先々で出会った人・モノ・コトから様々な刺激を受けた。その中でも、教育観について見つめ直すと、日頃大切にしてきた「誰一人取りこぼさない授業（全ての児童生徒に学びの保障を）」は、教員として今後も大事にするべき教育観だと再確認できた。ネパールの学校現場を訪問して、児童生徒や日本語学校の学生さんたちの学びに対する真剣さと熱意は非常に素晴らしいものを感じた。一方で、都市部と農村部の教育格差や一斉授業のみ、机や椅子が一人一つずつない等の課題を目の当たりにし、日本の学校環境でこれまで学んできた、教員として教育に携われていることは当たり前ではないということを感じた。児童生徒一人一人を一人の人間として認め、尊重し、よりよい社会や未来を担う担い手を育む役目があるということを誇りに思いながら、今後も教員として尽力したい。



● 大島俊介

NGO や NPO、現地で活躍する方々の経験や語りから、多くの情報や資料を収集するとともに自分自身も体感することで、子ども達に現実世界と結びついたリアルな授業実践ができるようになることを参加の目的にした。

今回の研修の一番の収穫は、国際理解教育を誰のために行なっているのかが明確になったことである。ホームステイ先の家族や現地の学校に通う子ども達からは、家族の時間の大切さと学ぶことの大切さを再確認させられた。また、街中で出会ったネパール人からは日本語で挨拶が返ってきて、日本について知っていることで盛り上がった。気さくに声をかけてくれる街の雰囲気は、日本の昔の姿を彷彿させた。しかし、彼ら彼女らの生活の中にも生活用水や交通安全、子供や女性の人権など、改善が必要な課題がたくさんあることが分かった。ネパールで出会った家族や親切にしてくれた大好きなネパール人を思い浮かべて国際理解教育を進めることができると思うと、楽しみではない。

● 荻光平

今回の研修の目的は、多文化共生という考え方を、児童に浸透させる教材を集めることである。ネパール国民の多様性という観点から、様々な宗教や価値観または民族をルーツに持っている人々、都市部、郊外に住む人々、カーストによる影響を受けている人々の様子などを知ることができた。10年程前には、まだ民族を越えて結婚することに対する抵抗を持つ人々がいたという話を聞いたりもしたが、日本よりも、様々な背景を持つ人たちが入り乱れて暮らしているような印象をもった。ネパールには、昔から、国内に様々な民族がいたり、移民がいたりするという状況が当たり前になっている。しかし日本では、多民族・多文化社会が当たり前、という感覚がまだまだ根付いていないことを実感した。ネパール国内では、各民族が使う言葉は共通しておらず、ネパール語、英語を共通語として使っている。多言語を扱うことに慣れていているというか、当然のようにその環境で過ごしている人々にとって言語の垣根は日本人ほど高くはないのであろうということが感じ取れた。これらの知見を教材開発に活かしたい。

● 沖祐美帆

今回の研修では、五感で体感するという意識しながら、研修後にどのように教育現場で生徒や同僚、地域等に還元していくかということを考えて参加した。研修に参加する前の事前準備として、購入したいもの、撮りたい写真、聞きたいことなどをリストアップしたり、それをどのように活用していこうか考えたりしていた。しかし、実際に研修でネパールに行ってみると、想像していた以上に学ぶことが多く、予想していなかった学びを得ることもできた。例えば、空港を出てすぐに電柱の配線の多さが印象に残った。さらに、その多くがインターネット回線だと知った時、全く想定していないネパールの状況を知ることができた。このように、すべてのことが新しく、新鮮で五感で感じたことの多くを吸収できたと思う。

本研修でインプットした様々なことを深めつつ、アウトプットして周囲の人々へ還元していくために、今後も事後研修等を通して努力していきたい。

● 河村知里

ネパールは遠いようで近い国であると考えている。そう考えた理由は、日本にあるインド料理店の多くは、ネパール人が働いていると聞いたためである。また、勤務校や学区にネパール人の児童生徒がいるからでもある。本研修を通して、私はネパールと日本との架け橋の一助になりたいと考え参加した。ネパールで学んだことを授業で生徒たちに伝えることで、ネパールと日本とのつながりを強めたい。日本もネパールも1国だけでは生きていけない。研修や授業実践を通して両国のつながりをつくり、つながりをより強固なものとするすることで、両国にとってより良い未来を築けるのではないかと考える。

それらを達成するために「今この瞬間を大切に」と心掛けて、現地研修に参加した。五感で感じたものや体験したものを全て授業実践で活かせるよう努めた。おかげで多くのことを知り、学び、五感で感じる事ができた。また、訪れた多くの場所で私が帰国後もつながり続けることができるように交流を大切にすることができた。

● 鈴木友紀

私は、小学校教育で外国語を学ぶ意義を児童に伝えたい、そのために、日本人とネパール語を母語としている現地の人同士が、英語を使って意思疎通を図ることがどのように行われているのかを体感したいと考えていた。10日間の日程で、16の活動に参加し、そのどの場所でも英語を見聞きし活用する場面に遭遇した。ホテル、買い物、ホームステイ先の家族とのコミュニケーションを図るための表現。日本語学校、Secondary School 3校での、学習内容を理解し・身に付けるために授業の中で使われる表現。現地 NGO の活動内容報告に使われる一般常識や高度な表現。そして自分の話す拙い表現。難易度は違えど、英語を通して伝えたい内容をやりとりする経験をすることで、目的としていたネパールでは、どのように英語を使って意思疎通を図っているか十分に体感することができた。

外国語を学ぶ意義とは、「発信したい一人一人の考えや想いを状況に合わせて伝えるための手段として英語を使うようになること」だと考える。日本のみならず、英語を通して世界の人々とお互いを理解し合うことが、自分たちの身近な生活に直結してくることを、この研修での体験を通して伝えていきたい。世界とつながることのできる児童の育成を目指し、必要感を持って英語を学び技能を身に付けられる授業作りをしていきたい。

● 竹内綾音

今回この研修で、私は2つの視点から学びを得ようと思い参加した。1つ目は外国語を担当する教員としての視点から、ネパールの外国語教育について見てくること。2つ目は、校内の国際担当として国際理解研修に参加する者としての視点から、多様性の中で暮らすネパールの人々から、その方法を学ぶこと。これらを目的としてこの海外研修に参加した。

外国語教育の面では、心から驚かされることとなった。大人だけでなく小学校に通う子供たちからも外国語への熱意を感じることができた。そもそも、出稼ぎを目的として将来海外に出る事が視野に入っているネパールの人々は、多言語習得への関心が強いことがわかった。

次に、多様性の生活環境を学ぶことができた。121の部族に分かれ、文化や言語、食べる物まで違う要素を持ち

合わせているだけではなく、宗教観もその中で違い、ヒンドゥー教を信仰するのが8割に対し、仏教や他の宗教観を持った人々も共存している。王政であったころの考えからカースト制度の名残があることも知った。

多種多様な人々がともに暮らす国であるが、全体的に優しい印象を受ける人が多く、認め合う優しい国民性がこの多様な社会を継続させていると感じた。

● 西村学

国際理解教育に昔から関心を持っており、毎年必ず実践を行ってきた。目の前の子どもたちが未来を変えていく存在であると信じ、思いを届け伝え続けてきたという自負もある。しかし、その熱量が年を追うごとに徐々に小さく、弱くなってきていること、どこかで慣れてきている、諦めかけてきていること、伝えている内容と自分の在り様に矛盾を感じ始めていた。何より子ども自身に誠実でないのではないかと。今回、この研修に参加したのは、自分の「熱」が再燃すると期待したからである。成果は予想を大きく上回るもので、出会った方々からは日本や日本人、ネパールやネパール人への強い愛情を感じた。その過程で自分の知らない日本人の名前もたくさん聞いた。今、自分たちがここにいられるのは、そういった方々、その方々に繋がる数多くの日本人のおかげなのであり、その方々への恩返し・恩送りが今自分たちに届けられているのだと感じずにはいられなかった。自分は、この現地研修を終え、数多くの人からの思いのバトンを次世代に繋げていく責任と使命感を感じている。

● 森谷朋香

私は今回の研修に、2つの目的をもって参加した。

1つ目の「ワクワクを見つけること」においては、私が国際理解教育に出会ったきっかけでもあり、続けている理由でもある。それまで知らなかった世界を知ったり、意外な共通点に気付いたりすることが、たまたま面白く、楽しく、不思議でもある。そんな体験を子どもたちにも味わわせるために、ネパールにきた。実際に、ネパールの至る所で、日本にいるときには感じる事ができなかったワクワクに出会った。出会ったワクワクを子どもたちにどう伝えたら、より面白さ、楽しさ、不思議さが伝わるのか考える時間も、ワクワクしていた。

2つ目の「支援とは何かを探ること」については、様々な訪問先の事業を見たり、そこで活動する方たちの思いを聞いたりした。その中で印象的だった言葉が、「自分に誇りを、地域に思いやりを」である。自分も周りも大切にという思いが込められていて、素敵な言葉だと思った。支援にとって大切なことは、教育においても大切なことであるので、子どもとの関わりで大切にしていきたい。

● 渡邊亮祐

本研修に参加するにあたり、私は「肯定的な目線で世界と出会う」を目標に本研修へ参加した。実際に研修に行く中で強く感じたことは、「世界は多様であるから面白い」ということである。

ネパールは多民族国家であり、多くの若者が家族や生活のために海外に出稼ぎへ出ていく。街はどこか雑然とした雰囲気があり、車やバイクが道路を埋め尽くしている。どの光景もまず、日本では見る事ができないものである。しかし、肯定的にネパールを見つめ直せば、多民族国家であるからこそ違いが受け止められる土壌があり、海外に目が向いているからこそ自国の問題を自分ごととして捉える若者が多く、語学を中心として学びへの熱意がとても高い。また、街は伝統的な風景や暮らしが守られ、地域コミュニティが強く結びついている。車やバイクをよく見ているとスズキやホンダのものが多く、日本とのつながりが感じられる。少し視線を変えるだけで、どのような国からでも私たちが学べる事が多く、その多様性がとても面白く感じられる。よりグローバル化が進むすぐ先の未来を生きる子どもたちにとってこのような視点はとても重要なものであると思う。自分自身が得た経験を子ども達や地域、同僚にしっかりと還元していきたい。

2. 柱1「訪問国と肯定的に出会う」観点から学んだこと

● 石川敬祐

今回、開発途上国に行くのは初めてであった。したがって、治安は悪くないのか、ネット環境は期待できないだろう、食べ物は口に合うのか等の否定的なイメージを正直のところ抱いていた部分もあった。しかし、いざネパールを訪問すると、開発途上国という言葉に対する私の固定概念に過ぎなかったことに気付かされた。まず、何とんでも温厚で親切な人で溢れていた。見ず知らずの日本人が「ナマステ〜」と馴れ馴れしく挨拶をしても、誰一人として嫌な顔をせず、むしろとびっきりの笑顔で挨拶を返してくれた。また、あるお年寄りがたくさんの荷物を持っているとき、道を歩く一人の男性が荷物を運ぶ手助けをする光景を見ることができた。人に関すること以外では、農村部でもWi-Fiがあり、スマートフォンが日常のツールとして存在していたり、様々な国の食を楽しめたりした。要するに、固定概念は固定概念に過ぎず、自分の五感で感じることや学ぶことが何よりも大事だということ学んだ。



● 大島俊介

五感で感じたネパールは、新鮮でありながらどこか日本の昔の姿を彷彿させる国であった。その中でも特に印象に残っているのは好奇心旺盛な人柄である。内向きになってしまった日本では感じられなくなってしまったことである。このことから、私は目の前の子供達に他国の文化や言語の面白さを感じさせることが自分にとっての使命だと感じるようになった。

他国の文化に興味をもつ上で障壁になるのが言語である。しかし、私は多少の英語力とボディランゲージでたくさんの方と交流ができた実体験を得た。特に、縄跳びやけん玉、紙風船、ダンスなど、一緒に遊んだ時には言葉の壁を感じることはなかった。畑仕事や料理の手伝い、地域の散策も同様である。話すことを目的にするのではなく、ともに同じ時間を過ごすことを目的にすると自然と笑顔になれた。

このようなことから、他国と肯定的に出会うためには、一緒に同じ時間を共有することが大切だと感じた。遊びやダンスなど、楽しい時間を共有できる場を提供できるようになりたい。

● 萩光平

家族のつながりを大切にしていること、子どもたちの学習意欲は、日本とネパールの若者は同じだと思った。外国や都市部に出稼ぎに行く人たちが一定数いる。外国で働くためには、その国の言語を習得する必要があるので、外国語学校が集まった地域があった。外国で働くことや外国人に対して、前向きな姿をいろいろな場面で見かけたが、特に感じたのは語学学校だ。日本で働けば、母国の家族を養える収入が期待できるということを話す生徒がおり、外国から見た日本の印象について知ることができた。よりよい生活を目指して、努力する姿や家族のために外国へ向かう姿が、印象的だった。また郊外から都市部に出稼ぎに向かう家族をいつも気にかけている様子を感じられた。現地の学校では、日本と比べると十分な設備は整っていないなか、一生懸命勉強している姿が見られた。日本人とさほど変わらない将来の夢をもっている児童も多く、学校生活を楽しんでいる様子も見られた。教員の方々も子供たちの将来が明るいものであってほしいという願いや思いをもっていられることが分かった。

● 沖祐美帆

ネパールを訪問して大切に思ったことは、多様性と寛容さである。ネパールには、多くの民族や様々な宗教を信じている人々が共存していた。町の中を歩いていると、様々な服装の人がいたり、民族ごとに話し言葉があるということを知った。近年、日本でも外国からの移住者が増加しているが、地域社会になじむことが難しかったり、言語が異なることで困難を抱えているという話を聞く。一方で、ネパールでは多様性が当然の状況となっており、異なる文化や言語を持っているのが当たり前で、学校現場やホームステイで滞在した村でも寛容さを感じることができた。例えば、食事の際に、私たち日本人が訪問しているため、普段は手で食べているというネパール人の方が日本人に合わせてスプーンとフォークで食べていた。このような行動にも寛容さを感じて驚いた。

● 河村知里

日本は在日外国人や外国人労働者が増えてきて、人種や言語などさまざまな面で多様性が出てきたが、ネパールは元々多様性があり、多くの民族、宗教などが共生している国であるとわかった。街を歩いている人を見ても服装などが多様である。ホームステイ先でも民族ごとにそれぞれ違った特徴が見られたが、お互い認め合い、過ごしていた。

私は訪問先だけではなく、街中やホテル内でも機会があれば積極的にネパールの人々に話しかけ、交流したところ、日本に興味がある人や日本で働いたことがある人など、日本と関わりがあるネパール人が多いことに驚いた。そして、日本人の私達が気付いていないことで今後大切になってくることを話してくれて、世界の中のネパールという視点だけではなく、世界の中の日本という視点でもたくさん学ぶことができた。ネパールと日本は遠いようでとても近い国なのだとさまざまな交流を通して実感した。

● 鈴木友紀

首都カトマンズでは、鉄筋3階建て以上の家が多くそれぞれ色も異なり美しい。街には、同じような商品を扱っている店舗が隣同士で並んでいることもあるが、自分のペースで商売をしている。都市部でも農村部でも、車やバイクの交通量が多い。日本ほど信号で交通整理されていないのだが、お互いが自己主張をすれば譲り合って通行できる仕組みが整っていた。それぞれの個性を発揮しながらも、お互いを大切にしている様子がとても素敵だと感じた。

ヒンズー教が身近にあり、数多くの寺院が見受けられた。ホームステイ先でも、家の中、外壁、庭にまでヒンズー教の神様が祭られており、石像には赤い染色のティカが塗られている。先祖代々受け継がれてきていることがその色の濃さから分かり、祈りを大切にしていることに気づかされた。

教育現場では、児童生徒の学ぼうとする姿勢が大変意欲的であった。教室では、つながった机椅子が設置され、ホワイトボードを用いての一斉授業が多かった。それでも、児童生徒の目は輝いており、ノートには文字がびっしり書かれ、学びたいという想いが伝わってきた。ネパール語、社会など一部の教科は母国語で行うが、それ以外の教科は英語で授業が行われていることで、自然と英語が身につけていく決め手となっていることがわかった。日本との違いから、どんなことを大切にしているのかに目を向けられるようにしていきたい。

● 竹内綾音

日本にも住んだことのあるネパールで通訳をしてくれた方とお話をしていた時、「日本人とネパール人は笑顔で優しい人が多い」という話になった。というのも、私が他の諸外国に旅行に行った時に、現地の人と目が合ったので、にこりと微笑むと「Why are you laughing?」と疑問を投げかけられたことがあった。

しかし、ネパールの人々は目があえばしっかりと微笑んでくれた。そして、ホテルマンや各訪問先の方々にインタビューをしても、快く引き受けてくれる人が多かった。このような何気ない対応や仕草から、優しい国民性があふれ出していると感じた。

また、「外国で働きたい!」という強い意志からか、外国語学習への熱意が感じられた。初めに訪問した日本語学校「Universal Training Center」でも日本語を学習して3年という学生と話をした際に、流暢な日本語で話をし

てくれた。それだけでなく、日本語を教えているとも話をしてくれた。

日本人の私たちが英語学習を始めて、たった3年で自信を持ってネイティブスピーカーと話をし、人に教えることができるほどの力量を習得できるかどうか。それは、学習者の熱意がなければ成し遂げることができないだろう。

ネパールの人々は「海外で使うために言語を学習するのだ」という学習の目的を明確に持っており、その熱意を学習継続・上達のために使う事ができていたのだと感じた。

● 西村学

この研修で初めて「肯定的に出会う」という言葉に触れた。情報の洪水の中で生きる現代人は、望まなくても自然と様々な先入観が自分の中に形作られている。それは、大きな弊害すら生んでいる。研修を終えた今、アナログな人と人との出会いや触れ合い・繋がりが、先入観やそれがもたらす弊害を乗り越える最も重要なことではないかと感じている。研修を終え日本に帰ってきた今、自分はネパールが大好きになり、再訪したいと強く思っている。では何をしたいのか。人に会いたいのだ。ホームステイでお世話になったラピンドユラー家、サラさん、ティミさん、JAANの方々…たくさんの方の顔が浮かんでくる。僕はこの方々が好きになり、こんな素敵な人がいるネパールという国が好きになった。その人を好きになれば、その人を育んだ国、その人が住んでいる国も好きになる。受け入れられる。その国でのたった一人との関わりが、その人にとってその国のイメージを形作ることだってあり得る。一人の人間が持つ可能性に気づくことができた。

● 森谷朋香

ネパールの食事、衣服、建物、工芸品など、どれも魅力的であった。日本とは違うものがたくさんあったが、その美味しさ、美しさ、上質さを子どもたちに伝えたい。さらに、一番伝えたいことは、人の温かさである。

ネパールでは、たくさんの方の温かさに触れてきた。研修中同行して通訳や様々な手配をしてくださったスタッフ、宿泊先のホテルで丁寧なサービスを提供してくれたホテルマン、ホームステイで受け入れてくれた家族や地域の方々など多くの方にお世話になった。その中でも特に印象的な体験がホームステイである。つたない英語でもなんとか理解しようと聞いてくれたり、分かりやすい英語で話してくれたりした。通じたときはとても嬉しかった。ネパール語で「ミトチャ（美味しい）」と言ったときも、家族はとても嬉しそうにしてくれた。そのような人との触れ合いの中で感じた楽しさや喜び、安心感なども子どもたちに伝えていきたい。

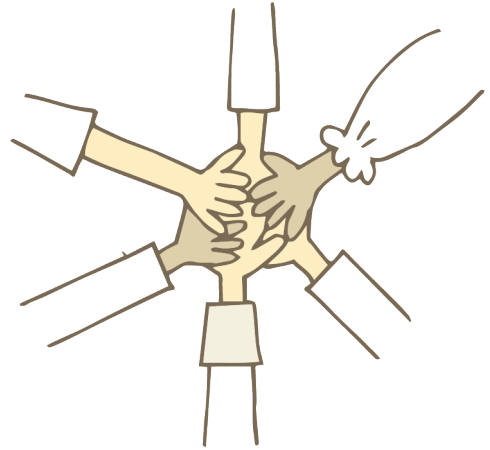
● 渡邊亮祐

ネパールの人々にお問い合わせをすると皆さんが首を傾げるジェスチャーをする。初めはそのジェスチャーを見ると断られた感覚が強くなかなか慣れることができなかったが、これは肯定的なジェスチャーである。いつもネパールの人々は、ちょっとはにかんだ雰囲気ですべて首を傾げて私たちのお願いや話を受け止め、聞いてくれる。そんなネパールの人々の優しさや思いにたくさん触れることができた。このネパールの方の温かさはどこから来るのだろうと考えたとき、ヒントになるのは「多様性」であると思う。ネパールは多民族国家であり、道を歩いていると様々な民族の人々に出会う。それは学校でも同じであり、現地の学校では「違って当たり前」という話を聞いた。ホームステイ先で仲良くなった子どもに「家族の名前を教えて」と言われ、名前を教えると、「It's beautiful」と言ってくれた。聞きなれない初めて聞いた言葉を「美しい」と受け止められる、そんな「違って当たり前」いう当たり前の大切さを改めて実感した。

3. 柱2「日本と訪問国の同一性に気づき、つながりを理解する」観点から学んだこと

● 石川敬祐

JICA や NGO をはじめとした、たくさんの機関が多様な方法で日本からネパールへ支援を行っていることを知った。そういった人たちが口を揃えて言っていたのは、「支援で大事なのは、対等に付き合うこと」である。そのために、対話を重ね本音を聴くこと、ニーズを細かく把握すること、将来のビジョンを明確に共有すること等を大事にしていた。これらを通して、人と人とのつながり、最終的には日本とネパールの関係性を構築し、互いの国の発展のつながっていくことを学んだ。また現在の日本やネパールがあるのは、日本→ネパール、もしくはネパール→日本に知識や技術を学びに行き、それを自国で還元してきた先駆者たちが次世代のためにつないできた血と汗と涙の結晶であると胸を打たれた。他にも、地理的に山地と丘陵地帯が国土の約7割の日本、約8割のネパール、なおかつ共に地震大国という共通する部分があり、限られた土地を有効利用したり、コミュニティの結束を高めたりするところに共通点があると思った。



● 大島俊介

日本の漫画やアニメーションの文化は国境を越えている。市街地の散策中にはキャラクターがデザインされた T シャツを着用する若者に出会い、ホストファミリーとは一緒に日本のアニメを見て盛り上がった。また、子ども達の無邪気な笑顔は万国共通である。交流授業でソーラン節を教え一緒に踊る機会を作った。初めて出会う日本人の教師が伝えた掛け声と踊りに、全力で応える子ども達の意欲は、日本の子ども達と同じだった。さらに、家族の時間を大切に人柄を感じ、地球全体が一つの家族のようにお互いに尊重し合える平和な未来にしていきたいと感じた。日本の生活とネパールの生活が酷似する部分はたくさんあった。

これから大切にしていきたいことは、多少の違いを「違い」ととらえるのではなく、同じものの中から感じられる個性をとらえることである。それを他国として考えるのではなく、一人の個性として寄り添って生活するのである。お互いに認め合える環境を提供できるよう、目の前の子ども達にしっかりと伝えていきたい。

● 荻光平

国土に占める山地の割合が高いこと、豊富な水資源が同一性としてあげられる。山間部が多いにも関わらずトンネルを作る技術がネパールにはなかったという話には驚いた。JICA の支援と日本企業の力によって国内初めてのトンネルを作っている最中ということを知ることができた。トンネルができることによる恩恵は絶大だと思うので、国の発展に必要な不可欠なものを先進国が支援することの意義を感じる事ができた。ネパールは、日本と同じようにヒマラヤ山脈という豊富な水源があるにも関わらずほとんど活用できていない。日本にいるとついつい忘れがちになってしまう水のありがたみを改めて感じた。SDGs の目標にもある安全な水を確保することは、途上国の発展において喫緊の課題であることを実感した。都市部と違い郊外の山間部に住む人々は、汚染の少ない比較的きれいな水を使用していて、飲料水として安全に使えるものもあるようだ。首都カトマンズでは、ボトルのミネラルウォーターからも大腸菌が検出されることがあるそうだ。健康な暮らしが担保されるよう安全な上水道が整備されていることは重要なことだと感じた。

● 沖祐美帆

日本とネパールのつながりについて考えたとき、ネパールを訪問する前は、「日本に多くのネパール料理屋がある」ということくらいしか印象がなかった。特に、ネパールにおいて日本という国がどれほど認識されているのかということ考えたとき、ネパールの人はほとんど日本のことを知らないだろうと思っていた。しかし、実際にネパー

ルを訪問してみると、町の中に多くの日本語があふれていたり、日本車があったり、日本食レストランがあったりしたのでとても驚いた。そして、日本語学校の生徒以外でも日本語で簡単な挨拶ができたりする様子を見て、ネパールにおける日本とのつながりの強さを理解することができた。

また、日本もネパールも思いやりという点で同一性があると考えた。特に、日本もネパールも大地震経験国であり、そこからの復興を国民みんな意識している点が共通していると気づいた。

● 河村知里

ネパールは「『よさ』が残る昔の日本」と感じた。カトマンズから離れた地方では、祖父母から聞いていた昔の日本のような光景があった。どの家も家畜を飼い、畑をもっており、自給自足生活をしていた。また、人々や地域のつながりは強く、お互いに支え合って暮らしている。日本では、食べ物や道具などの物にも神様（八百万の神）がいると考えられている。ネパールも同じように、至る所にガネーシャ像や仏様の絵があり、人々が祈る姿がたくさん見られた。以上のように、ネパールにはさまざまな場面で日本と共通する部分があった。

ネパールでは、年収が低いなどさまざまな理由から、出稼ぎで日本など国外に行く人が多いと学んだ。日本では、人口減少が進んでおり、農業や福祉などで労働者の高齢化や減少が起こっている。その問題を解決するための策の一つとして外国人労働者や外国人技能実習生制度があると思う。そう考えると、日本もネパールも1国だけでは世界の中で生きていけなくなっているのだろうと考えた。

● 鈴木友紀

帰国研修同窓会（JAAN）では、つながり続けることの大切さを学んだ。日本で学び、その知識技術を、ネパールに持ち帰り、ネパールの開発・発展のために尽力しているブサルさん、シャンテさん、バツチャンさんとお出合った。日本の良さを知り、両国とのつながりを保持したい、ネパールをさらによりよい国にしていきたいという挑戦がいつまでも続くのは、両国を好きだという熱い想いが原動力となっている。

日本人学校の吉岡さん、NGO ラブグリーンネパールの鈴木さん、JICA ネパール事務所職員のティミルシナさん。彼女たちは、ネパールの学生、職員、現地の様々な業種の方々と関わりながら、そして、それぞれの人・活動のニーズに応えながらネパールの方々と私たち日本人との架け橋となる貴重な存在として活躍されている。

教育の現場において、私も日本とネパールとの架け橋となる実践をしていくことで、未来の世界を創っていく子ども達への気づきを促していきたいと考える。そのために、この研修で見聞きした、具体的な情報を、できるだけ現地の方々の言葉として伝えていきたい。

● 竹内綾音

ネパールの方と食事をした際に、スプーンを使って食事をした。手で食べる文化だと聞いていたので、驚き聞いてみると、私たち日本人に合わせてスプーンで食べてくれていたという。その気遣いに、文化への寄り添いを感じた。

また、お替りの具材が沢山出てきた。「さあ！食べて！どうぞ！」とお替りを勧めてくれた。お腹がいっぱいになり、もう満足ですと伝えると、それ以上は勧めず「美味しかった？」とにこやかに聞いてくれた。この出来事から、ネパール流「おもてなし」を見ることができた。

食事の量については、多いなら無理には食べなくてもいいけれど、なるべく残さないほうがいいという考え方を聞いた。それだけでなく、食事では手で丁寧に食材をかき集めて、お皿の底が見えるまで綺麗に食べきっており、真似して食べたら「とても綺麗に食べますね。」と喜んで貰った。

共に研修をした仲間の1人がよく「30年前の日本みたいだ。」と見学先で呟いていた。本当にその通りで、食事一つをとっても、古き良き日本の風潮とどこか似ていると感じることが多かった。

● 西村学

親切、拍手、笑顔…育ってきた環境や文化が違っても、人間は同じなのだとつくづく感じた。特に「笑顔」は最も重要なコミュニケーションツールなのだと。防災 NGO の自己紹介の時、代表が自分の自己紹介に興味がないのを感じていた。目が合わなかったからだ。その理由はすぐに分かった。直後に彼が自分の隣の「もすけの笑顔が素晴らしい！」と言っていたからだ。彼の笑顔があまりに魅力的で思わず気持ちがそちらにいつてしまっていたのだ。実際、自分は彼と授業でペアだったが、彼は笑顔で子ども大人問わずネパールの方々の心を惹きつけ、魅了していた。それはネパールの方々だけではない。自分たち研修メンバーも彼の笑顔が創り出す空気に背中を押され、前に進めた場面も数多くあった。また、自分たちは通訳のサラさんが大好きになった。彼女の笑顔も本当に魅力的で、自分たちに 100%心を開いていると感じさせるものだった。自分は学校でよく子どもに笑顔の大切さを説くが、これから、それを「世界共通」という視点で話せると感じている。

● 森谷朋香

訪問した日本語学校で、日本のイメージを聞くと、「安全」「親切」「仕事を大事にする」「仕事の時優しい」などの返答があった。また、使っている日本製品を聞くと、箸や電化製品、車などがあつた。さらに、「寿司などの和食を食べてみたい。」「日本の祭りに興味がある。」などの声もあつた。このような日本についての情報は、日本に行ったことのある家族や親せきから得た情報、または日本が支援して建てた学校で得た情報、さらに SNS で得た情報であることが分かった。そのようなきっかけで日本に興味をもち、日本語を学んでいる学生がたくさんいることに喜びを感じた。逆に、私のクラスではネパールについてあまり知られていなかったもので、これからネパールの素晴らしい人柄、文化、歴史を伝えていこうと思う。

● 渡邊亮祐

ネパールの街を歩いているときによく見かけたのが「GO JAPAN」「STUDY IN JAPAN」といった看板の数々である。実際に、日本語学校に行くと 17 歳から 32 歳の方々が日本へ出稼ぎに行くために日本語を学んでいた。その学びの熱はとて高く、学ぶ姿に心から感動した。出稼ぎ労働の就職先として、介護の仕事が多いことなどを聞き、日本で問題になっている高齢化を支える一翼をネパールの方々が担ってくれているのだと気付かされた。また、生徒の多くが TikTok や Instagram を使っていることなどを聞き、日本との様々な共通点やつながりを知ることができた。特に印象に残ったことが、生徒からの「ネパールが日本のような素晴らしい国になるために必要なことは何だと思いますか」という質問である。日本という国を肯定的に受け止めてくれている嬉しさはもちろん、国の発展ということをも 10 代の学生が考えているということにとて感動した。ネパールで見つけた共通点やつながり、また感動を日本の子ども達と共有することで、世界との距離がぐっと近くなるのではと改めて感じた。

4. 柱3「訪問国の課題を知り、解決に向けて共に越える」観点から学んだこと

● 石川敬祐

日本とネパールの共通の課題の一つとして、「持続可能な経済発展」が挙げられる。日本は、著しい成長を遂げた高度経済成長期から約半世紀が経ち、経済成長率が低迷している中、円安や物価高の影響でますます経済格差が広がってきている。そして、グローバル化が叫ばれているが、まだまだ内向き志向に感じる。一方、ネパールは近年、市場経済が制度的に整備され、経済成長率は上昇傾向にあるが、生産性の低い農業中心の産業構造は基本的に変わっていないなど、経済基盤は依然として脆弱である。また、賃金水準が低く、海外へ出稼ぎに行くなど、外向き志向がやや強いように感じた。したがって、日本もネパールも自国に基盤となる産業を（再度）構築し、グローバルな展開を行っていかねば、持続可能な経済発展は困難だと思った。しかし、前述したように、「支援」によるつながりが両国間にはあるので、先駆者たちが築いてきた自国の発展のためのレールを互いに共有し、課題解決に向けて共に考え、共に乗り越えていくという希望がもてると思った。



● 大島俊介

ネパールの若者が「どうしたらネパールはもっといい国になるのか」と研修受講者に聞いてくる場面を思い返すと、少しずつ解決に向かっていくだろうと思う。しかし、支援を要する国であることは十分に理解することができた。これからも少しずつ成長していく国に対して、支援する立場として大切になってくるのは、支援する国とされる国という一方通行の関係ではなく、対等の立ち位置でお互いに有益である関係を作ることだ。

そこで、子ども達には自国と他国に共通する課題があることに気付かせることが大切だと考える。他国の課題を他人事だと感じてしまう子どもや、自国優位の発想が拭えない子どもがいるからである。しかし、国際支援がwin-winの関係で成り立っている事実やネパールの若者も自分にできることを一生懸命取り組んでいる事実を知ること、課題解決に向けて共に取り組んでいることに気付かせることができると考える。

● 荻光平

被差別カーストの影響、格差、農業従事者の減少などが、共通の課題である。被差別カーストについては、日本にも被差別部落があったように未だにその影響に苦しむ人達がいることが分かった。市街地を視察していると、バラックが立ち並ぶスラム街があったり、地べたに座り込んで物乞いをする人々がいたりした。その人たちに対する支援がおこなわれているのか知ることができなかったが、もともとは被差別カーストであることがわかった。カーストについて、いまだに社会システム上必要なものであると考える人たちもいるようで、まだまだ解決には時間がかかると思われる。国、社会全体が豊かになっていくことで、このような間違った考えやシステムの必要性はなくなっていくはずだが、日本でも根強く残っている地域があるようなので楽観視はできないなと思った。また、このカーストによって生まれた格差を是正していくとなるとさらに時間がかかってしまうのではないだろうか。農業従事者や伝統的な工芸品の職人の後継者不足が問題になってきているようだ。農業支援 NGO では、最近の若者は農業に魅力を感じてくれないと話がされていたし、宿泊したホテルの装飾品である彫刻が施された柱や窓枠は、いまでは作れる人が減ってきていると通訳のサラさんが教えてくれた。日本でも同じようなことが起きている。文化や伝統を守ることと自分の生活を守ることを両立できるシステムを作ることも大事な課題だと感じた。

● 沖祐美帆

日本とネパールの共通の課題は、経済面での国外への依存度が高いということが挙げられるのではないかと。ネパールでは出稼ぎが当たり前になっており、家族の生活を助けるために日本などへ行って、お金を稼ぎネパールへ送金するというのが子どもの将来の夢としても挙げられた。一方で日本も多くの食料、工業製品などを安価な海外産に頼っている。また、新型コロナウイルスによる影響もあり、国内産業が停滞した。これらの状況は日本とネパールで共通しているので、両国で共に考えていくことが大切なのではなかろうか。そして、これらの課題を共に越えるという観点から、日本が国際協力をしていくことの重要性が考えられる。例えばネパールでは、道路の舗装がされていない場所も多く、国内の産業の発展が難しいという側面がある。このような場面で日本が支援を行うことで、日本企業の技術発展にもつながると気づいた。

● 河村知里

帰国研修員同窓会(JAAN)の話聞いて、日本の良さや課題を知った。JAANの人たちは日本からネパールに帰った後も、つながりを大切に、ネパールと日本の両国がより良い国となるように努力していた。バツタチャンさんから「日本は今内向きになっている。もっと世界を見なくてはいけない。」という話が心に響いた。確かに、自分の国しか見ていない、自分のことで精一杯の人が多く感じる。逆に、ネパールは出稼ぎに行く人が多く、出稼ぎは良いが、ネパールに帰ってきて自国のために何かをするという人を増やしていく事が課題だと学んだ。世界の中で生きていくことも大切だし、自国を発展させつつ文化を守ることも大切。その両方を行うためには、お互いに良いところだけではなく課題となっている部分もしっかりと捉え、行動に移す事が大切だと考えた。自分は教員として、日本とネパールのつながりや世界の中の日本という視点を生徒に継続して伝えていくことで、将来世界のため、日本のために行動する事ができる生徒を育てたい。

● 鈴木友紀

ホームステイ先では、インフラも思った以上に整備されていると感じたが、家畜の世話や食事の準備、子育てで1日が終わる様子を見ていると、時間短縮ができればより自分らしく過ごせる時間が捻出できるのではなかと考える。JICA ネパール事務所での話では、ネパールにまだトンネルはなく、設置工事が進んでいるとのこと。さらに移動手段など日本の企業の協力のもと進められる部分もあり、必要な援助を考えていく中に、互いが支え合える手がかかりを見つけていけそうだ。

フェアトレード工場(ACP)の現場でも、製品製造の技術1つ1つがとても卓越した手作業で進められていた。長時間労働の割に仕上がる製品数は多くはないため、製品の価格も割高になる。職場、需要、製品製造の技術、そして報酬があり、貧困を断ち切る1つのサイクルとして機能している。その商品について知り背景を理解し自分事として捉えられる見方ができるよう学校現場で取り扱っていくことがまず第一歩となりそうだ。

インフラの構築、貧困、教育、農業など発展途上国の問題を通して、日本の問題点を知り、対等な立場で考えていくという視点が必要であるということを学校教育の中でも意識し大切にしていきたいと考える。そして、その視点に、子ども達自身で気づいていける仕掛け、活動を取り入れていきたい。

● 竹内綾音

日本もネパールも早期外国語教育を行う事で、母国語(公用語)の活用能力が身に付きづらいという課題である。

日本では小学校3・4年生から週1回の外国語活動が行われており、ネパールの小学校では公用語がネパール語でも、英語教育には力が入っている。私立小学校では1年生から他教科も英語で授業を行っていた。それだけでなく、公立学校に通う児童でも英語を流暢に話せていた。その影響により、日本で小学校6年生にあたる子供たちが、辞書も見ずに英語で長文を書く姿が衝撃的であった。

しかし、英語を使う時間が増えるということは、母国語(公用語)を使う時間が減っているということでもある。これは日本でも懸念されていることで、早期外国語教育として小学校に英語を導入する事に対して、反対だという意見が出る要因の1つである。

また、英語で他教科を学習すると細かいニュアンスが伝わらずにその教科の高度な技術を教えるのが難しくなる。理数教育の強化を行いたい日本もネパールも、外国語教育にばかり力を入れていくと、その実現が難しくなってしまうという課題がある。外国語教育と母国語の運用、理数教育の両立を考えていかなければならない。

● 西村学

「ネパール」というフィルターを通して日本や自分の課題に気づくことができた。自分はネパールで労働の対価としてのお金について深く考えさせられたが、同様の問題は日本にもたくさんある。非正規雇用、外国人労働者問題…知っていたのに身近に感じる感じがなかったためか、どこか心に引っ掛かりを感じつつ、見過ごしていたのだと感じる。ホームステイの一家が正当な対価をもらえていないと嘆くならば、日本で正当な対価をもらえていない人へも同じような感情を持たなければいけないのではないか。また、ネパール人というだけで興味をもつ自分がある。どうしてだろうと思う。『異』を感じる人やものについて知りたいという好奇心かもしれない。でも、『同』だと思いついて入っている日本人についてどこまで知っているのだろうと思う。同じ日本人である家族のこと、同僚のこと…同じ日本人だってネパール人と同じ『異』であるはずなのに。勝手に自分が『同』と見なしている先入観を取り払うこと、自分の身近な人を『異』と捉え、謙虚に学ぶ姿勢を持つこと、それが大切だと感じている。

● 森谷朋香

支援するときには、対等な関係を築き、互いに協力しながら課題解決していくことが大切であると感じた。そのためには、事前に様々な情報を提供できるように準備をすること、雑談をしてなんでも言い合えるような信頼関係をつくること、物や資金などの環境を整えるハード面と、技術を伝えたり人材を育てたりするソフト面両方からアプローチすることが重要であると学んだ。中でも一番重要であると感じたのは、信頼関係をつくることである。本音を引き出すことで課題が明確になり、目標や方法を共有したり見直したりするときも信頼関係が大事になってくる。これらの支援をするときに重要なことは、教師と子どもの関係や子ども同士でも同じことが言える。信頼関係をベースにして、自分たちで課題解決していけるようなクラスづくりをしていきたい。

● 渡邊亮祐

JICA ネパール事務所の飯塚次長からの話で「ネパールが日本に近づいているのではなく、日本がネパールに近づいている」という言葉が印象に残った。現地の学校の先生と話をすることで、教育上の問題として「未来へのビジョンを描くことができない子どもが多い」ことを挙げていた。先行きが見えない中で生活をする子どもも多く、キャリアを見通して将来のために学ぶといったことができない子どもがいるということであった。これは、日本にも共通して言えることだと思う。日本でも先行きが見えない社会の中で、学習する目的や意義が見えないという状況が実際に存在している。その意味でも、次長の言葉が強く印象に残った。この解決方法はやはり、教育であると思う。研修を通して、支援における重要な要素の一つとして「人を育てる」ことがあると学んだ。私たち教員は、子ども達が未来へのビジョンを描けるような支援をしていく必要があり、また、様々な学習を通して問題解決の方法を教える必要がある。そのためにも、私たち教員も多くのことを学び、広い視野を持つことが大切であると強く感じた。

5. その他全般を通じての感想・意見など



● 石川敬祐

本研修を通じて、よい教育とは、豊かさとは、支援とは等、普段何気なく捉えている教育観や価値観を見つめ直すメガネを得ることができた。このメガネを曇らせることなく、鮮やかなレンズを保つためにも、様々な人・モノ・コトから五感で学ぶことを継続し、もっともっと教員として、人として成長していきたい。

末筆ながら、本研修がこれほどまでに充実した学びができ、人生の糧となる経験となったのは、熱意ある9名の仲間とJICAやNIEDの皆さん(特に、同行者の2人)、現地でコーディネートや通訳してくれたティミさんやサラさん、運転手のラムさん、そして日本とネパールを繋いでくれた先代の方々など、多くの人たちのおかげである。感謝申し上げます。次は、自分が恩送りできるように尽力していきたい。

● 大島俊介

海外研修に参加するまでに、職場の同僚や仲間から、応援の声をもらった。家族の理解と協力ももらった。JICA 中部・北陸・ネパール、NIED の職員による研修全般に関わる配慮や、NGO・NPO や現地で活動する方の配慮、同行した通訳担当やドライバー、ホストファミリーなど、関わってくれたすべての人の配慮によって、自身の学びは支えられていると思うと、感極まる思いである。9日間という短い時間であったが、さまざまな分野について充実した学びであった。

この研修によって人生観がアップデートされた。そして、誰のためにこれから国際理解教育をしていくのかが明確になったことが何より嬉しい。今後の教員人生の中で、自分が目指す未来像が具体化できた気がする。この学びが新鮮なうちに、たくさん子どもや地域の大人、教員に向けてネパールの素敵なおところを伝え、たくさんの人にネパールや世界に関心をもってもらいたいと思う。

● 荻光平

今回の研修で、開発支援について理解を深められたことは、自分にとって大きな成果の一つだと感じている。今までは、支援という言葉聞いても、金銭的、物質的な支援ばかりをイメージしていた。しかし、支援の最前線にいる人は、その国の人々の思いを聞きながら、同じ思いをもって活動していた。たくさんの人々の思いによって支援が成り立ち、つながりが作られていくことを知ることができた。先進国が、途上国に対して一方的な支援をするのではなく、対等な立場で寄り添うように、よりよい社会を目指してともにプロジェクトを進めていることが印象的だった。このことから、「情けは人のためならず」という言葉が、支援を端的に表しているのではないだろうかと考えた。歴史的に日本人、JICA が支援してきたことは、ネパールの中で広がっていき、巡り巡って、現代の私たちへのプラスイメージにつながっているということ JAAN や各 NGO で何度も感じた。今回、支援に対して感じたことを、まずは自分のクラスの生徒に伝え、これからは様々な国とよりよい関係性を作っていくきっかけを作りたいと思う。

● 沖祐美帆

全体を通して、学びの多い研修であった。この研修に参加するまでは、ネパールはもちろん、開発途上国に関する具体的なイメージを持つことができなかった。そのため、どのような支援が必要なのか、自分たちにできることは何かということを考えたときも、具体的にイメージすることができなかった。しかし、この研修に参加したことで、開発途上国の現状を知ることができた。そして、開発途上国と日本のつながり、共通の課題が存在することも知ることができた。これらのことから、国際協力の重要性を再確認し、今後自分たちが社会をよりよくするために

何が必要なのかをイメージすることができた。また、五感で体感することの重要性も学ぶことができた。「百聞は一見に如かず」という言葉があるように、今後自分が高校生に対して授業を行っていくときにも、体験すること・参加することなどを大切にしながら、教材研究等を行っていきたいと思った。

● 河村知里

ネパールを訪れる前は、生まれて初めて行く「発展途上国」ということで、アフリカなどの「発展途上国」のイメージが強く、不安な事が多かった。しかし、訪れてみると、他国のファッション文化や食文化が入ってきており、想像より発展していて驚いた。街中を歩いていても想像していたより治安は良く感じ、お店の人など関わる人はみんなとても優しく笑顔で温かい雰囲気を感じた。今回首都カトマンズ近郊と少し離れた地方のみ訪れたが、それだけでも都会と地方の差を感じた。都会はインフラなど整えるなど発展の途中という様子で、地方は自然が豊かで自給自足の農村生活を見ることができた。もし何年かたって再びネパールを訪れたら、想像以上に発展しているのだろうと感じるとともに、自然の豊かさや自給自足できているという良さは残っていて欲しいなと感じた。機会があれば、もっと首都から離れた地方へも訪れて学びたいと思った。

● 鈴木友紀

想像以上の密度の濃い 10 日間の研修になった。疲れているのも忘れてしまうくらいの刺激と学びがあった。難しすぎて、シャットダウンしてしまいそうな場面もあったが、周りの仲間の意欲に支えられて、10 日間を終えることができた。

今回、ネパールへは、開発教育・国際理解教育の視点を少し学習しての参加となった。この教育の観点で言えば、初級者もいいところだった。私は、研修メンバーの中でも年齢的には上だったため色々和隔たりがあるのではと考えながらのスタートだったが、年齢、就業年数に関わらず、本当に力強く意欲に満ちあふれる先生方と同じ時間を対等に共有させてもらえたことに、感謝している。日に日にそれぞれのメンバーの素敵な所が見え、だんだんと距離が縮まっていくからこそお互いの考えを伝え合えた。誰も否定をしない関わり合いができていたと感じた。研修メンバーの中でこそ開発教育の視点が生きていると気づいた。皆それぞれの想いを大切に、お互いを大切にしていくことの、居心地の良さを実感した。そして、さらに学びたいと思えるチームになっていったのではないかと考える。(皆さんそう感じていたら嬉しいな。)

また、ファシリテーターを務める NIED の職員の方、経験豊富な JICA の職員の方、2 人の支えと先導なくしては、現地研修は成り立たなかったと思う。いつでも二人は大きな支えとして、全力でサポートしてくださった。活動のスムーズな進行だけでなく、大切な学びの場面でも常に誘導を繰り返し、学びが止まらないように支え続けてくれていたことに、感謝してもしきれない。日本で支えてくれるたくさんのスタッフさん、現地のスタッフさん、訪問先で活動を語ってくれた関係者の方々のおかげでこの研修が成立していることに改めて気づかされている。お世話になりました。

来年度の海外研修も、きっと実り多い研修となること、間違いのないと思う。そうであってほしい。そうなるかどうかは、自分次第。

● 竹内綾音

教師海外研修に参加し、一番変わったことは自分の価値観だった。外国語を教え、外の文化に触れる機会が多い私は、海外に理解があると思っていた。しかし、「アジアの最貧国」「発展途上国」だと言われるネパールにいざ来てみると、教育への取り組みや町の様子、出会う人々があまりにも想像とは違って、自分の中の考え方や情報が間違っていることに気づかされた。「ネパールってどんなところ？」と人に聞かれたとき、渡航前と渡航後の返答が変わっていた。データの側面ではしか話をするのができなかったが、国民性や感じ取った人々の熱量を伝えていく。

ネパールや発展途上国への印象ががらりと変わり、そこに住む人々も私たちと何も変わらない人間であることを痛感した。だからこそ、私たちは助け合いお互いを高め合い、共に生きていく必要があるのだと感じた。これが国

際理解の基盤であるとも思った。

● 西村学

人は同じ空間で、同じ時間を過ごすことが何よりも大切なのだということ、そうして共感が生まれ、仲間になっていくのだと実感した。年齢も住んでいる場所も違う 12 人が一緒に旅をした。育った時代背景も違えば、培われてきた価値観も大きく異なる。集団行動が苦手な人もいる。しかし、共に過ごした非日常の空間と時間はそれぞれにあった壁のようなものを少しずつ薄くし、共感を生み、連帯感のようなものを作ってくれた。コロナ禍でデジタル化が進み、「オンラインで繋がる」機会が増えたが、やはりオンラインでは共感は生まれにくいのではないかと思う。そして、共感が生まれにくい限りは相互理解への道筋は見えにくいのではないだろうか。この共感の延長に国際平和があるのだと感じる。最後になるが、新たな刺激を与えてくれた幅広い世代の仲間たちと出会い、深い交流が図れたこと、後藤新平の遺した言葉、「人を残す」仕事をできている誇りに気づかせてくれたこの教師海外研修プログラムに深くお礼を言いたい。

● 森谷朋香

ネパールで 10 日間過ごして、「知る」ことの大切さと楽しさを改めて感じた。1 つの国でも様々な民族や文化が共存していたり、日本との交流を大切に続けようとしている人たちがいたり、伝統技術を生かし環境に配慮しながらよい製品をつくる工場があったりと、ネパールの魅力を多く発見することができて、ワクワクが止まらなかった。それと同時に、国際理解の第一歩は、「知る」ことから始まるのだと体感した。自分を知る、相手を知る、現状を知る、思いを知る、いろんな「知る」を学校現場でも増やしていき、「知る」ことの大切さと楽しさを子どもたちにも感じてもらいたいと思った。

● 渡邊亮祐

これまでに参加したどの研修よりも深く、濃い学びを得ることができた。この学びは一生物である。行程から研修まで、綿密に様々なかたが事前準備をしてくださったからこそだと感じている。素晴らしい学びの機会をいただき、本当に感謝しかない。この学びを自分のものだけにせず、地域、学校、子どもと広く伝えていきたいと思う。

この研修に参加したことをきっかけに、開発教育、国際理解教育などへの興味がさらに広がった。同僚の先生方も多くの方が興味を持ってくれ、次回以降に参加したいと言っている。今年だけではなく、今後私自身も継続して学びを深めていく。

今後も、様々な機会ぜひ、一緒に学びを深められたらと思う。この度は、素晴らしい機会をくれて、本当にありがとうございました。

● 開発教育指導者研修(実践編)第3回での報告

- ◇ 海外研修受講者 1 人につき、開発教育指導者研修（実践編）のみに参加している受講者 2～3 人ずつ向かい合って座り、5 分間×3 回（席を替わって）、現地研修についての報告を行った。



● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2024 に向けた準備

- ◇ 「開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2024」で行う現地研修報告の内容検討会を、次の日程で行った。

第 1 回：2023 年 11 月 25（土） 10：00～12：00

第 2 回：2024 年 1 月 20（土） 10：00～12：00

● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2024 での報告

<海外研修報告>

- ◇ 同行ファシリテーター挨拶の後、次の流れで、現地の写真などを投影（P.62 参照）しながら海外研修報告を行った。

- ① ネパールクイズ
- ② 学びの柱と各訪問先の紹介、印象に残っていること
- ③ 現地研修で得た学び、気づき、自分自身の変化



<ポスターセッション(実践報告)>

- ◇ 実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラム参加者へ 42 分間（14 分×3 セッション）の報告を行った。





クイズ②
日本の人口
ネパール人口
どちらが多い？

ネパール 日本

まんにん
2900万人
ネパール

約 **4.3倍** → **1億2400万人**
日本

おく まんにん

これは
どこでしょう？

この人たちは、
安い賃金で
働かされている

○か×か

「自分の人生をかけた学び=学びの熱の高さ」

☆「出稼ぎで日本へ行く」という人生をかけた選択をしているからこそ、学びの熱はとても高い。
☆『ネパールは、どうすれば日本のように豊かな国になりますか？』と聞くネパールの学生
→日本のことをとても好意的に思ってくれている。また、真剣に自国について考えている。
☆大きな希望を持ち、私たちの社会の一部を支えてくれている外国人労働者
→外国人労働者の問題と私たちはしっかりと向き合っていかなければいけない

過去にネパールに行った日本人と出会ったから農業やインフラなどのつながりできた。

JAANの活動があるおかげで、日本人がネパールで活動がスムーズにできて、信頼されている。

バッタチャンさん
ブシャルさん
シャクヤさん

③ 共通の課題

持続可能な経済発展

【内向き志向】

- ・ 経済格差の拡大
- ・ 国外への依存度が高い
- ・ 農業や伝統工芸品などの後継者不足
- ・ 労働の対価
- ・ カースト（身分差別）の影響

【外向き志向】



海外研修報告の投影資料 (抜粋)

V. 実践報告書

実践報告書の内容一覧

No.	名前	対象	時間数	テーマ	タイトル
1	石川敬祐	小学校2年生 (22名)	9	セルフエスティーム ・人権・共生	なったらいいな！ 自分もみんなもハッピーなせかい
2	大島俊介	小学校4年生 (30名)	13	多文化共生	NAPAL×JAPAN 多文化共生の街づくりへの第一歩
3	荻光平	小学校6年生 (33名)	4	多文化共生	我々は地球人
4	沖祐美帆	高校3年生 (29名)	6	貧困、格差、 環境、平和、共生	高校生 国際協力 アイデアコンテスト
5	河村知里	中学校1年生 (200名) 中学2年生 (200名)	9	共生、 外国人労働者、 食料自給率	We're the World.
6	鈴木友紀	小学校5年生 (109名)	5	文化理解、環境、 多文化共生	みんなが暮らしやすいIzumi Town をALT に提案しよう
7	竹内綾音	小学校6年生 (30名)	7	貧困、国際理解	世界の貧困を僕らが救う！ —フェアトレードで自分にできること—
8	西村学	小学校4年生 (25名)	9	貧困、格差	今の自分、未来のジブン ～いま、わたしができること～
9	森谷朋香	小学校1年生 (27名)	6	多様性	みんな なかよし だいさくせん！！
10	渡邊亮祐	中学校2年生 (240名)	5	人権、異文化理解	虹色 (私+あなた+世界) = ?

注：西村さんは別途、小学校4年生（25名）を対象に2時間の実践「ベジタリアンにとって日本はどんな国かな？」を行っている。
(2023年度開発教育指導者研修（実践編）報告書を参照)

なったらいいな！自分もみんなもハッピーなせかい

学校名	愛知県小牧市立篠岡小学校		授業者氏名	石川 敬祐
対象学年 (人数)	小学校2年生 (22名)		実践年月 (時数)	2023年 10月～1月 (9時間)
担当教科等	全科			
単元名 (活動名)	学級活動「日常の生活や学習への適応及び健康安全ー希望や目標をもって生きる態度の形成」 道徳「日本のお米、せかいのお米」			
実践する 教科・領域	学級活動・道徳			
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 (○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 (○) / 環境 () / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 ()</p>			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分自身の生活との比較を通して、ネパールの現状を知る。 ・ 日本とネパールの共通点や相違点に気付く。 ・ わたし、あなた、みんなにとっての幸せを考え、行動する。 			
単元の 評価規準	知識および技能	・ ネパールの文化や食などについて、説明できるか。		
	思考力、判断力、 表現力等	・ 日本とネパールの共通点や相違点を多面的に考えることができたか。		
	学びに向かう力、 人間性等	・ 「幸せ」という価値観を多角的に捉え、自分自身の生き方に生かそうとしているか。		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<p>本学級は、男子 15 名、女子6名(加えて1名は特別支援学級より交流)が在籍している。様々なことに好奇心旺盛な児童が多いが、食べ物や教科等の好き嫌いが激しい。そこで、自分たちの生活とネパールという国の実情を比較することを通じて、自分たちの生活が当たり前ではないことに気づき、「幸せ」という価値観の変容を促したいと抱き、本単元を設定した。</p> <p>本実践を行うにあたり、対象者が低学年児童だったので、ネパールの実情や課題などを自分事として捉えるのは容易ではないことが想定された。そこで、指導をする上で心がけたことは、ネパールの生活や文化、食などを学んだ際にも児童自身の生活に結びつけて理解させたり、共通点や相違点を考えさせたりした。</p> <p>また、授業者が教師海外研修(in ネパール)で学んだことを一方的に教えるのではなく、ブレインストーミングや対比表など、参加型手法を適宜取り入れ、児童が主体的となって仲間と対話し、思考を深めていくことを目指した。</p> <p>さらには、発達段階を考慮し、遊びから学ぶことも重要であると考えた。そして、カリキュラムの集大成には、「ハッピーライフゲーム」と称し、それまで学んだことを生かして、わたし(自分)、あなた(家族や友だちなど)、みんな(日本のみんな、ネパールのみみんななど)にとっての幸せとは何か考えるすごろくを作成した。児童は完成したすごろくで遊ぶことを通じて、仲間が考える「幸せ」に触れ、自分自身の「幸せ」という価値観の変容を促されることを期待した。</p>			

[単元計画 (全9時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	普段何気なく過ごしている日常生活を見つめ直すことを通じて、自分の生活がいくつもの事象や人とのつながりの上で成り立っていることに気付く。	<p>「<u>自分はどんな生活をしている?</u>」</p> <p>① 自分の一日の生活(平日)をふり返る。【タイムライン】</p> <p>② 仲間と比較し、共通点や相違点に気付く。</p> <p>③ ふり返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ロイロノートの活用(ICT機器の活用) ・ OPP シート(ふり返り用)
2	様々な観点から自分を見つめ直すことを通じて、自己理解を深める。また、新たな自分を発見する。	<p>「<u>自分や友だちのことをあらためて知ろう!</u>」</p> <p>① 自分の好きなこと、嫌いなこと/得意なこと、苦手なこと/大切な人、モノを見つめる。【ブレインストーミング】</p> <p>② 仲間と比較し、共通点や相違点に気付く。【ギャラリー方式】</p> <p>③ ふり返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ A4用紙 ・ OPP シート(ふり返り用)
3・4	ネパールという国に興味関心を抱くとともに、世界には自分たちと全く異なる環境で生活している人がいることに気付く。	<p>「<u>ネパールってどんな国?</u>」</p> <p>① ネパールについて知る。(都市部と農村部の様子、学校や子どもたち、食、石川が実際に感じたネパールにおけるハッピーなど)【フォトランゲージ】【クイズ】【動画】【ジグソー法】</p> <p>② ネパールの文化を体験する。(楽器演奏)</p> <p>③ ネパールはどんな国か整理する。【派生図】</p> <p>④ ふり返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ネパールBOX ・ 教師海外研修(inネパール)で撮影した写真や動画 ・ OPP シート(ふり返り用)
5	日本(自分たちの生活)とネパールの共通点や相違点に気付く。	<p>「<u>自分たち(日本)とネパールの同じところ、ちがうところは?</u>」</p> <p>① ネパールに住むある男の子、女の子の生活を知る。【ジグソー法】</p> <p>② 日本とネパールの同じところと違うところを考える。【対比表】</p> <p>③ ふり返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ World Vision (https://www.worldvision.jp/children/)の資料に加筆・修正 ・ OPP シート(ふり返り用)
6 本時	これまで学んだことを生かし、わたし・あなた・みんなの立場に立って、「幸せ」とは何かを考える。	<p>「<u>わたし・あなた・みんなにとってのハッピーとは?</u>」</p> <p>① わたし(自分)、あなた(家族や友だちなど)、みんな(日本のみんな、ネパールのおみんななど)にとっての幸せとは何かを考える。【ブレインストーミング】【対比表】</p> <p>② ふり返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ロイロノート(ICT機器)の活用 ・ A3用紙 ・ OPP シート(ふり返り用)
7・8	前時で考えた「幸せ」を基に、遊ぶ人がハッピーになれるすごろくを作成する。	<p>「<u>ハッピーライフゲーム(すごろく)を作ろう!</u>」</p> <p>① こんな世界になったらいいなという理想も含め、ハッピーライフゲームをグループ毎に作成する。【すごろくゲーム】</p> <p>② ふり返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ A3用紙 ・ OPP シート(ふり返り用)
9	幸せに生きていくことを目指して、これからの自分は何をしていくべきかを考え、行動する。	<p>「<u>ハッピーライフのために自分にできることは?</u>」</p> <p>① 他グループが作成したハッピーライフゲームで遊び、みんなでハッピーをシェアする。【すごろくゲーム】</p> <p>② 全体をふり返り、自分の夢や目標を掲げ、実現を目指す。【行動宣言】</p> <p>③ ふり返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ A3用紙 ・ A4用紙 ・ OPP シート(ふり返り用)

[本時の展開 (6時間目)]

<p>ねらい</p>	<p>・ これまで学んだことを生かし、わたし・あなた・みんなの立場に立って、「幸せ」とは何かを考える。</p>		
<p>過程・時</p>	<p>教師の働きかけ・発問および学習活動</p>	<p>指導上の留意点(支援)</p>	<p>資料</p>
<p>導入 3分</p>	<p>1 自分の身近にある「幸せ」を知る。 <u>アイスブレイク「最近感じた私の幸せ」</u> 「この1週間で、幸せだなと思ったことは何ですか？ペアで聴き合しましょう。」 ・ ペアで1分程聴き合い、その後全体で共有することを通じて、仲間の様々な幸せを知る。</p>	<p>・ 「幸せ」という価値観を深めていく導入として、児童が最近感じた全ての幸せを認める。 ・ 自分が感じた幸せを話すことよりも、他の児童が感じた幸せを聴くことを重視させる。</p>	
<p>展開 10分</p>	<p>2 わたし(自分)にとっての「幸せ」とは何かに気付く。 <u>わたしの幸せって？</u> 【ブレンストーミング】 「自分にとって、幸せだなと感じるときやことは何ですか？思いつくだけ書き出してみてください。」 ・ 自分にとっての幸せを考え、ロイロノート(タブレット)のテキストカードに書き出す。</p>	<p>・ 1と同じもしくは考え悩む児童がいることが想定されるので、前時までに活用した資料(ロイロノート内のデータ)を参考にしてもよいことを伝える。</p>	<p>・ 教師海外研修(inネパール)で撮影した写真や動画</p>
<p>27分</p>	<p>3 わたし(自分)、あなた(家族や友だちなど)、みんな(日本のみんな、ネパールの人々など)にとっての幸せの共通点や相違点に気付く。 <u>わたし・あなた・みんなの幸せの共通点と相違点</u> 【ブレンストーミング】【対比表】 「家族や友だちといったあなたが幸せになるために大切なものやことは何ですか？」 「日本のみんなやネパールの人々が幸せになるために大切なものやことは何ですか？」 ・ 2で考えたことも含めて、わたし・あなた・みんなの立場に立って「幸せ」をペアで考え、比較する。 ・ ロイロノート(タブレット)を活用し、完成した対比表を全体で共有する。</p>	<p>・ 小学校低学年児童にとって他者の立場に立って考えることは容易ではないので、状況に応じて、授業者が例を2、3個挙げる。 ・ 文で表現することが難しい場合は、単語や短い言葉でもよいと伝える。 ・ 対比表を写真で撮り、ロイロノートを活用して共有することを通じて、他のペアの考えに気付かせる。</p>	
<p>まとめ 5分</p>	<p>4 本時で学んだことをふり返り、次時へつなげる。 <u>ふり返り</u> 「今日学んだことを「あ(明らかになったこと)・か(考えたこと)・し(知りたいこと)」のポイントでふり返ってください。」 ・ OPPシート(1枚ポートフォリオ)にふり返りを書く。</p>	<p>・ 「あ・か・し」といったふり返りの視点を提示する。 ・ 前時や次時における学びのつながりを意識させる。</p>	
<p>評価規準に基づく本時の評価</p>	<p><u>「幸せ」という価値観を多角的に捉え、自分自身の生き方に生かそうとしているか。</u> 【学びに向かう力、人間性等】に対して 児童は、日常生活の中で特に意識していない自分自身の幸せを見つめ直したことで、小さな幸せに気付いたり、今の生活が当たり前ではないという思いを馳せたりすることができた。ふり返りには、「生き物の幸せも守っていききたい。もっと生き物を大切にしたい。」と記述する児童もいた。 一方で、他者の幸せ、特に、自分と関わりのないみんな(本時では、日本のみんなやネパールの人々という表現)の幸せは、漠然とし過ぎたこともあって、考えることが難しいと感じた児童が多かった。</p>		

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ ネパールについて知ってもらうために、授業者の説明は最小限にし、ICT 機器(ロイロノート)を活用して資料(写真や動画など)を共有し、児童自らの気付きや発見を促した。 ・ アウトプットの時間を多く設けるために、参加型手法(タイムライン、ブレインストーミング、派生図、対比表、行動宣言)を適宜取り入れた。 ・ カリキュラムの集大成に、学びの可視化(すごろく作り)を行った。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全校児童対象に、ネパール BOX を活用して、ネパールの写真・モノの展示や楽器演奏体験(主に、2・3年生)を行い、ネパールという国について興味をもっていただいた。 ・ 小牧市青年部員対象(約 160 人)に、「SDGs と教育」をテーマとした平和学習会を企画、運営した。またその中で、講話「ネパールの教育と貧困」を行い、SDGs 達成の鍵となる教育に携わる私たちに何ができるのかを先生方に考えていただいた。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校低学年の児童に対して、世界(ネパール)の課題を自分事として捉えさせること。また、自分以外の立場に立って、幸せについて考えさせること。 ・ 「ゲームがたくさんできる」「お金持ちになる」といった自分の欲が満たされる幸せだけではなく、幸せについて多面的に考えさせること。 ・ 既存カリキュラムとのつながりが弱いので、連続した時間数を確保すること。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第3時の「石川が実際に感じたネパールにおけるハッピー」や第5時の「ネパールに住むある男の子、女の子の生活」といった、児童がネパールをリアルに感じることができる教材や資料、仕掛けを準備すること。 ・ 学級の仲間だけではなく、上の学年や保護者など、様々な立場の人の幸せについて知る機会を設けること。 ・ 既存カリキュラムとのつながりを軸に、カリキュラムをデザインすること。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童は、ネパールをはじめ、日本以外の国に興味関心を抱くようになったこと。 ・ 児童が、ネパールという国を通じて、食べたいものが食べられることや暖かい家で暮らせることなど、自分たちの生活が当たり前ではないということに気付くことができたこと。 ・ 児童が、人それぞれ幸せの価値観が異なることに気付けたこと。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ぼくは、ネパールのこととかを学んで水が出たり、食べものがあるのは当たり前じゃないということを考えました。どうしたらみんながもっとハッピーになるかをもっと知りたいです。いま自分にできることやこうしたらあんぜんになるかなとかももっと知ったり考えたりしたいです。人によってハッピーなことがちがうことも知りました。」 ・ (自分もみんなもハッピーに生きるために)「せんそうがなくなった。電気と水とガスがとおった。ふつうの時計がある。教科書がある。ノートがある。スクリーンがある。」 (上記、2名の児童の OPP シート記述より一部引用。)
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昨今話題の SDGs を達成する鍵は、教育(ESD: 持続可能な開発のための教育)であり、持続可能な社会を担う子どもを育む使命が私たち教育者にはある。その方法の一つが、国際理解教育・開発教育である。今年度、教師海外研修に参加させていただき、たくさんの学びや現地に足を運ばなければ得られない刺激があった。しかし、身近な人・こと・ものからも国際理解教育・開発教育の実践はできる。今後も様々な人・こと・ものから学び続け、子どもの成長を喜べる教育者でありたい。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・ World Vision の HP (https://www.worldvision.jp/children/) (最終閲覧日 2023 年 10 月 14 日) ・ 久世治靖ら『よりよい未来をともに学び・ともに創るファシリテーターのための参加型アクティビティ集 コミュニケーション編—他者に関わる力を育もう—』NPO 法人 NIED・国際理解教育センター, 2018. ・ NPO 法人 NIED・国際理解教育センター『JICA 中部 教師海外研修ガイドブック』独立行政法人国際協力機構 中部センター, 2021.

NEPAL × JAPAN 多文化共生の街づくりへの第一歩

学校名	愛知県津島市立東小学校	授業者氏名	大島 俊介
対象学年 (人数)	小学校4年生(30名)	実践年月 (時数)	2023年10月～11月 (13時間)
担当教科等	全科		
単元名 (活動名)	NAPAL × JAPAN 多文化共生の街づくりへの第一歩		
実践する 教科・領域	総合的な学習の時間		
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 (○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 () / 環境 () / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 (○) / 社会参加 ()</p>		
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化交流を通して、異文化の面白さに気づき、多文化共生社会の実現に向けてできることを考える。 ・外国人の視点で自身の生活を振り返り、外国人にとってやさしい街づくりを目指すためのアイデアを考える。 		
単元の 評価規準	知識および技能	・日本と世界の文化の違いを知り、共通点や相違点に気付くことができる。	
	思考力、判断力、 表現力等	・多文化共生社会を実現できた未来を想像し、多文化共生を実現するための課題を考えることができる。	
	学びに向かう力、 人間性等	・日本語が話せない友達ができるときに、行動に移すことができる。	
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・本校は、外国にルーツがある児童が比較的多く、外国人児童の転入も進んでいる。特に今年度は、学年は違うが、10月までに2名の児童が転入してきている。担当学年の中には外国にルーツがある児童は少ないが、さまざまな文化にふれる機会が多くなってきていると感じる。そこで、子どもたちに外国人児童を引き受けることになったらどう感じるかと問うと、半数以上が心配な気持ちになると答えた。理由を問うと、言語が伝わらないことが大半を占めた。重ねて理由を問うと、言語の壁を越えた関係づくりに対して知識や経験がなく、心配に感じているのだと分かった。 ・本実践では、異文化に触れあう機会を積極的に設けることで、他国の文化の面白さや楽しさを体感させたいと考えた。また、いざ外国人を迎え入れたときに心配に思ってしまう気持ちを理解し整理することで、課題と解決策について考えさせることにした。このような学習を通して、多文化共生の必要性や当事者意識をもたせたいと考えた。 ・本実践の教材は、本校に在籍しているネパール国籍の保護者への取材と、教師海外研修(ネパール)での取材から作成した資料を用いて行っている。特に、私がネパールで体感してきた文化の共通点と相違点を感じた場面を教材化できるように工夫した。それは、研修中の実話を基にした学びを提供することで、異文化理解への関心を高めることがねらいである。 		

[単元計画 (全13時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	ネパールの食事や音楽、ダンスから、世界にはさまざまな文化があることを知る。	「ネパール報告会」 ・ネパールで食べた料理や、体験した音楽やダンスについての紹介を聞く。【クイズ】 ・ネパールの小学生と一緒に踊ったソーラン節の動画を視聴する。	[写真] 料理、飲み物、店舗 食べ方など [動画] 民族楽器、伝統舞踊、ソーラン節など
2・3	ネパールと日本の文化の違いをつながりを知ることで、ネパールという国に肯定的に出会う。	ネパールについてもっと知ろう 「ネパール博士になろう！ネパールクイズ」 ・グループで協力してクイズに答える。【クイズ】 ・ネパールで取材してきた動画や写真を見て、答え合わせをする。	[実物] 楽器、国旗など
未実施	他国の文化体験を通して、異文化理解への関心を高める。 ※保護者の都合で年度末・次年度に延期	「ネパール料理を実際に食べてみよう」 ・ネパール国籍の保護者にネパール料理の体験教室を開いてもらい、調理実習をする。 ・民族楽器の演奏を聞かせてもらい、言語を越えたコミュニケーションについて理解する。	[実物] 楽器、スパイスなど
4～6	ネパールとの共通点と相違点について考えることで、他国の文化の面白さや楽しさを理解する。	「実録 NEPAL ドラマ！研修中の実話7」 ・共通点と相違点に肯定的に出会う。【ロールプレイ】 ・共通点と相違点を分類する。【カード式整理法】 ・自分にできることかどうかを考える。【二次元軸】	[写真] 二人乗りノーヘル ホームステイ中 視覚障害者と高校生 [取材]現地コーディネータ・通訳から
7・8	外国人の友達を招き入れたときに、どんなことが起こるのかを考える経験から、自分が潜在的にもっている外国人へのイメージを知るとともに、どのような未来をめざしていくのかを決める。	「外国人が友達になったらどんな未来に…ベスト3」 ・外国人と友達になることでどんな未来が待っているかを考える。【派生図】 ・外国人と友達になったらときにおとずれる良い未来と悪い未来をふくらませる。【ブレインストーミング】 ・良い未来についてベスト3を決めて、どちらの未来をめざしていくのかを決める。【ランキング】	
9	自分が少数派になったときの感覚を養わせることで、外国人が日本に来たときに、どのような気持ちになるのかを理解し、多数派としてできることを考える。	「世界の言語であいさつゲーム」 ・1回目は世界の言語の人口比率に合わせたカードで行うことで、世界の現状について理解する。 ・2回目は愛知県の人口比率に合わせたカードで行うことで、少数派になったときの感覚を養う。 「異文化コミュニケーションゲーム パーンガ」 ・自国のルールと他国のルールの違いを体感し、少数派になったときの感覚を養う。	あいさつカード 愛知県人口比率 パーンガカード
10・11 本時	学校外で利用する施設が外国人にとって優しいのかどうかを考えることで、外国人への配慮の方法がたくさんあることを知る。	「外国人にとって優しい街づくりデザイン」 ・日常生活で利用する施設について思い出した後、7つに絞り込む。【ブレインストーミング】 ・『こんな〇〇があったらいいのに』というアイデアをイラストと言葉でかく。【イメージ図】	
12		・作成したイメージ図の中で、この仕組みを早く作った方がよいというアイデアがかかれたものをえらび、投票する。【重みづけ投票】	
13	実際に外国人の友達を迎え入れたときに、自分にできることを考える。	・学習を振り返り、自分にできることを考え、行動宣言をする。【行動宣言】 ・第6時の二次元軸から自分の考えの変化について気付かせる。	

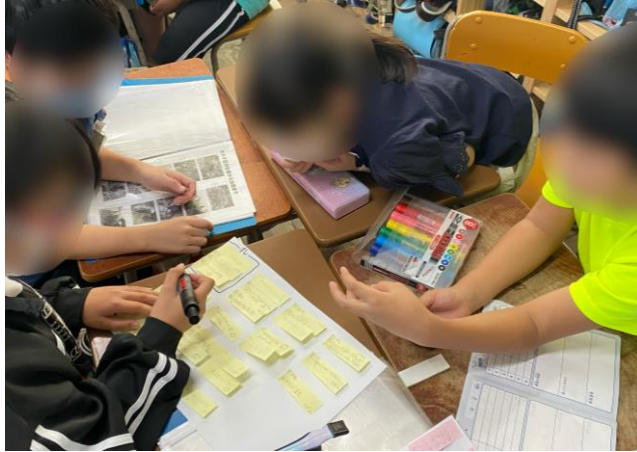
[本時の展開 (10・11時間目)]

ねらい	<p>・学校外で利用する施設が外国人にとって優しいのかどうかを考えることで、外国人への配慮の方法がたくさんあることを知る。</p>		
過程・時	教師の働きかけ(○)、発問および学習活動(●)	指導上の留意点(支援)	資料
導入 5分	<p>1 アイスブレイク「ステキなハート」でグループに分かれる。</p> <p>●言葉でハートの特徴を説明して、同じハートをもっている人を探す。</p>	<p>・以後のグループ活動が活発に行われるように、同じハートをもつ安心感を味わわせる。</p>	ハートが書かれたカード(人数分)
展開 15分	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">めあて:外国人にも優しい街づくりを考えよう。</div> <p>2 日常生活で利用する施設を書き出す。【ブレインストーミング】</p> <p>●意見出しが終わったら、グループの中でおすすめの施設を3つ以内で発表する。</p> <p>●他と重なった場合は、それ以外の施設で発表する。</p> <p>○次の学習のために、アンケートづくりを並行して行い、教師のタブレット画面を共有しておくことで、子どもたちにどのような意見が出てきたのかをリアルタイムで確認できるようにする。</p>	<p>・子ども主体で行うために、施設を考えると子どもにも任せるが、ここでの意見共有は主の目的ではないため、手際よく進める。</p>	
10分	<p>3 7つの施設に絞り込む。【アンケート】</p> <p>○アンケートを配付して、子どもたちに答えさせたあと、アンケート結果を棒グラフで示し、共有する。</p> <p>●票数が多かったものを整理して、7つに絞り込む。</p> <p>●どの施設を担当するのかを相談して、立候補する。</p>	<p>・Formsを利用して、即座にアンケート結果が提供できるようにする。</p> <p>・少数派の意見でも、合体する案を出して、拾い上げるようにする。</p>	
45分	<p>4 担当する施設について、どんな工夫が考えられるのかを話し合う。【イメージ図】</p> <p>●施設の概略図を自由に書きながら、どのような工夫があるのかを書き出していく。</p> <p>○概略図のイメージがわからない場合は、Aiで生成した概略図を参考に、イラストを描かせる。</p>	<p>・インターネットに依存するのではなく、自分たちの自由な意見を考えさせたい。</p> <p>・教師の働きかけの内容を明確にもっておく。</p>	
15分	<p>5 他のグループと意見を共有する。</p> <p>●ギャラリー方式で成果物の共有をして、他のグループの意見を取り入れることで、自分のグループの成果物をより良いものにする。</p> <p>○これ以降、自由に他のグループに移動して意見を共有しに行ってもよいことにして、活発に意見が交わされるような雰囲気をつくる。</p>	<p>・次時に投票をすることを伝えることで、成果物の完成度を高めさせる。</p> <p>・すべての施設を一斉に改善することは難しいことを伝えるために、優先順位をつけていく意味を示したい。</p>	
評価規準に基づく 本時の評価	<p>・多文化共生社会を実現できた未来を想像し、多文化共生を実現するための課題を考えることができる。</p> <p>A 多文化共生社会を実現できた未来を多面的・多角的に想像することができ、実現のためにどのような課題があるのかを考えることができる。</p> <p>B 多文化共生社会を実現できた未来を想像し、多文化共生社会の有用性を感じることができる。</p>		

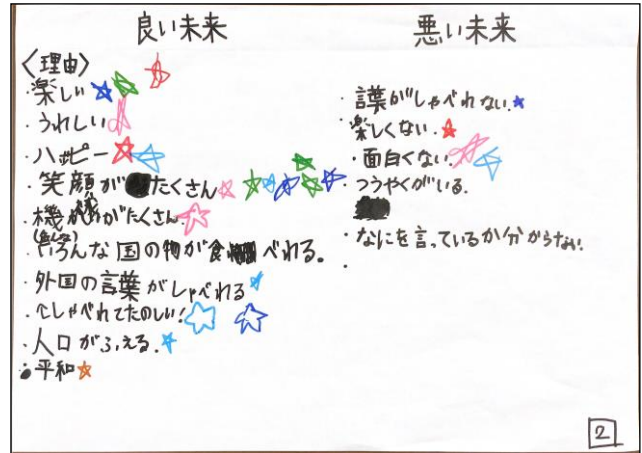
〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・JICA 海外協力隊でネパールに派遣されている方から、現在のネパールの景色や現地の人との写真を提供していただき、子どもたちに紹介した。子どもたちにとって、外国が遠い存在に感じている子どもがいたため、「ネパールで活動している友達から、頑張っているあなたたちのために、写真が届いたよ」と伝え、写真を利用した。特にマリーゴールドの花を見せた時の歓声が印象的であった。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・夏季休業後、現職教育の時間をもらい教員研修を行った。外国人に対して内向的に接してしまっていた私自身の反省を共有しつつ、これから外国人を受け入れるときに、どのような心構えで受け入れたいのかを考える機会にした。 ・全校生徒を対象に、ネパール報告会を行った。「日本人でも外国人でも、一緒に楽しめる学校であろう」という思いを、子どもたちと共有する機会になった。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の実体験を聞かせるだけでは、小学生に自分は言語の壁を越えられるかを想像させることは、難しかった。今回は、ソーラン節を教えた動画やホームステイの歓迎会で一緒に踊った動画を視聴することでしか、言語を越える体験を話すことができなかった。理想としては、ネパールの料理や音楽の体験会を設けたかった。この体験会を通して、子どもたちに言語を越える体験をさせられると考えていたので、今後の実践の中で必ず実現させたい。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・JICA 海外協力隊や JICA ネパール職員など、現地で活動している方とオンラインでつながる機会を設けることができれば、外国への関心はより広がったのかもしれない。現地の方との打ち合わせなど、プログラム化することで、もっと容易にオンラインでのつながる機会を提供できると思うので、今後の実践で挑戦しつつ、環境整備にも取り組んでいきたい。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・実践が終わった12月に、日本語を話せない外国人Aを受け入れることになった。子どもたちに「本当に外国人を迎え入れることになりました」と伝えると、あいさつの仕方を調べてきたり、同じ国にルーツがある子を中心に自己紹介の仕方を勉強したりと、子どもたちが主体となって準備を進める姿を見ることができた。実際に迎え入れてからは、子どもたちは翻訳ツールを使いこなしながら、Aに日本に来てよかったと思わせたい一心で、話したり遊んだりしている。小学生が、自分たちの生活の中で自分たちの力で言語の壁を越えていくことができているのは、本実践が有益に働いたことが理由にあるのであれば、この上なくうれしい。ただ、子どもたちが自分でこうしたいと考えて行動していることを忘れずに、子どもたちの可能性を少しでも広げてあげられるように、私自身も研鑽を積んでいきたい。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・外国にルーツがある子どもが、自慢げにもう一つの故郷のことを話しに來たり、その国の言語の勉強を始めたりしている。もう一つの故郷に誇りをもった子どもたちに感動している。 ・「外国人だから優しくするのではなく、一人の人として優しく接することができる人になりたい」と話す子どもがいた。子どもに勉強させられることの方が多かった。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールでは、五感を余すことなく使って学んできた。ネパールのことが本当に大好きになった。日本には、中国人やベトナム人、韓国人のように、多くの外国人が日本で暮らしており、ネパール人も13万人を超えている。日本で暮らしている外国人は、日本のことが好きだと思っているだろうか。身近で生活している外国人はどうだろうか。この研修を受講して、この思いは強くなった。そして、この研修のおかげで、未来を生きる子どもたちとともに、本気で多文化共生社会を目指して邁進していきたいと考えるようになった。間違いなく、この研修は自分の人生をアップデートする機会になる。また、今後の海外研修参加者とも、この感動を共有できるのかと思うと、楽しみでならない。 ・本実践は、ネパールでの研修がなかったら実現できないことばかりである。昨年度まで、開発指導者研修の経験を生かして国際理解教育の実践を行ってきたが、海外研修での学びを自身の実践に取り入れたいと懇願してきた。それを実現できたことが何よりうれしい。改めて、本研修に携わった関係者やともに学んだ仲間へ感謝を伝えたいと思う。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・株式会社ハートクエイク「異文化コミュニケーションゲーム『バーンガ』」を参考に教材開発 https://heart-quake.com/article.php?p=592 ・教師海外研修で収集した取材資料

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



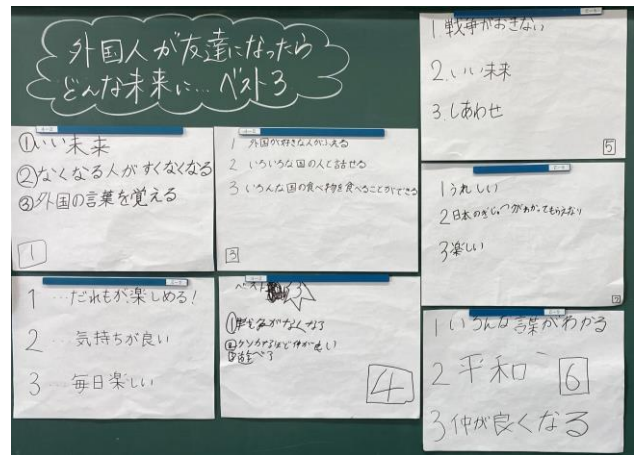
実録 NEPALドラマ！研修中の実話7 カード式整理法の様子



外国人が友達になったらどんな未来に 対比表の成果物



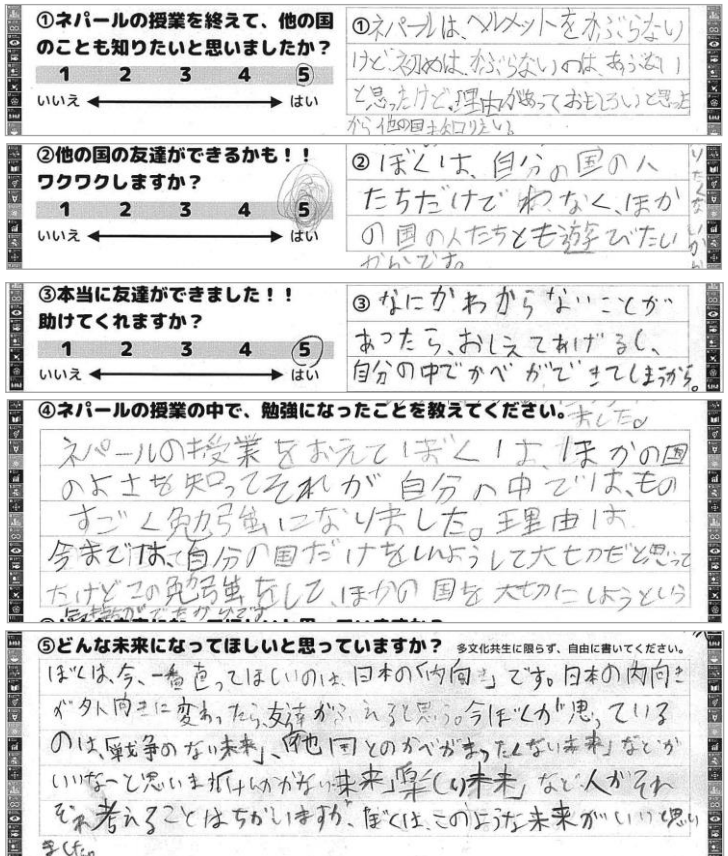
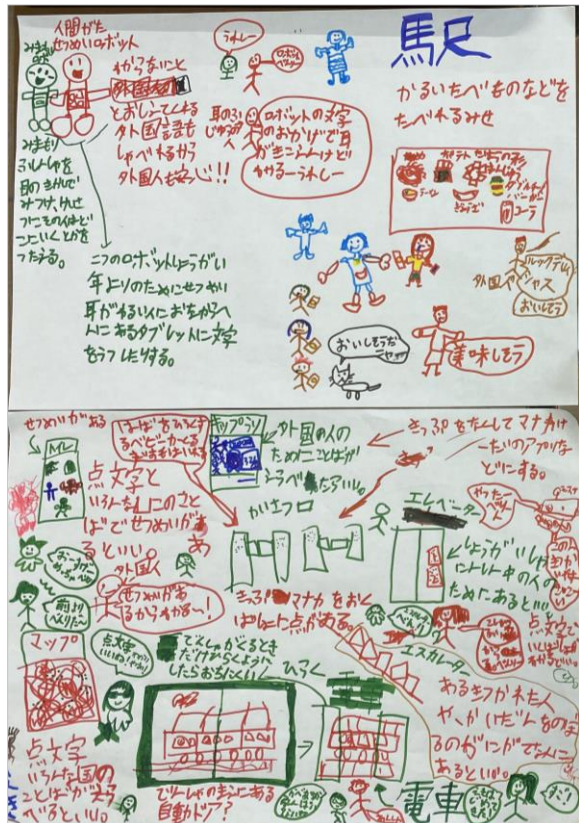
外国人にとって優しい街づくりデザイン 投票の様子



外国人が友達になったらどんな未来に 良い事ベスト3

外国人にとって優しい街づくりデザイン 成果物

振り返りシートの記述



我々は地球人

学校名	静岡県磐田市立東部小学校		授業者氏名	荻 光平
対象学年 (人数)	小学校6年生(33名)		実践年月 (時数)	2023年11月 (4時間)
担当教科 等	全科			
単元名 (活動名)	世界の国々のことをもっと知ろう			
実践する 教科・領域	総合学習			
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 () / 文化交流 () / 多文化共生 (○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 () / 環境 () / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 ()</p>			
単元目標	・日本とネパールの国の違いを比べたり、調べたりする活動を通して、様々な文化や考え方をもった人々がいることに気づき、国籍に関わらずだれもが心地よく過ごせる地域社会を作っていくにはどうすればよいか考えることができる。			
単元の 評価規準	知識および技能	・ネパールと日本の違いを比べることを通して、日本とその他の国々に、様々な文化や考え方の相違点があることに気付くことができる。		
	思考力、判断力、表現力等	・様々な文化や考え方の相違点を多角的な視点から分析し、自分なりの考えをもつことできる。		
	学びに向かう力、人間性等	・グローバル化する地域社会の中で、様々な国をルーツにもつ人々とどのように関わり、よりよい地域コミュニティを作っていきたいという思いをもつことができる。		
単元設定の理由・意義 (児童生徒観、指導観、教材観から)	<p>・5年生の学習では、自分が関心をもった国々について調べ学習をしている。調べ学習を通してその国の概要についての知識をもっているが、その国と日本との関わり、自分がどのように関わっていくのかという具体的なイメージをもつことはできなかった。今回のネパール教材を活かして、外国との心理的な距離感を解消すること。また身近な外国をルーツとする人や物と前向きに関わろうとする姿を目指し単元を設定した。</p> <p>・ネパールと日本を比較すると、文化や気候風土、街並み、学校の様子など、児童はたくさんの違いを発見できる。違いに対する気づきを交流していくことを通して、この世界には多様な考え方や生き方をしている人々がいることをイメージし、それらを受け容れながら生きていこうとする態度を養いたい。</p>			

[単元計画(全4時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	日本とネパールを比べる活動を通して、異文化について考えること、関わることの楽しさに気づくことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ネパールについて知ろう。 ・ネパールクイズ【4つのコーナー】 ・ネパール(途上国)に対するイメージを書き出す。【ブレインストーミング】 ・グループごとに写真について話し合い、考えたことを発表する。【フォトランゲージ】 ・写真についての説明を聞く。 	写真(風景や食べ物) 実物
2	世界には様々な国があり、多様な価値観や文化をもっていることを知り、多様性があることの良さを考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ○日本とネパールの同じところ・違うところを見付けよう。 ・写真やエピソードなど参考に日本とネパールの対比表を作る。【対比表】 ・それぞれのいいところを探す。 ・もしも、世界の人々が金太郎あめのようなだったら【派生図】 	写真(街並み・学校・市場など) アンケート結果
3	根拠をもってあってもよい違い、いけない違いを仕分ける活動を通して、違いを受け容れ尊重しあっていくことの大切さに気付くことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ○あってもよい違い・ダメな違い ・子どもたちの考えをもとにしたちがいカードを並べる。【マトリックス】 ・あってもよい違い・いけない違いについての考えを共有する。【ワールドカフェ】 	写真・ビデオ エピソード カード
4 本時	これまでの学習を生かして、自分たちの地域にいる外国にルーツをもつ人々に目を向け、その人たちとともに、心地よく生きられる社会に必要なものを考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ○だれもが心地よく生きられる社会に必要なものは何(物、心、考え方)? ・磐田市(東部小)がもし100人の村だったら【クイズ】 ・日本に来る外国人の思いを知る。 ・「多文化共生」の定義を知る。 ・行動宣言を考える。【ブレインストーミング】 ・自分ができることは何だろう?【ギャラリー】 	資料 ビデオ(日本語学校)

[本時の展開(4時間目)]

ねらい	自分たちの地域にいる外国にルーツをもつ人々に目を向け、考え方や文化の違いを受け容れながら、その人たちとともに、心地よく生きられる社会に必要なものを考え行動宣言を作ることができる。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
	<p>○もしも磐田市が100人の村だったら</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この数や人口統計からどんなことがわかりますか。 日本人が減っていて、外国人が増えている。 去年と比べても増えていることから、これからも増えていくかもしれない。 <p>○外国人が日本に来る理由を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語学校でのエピソードをききましょう。 日本は外国と比べて安全で安心して暮らせる国だ。 仕事をするために日本に来ているのだな。 貧しい家族を養うために働きに来ているのだな。 <p>○多文化共生って何だろう？多文化共生アンケートをもとに現状の問題点を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果からどんなことがわかりますか。 外国人は日本人に対して親しみをもってくれている。 逆に日本人は外国人に対する親しみ度が低い。 一緒に暮らしていくには、互いのことをよく知りたいな。 <p>○自分たちにできること、どんな考え方や思いをもって暮らしていく必要があるか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちにできること、どんな考え方や思いをもって暮らしていく必要があるか考える。 まずは挨拶をしっかりしたいな 外国の食事や日本の食事を一緒に食べてみる 外国の文化について知る。 お互いのいいところをみつけられるようにしたい。 <p>○自分の行動宣言を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分にできそうなことを決めよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・磐田市の人口に占める外国人人口や全校児童数に占める外国籍児童数の割合を提示する。 ・日本語学校生徒の思いや考えを紹介する。 ・ネパールの平均的収入や物価について話をする。 ・外国人からの思いに応えられていない地域の現状を確認する。 ・具体的な行動に限らず、思いや精神に関しても認める。 ・みんなの意見を参考に自分に実現可能なものを選ぶよう声を掛ける。 	<p>統計資料</p> <p>エピソード</p> <p>アンケート結果</p>
評価規準に基づく本時の評価	自分たちの地域にいる外国にルーツをもつ人々に目を向け、考え方や文化の違いを受け容れながら、その人たちとともに、心地よく生きられる社会に必要なものを考え行動宣言を作ることができる。		

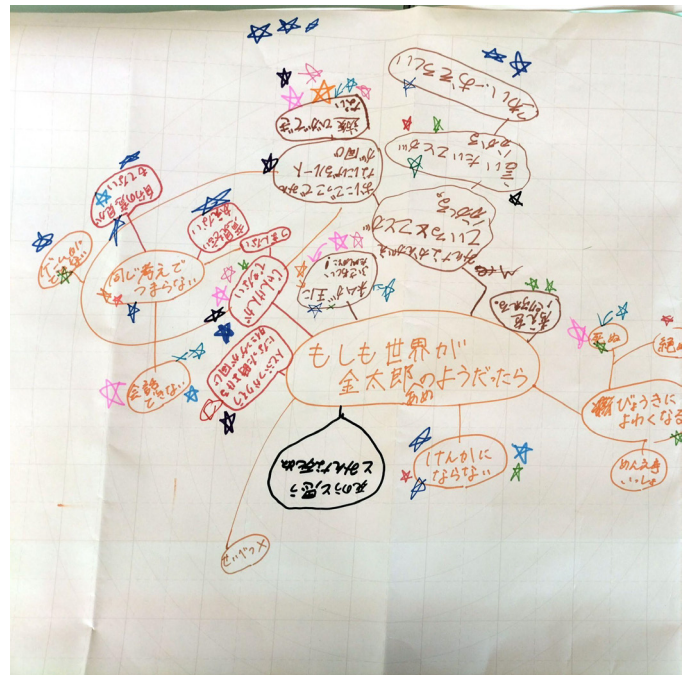
[総括・まとめ]

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の外国人支援員さんにゲストティーチャーを依頼した。身近な国際協力をしている人という位置づけで、児童に紹介し、お話をしてもらった。外国籍児童を勉強面や生活面でサポートをしている方の思いや考えを聞くことで、国籍に関わらず同じように生活し、勉強できる環境を作ることの必要性に気づけた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・他の教員への報告会を開催した。 ・授業実践を校内に周知した。 ・PTA バザーでネパールブースを作ってもらい授業実践やネパールボックスの紹介をした。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・児童にとって外国をより身近に感じてもらうために、資料を精選すること。 ・児童から途上国に対するマイナスイメージを払拭し、その国への理解や支援を促すこと。 ・外国のことを自分の身近な環境に置き換えて、自分たちの課題であると捉えてもらえるようにすること。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・現地の雰囲気を知りやすく伝えるために、学校の様子をビデオで提示する。 ・ネパールや途上国に対して前向きに捉えられる内容を、前半部分でしっかりと紹介する。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・世界には様々な国があり、違う国の人と仲良くするには、互いの文化の違いを受け入れることが大切であると気づくことができた。 ・外国についてじっくりと考える経験がない児童がほとんどであったが、日本と外国、外国人との関りについて考え行動するきっかけになった。
学びの軌跡 <small>(児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</small>	<ul style="list-style-type: none"> ・最初は、ネパールは日本と文化が違ってあんまり行きたくないなと思ったけれど、金太郎飴をやって、どこの国も一緒に考えをしたら、とてもつまらないことに気がついた。外国のいいところに気づけてよかったと思う。 ・違いの違いをして、どんな違いならいいのかどんな違いはだめなのかがわかった。別にいい違いは認めあっていたいと思った。行動宣言をして、外国人の人は、日本の人と仲良くしていると思っているのに、日本の人は、あまり親しくないと思っていてびっくりした。お互いが親しくなるために考えたことをやっていたいと思った。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・参加型の手法を楽しむ姿が印象的だった。参加型の手法を取り入れることで、与えられた情報をただ鵜呑みにするのではなく、自分たちで主体的に学びに取り組んでいた。 ・授業後に様々な質問をしてきたり、自主勉強で調べてみたりする児童もいた。 ・ネパール(外国)と日本、クラスにいる外国籍児童、地域にいる外国籍の方々との関りについて前向きに捉え、考えていく必要性を考えることができた。
単元構想・実施における参考資料等	<p>静岡県公式ホームページ「多文化共生基礎調査」 https://www.pref.shizuoka.jp/kurashikankyo/1049844/tabunkachiiki/1002475/1015556.html 第4次磐田市多文化共生推進プラン</p>

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]

	日本	ネパール
食料	米(ゆ, ちり, 丸に近い) はし 色々な味 みそしる	米(バヤバヤ, 細長い) 手 辛いものが多い ガール
言語	日本語	ネパール語
治安	治安が良い	治安が悪い
家	土地を買う → 自分の土地	住み続けると自分土地になる
お金	日本円	ルピー
物価	物価が高い	物価が安い
国	島国	大陸
服装	和洋服	サリー
首都	東京	カトマンズ
動物	牛 → 肉付きが良い	牛 → やせている, ガリガリ
天竺教	キリスト教	インドの教
祭	仏教 祭り	お面

▲対比表



▲もしも世界が金太郎あめのような国だったら



▲行動宣言づくり

☆外国の遊びをする ☆☆☆
 ☆いっしょにごはんを食べる ☆☆☆
 ☆日本の遊びを外国人といっしょにする ☆☆☆
 ☆それぞれの国のことを話す ☆☆☆
 ☆それぞれの国の言葉を伝えよう ☆☆☆

▲行動宣言

- ・違いのいいところや悪いところを知ることができた違いによる差別などは絶対にしてはいけないと思うでも、ちがいの面白いところもある。
- ・日本と他国の違いを考えたら、割と、別にいいというものが多かったし、色々な考えで宗教などがあったりするから、違っていいというものが多かった。けれど、生活や健康に害のあるものは、少し変えたほうがいいのかなと思った。
- ・それぞれの、宗教や文化の違いなどを理解して外国の方を尊重しあい、普段からコミュニケーションを取ることが大切ということがわかった。
- ・日本のことだけでなく、他の国のことを知ることが大切だと思いました。外国人と両思いになるには、交流やあいさつなどが大切だと分かりました。

▲児童の感想より抜粋

高校生 国際協力 アイデアコンテスト

学校名	愛知県立常滑高等学校		授業者氏名	沖 祐美帆
対象学年 (人数)	高校生3年生(29名)		実践年月 (時数)	2023年9月～10月 (6時間)
担当教科等	地理歴史(世界史)・公民			
単元名 (活動名)	「第3章 世界各地の生活・文化 (第4節 南アジア)」			
実践する 教科・領域	地理A			
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解(○) / 文化交流() / 多文化共生(○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存(○) / 情報化()</p> <p>C 地球的課題 … 人権() / 環境(○) / 平和(○) / 開発(○)</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識(○) / 市民意識(○) / 社会参加(○)</p>			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・南アジアの地理的特徴について知る ・発展途上国や日本の課題について考える ・高校生が実践できる国際協力について考える 			
単元の 評価規準	知識および技能	・南アジアの地理的特徴を理解する		
	思考力、判断力、 表現力等	・発展途上国や日本の課題について考える		
	学びに向かう力、 人間性等	・高校生ができる国際協力について考える		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・本授業を行ったクラスの生徒は、理型の習熟クラスであり、何事にも積極的かつまじめに取り組むことができる。本授業においても、「ポスター用の模造紙を加工してよいか」という質問が出てくるなど、創造性豊かに意欲的に取り組むことのできる生徒たちである。 ・本単元では、学習項目として、南アジアの自然環境と生活、歴史と宗教、語族・民族、農業・工業、経済発展と今後の課題、これからの南アジアと日本を扱った。 ・南アジアの国々については地図帳等の地図を用いて場所を確認したり、写真や動画を用いて生徒が興味を持てるように工夫した。 			

[単元計画 (全 6 時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	南アジアの地理的特徴について知る	<p>「南アジアの地理的特徴について知る」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師海外研修でネパールに訪問した際に撮影した写真や動画を用いてのクイズ大会 ・南アジアの自然環境と生活、歴史と宗教、語族・民族、農業・工業、経済発展と今後の課題、これからの南アジアと日本について学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールで撮影した写真・動画（食・スイーツ・街並み・村・人・ネパールの語学学校での日本語授業の様子） ・ワークシート ・教科書 ・地図帳
2	発展途上国や日本の課題について考える	<p>「途上国の課題について考える」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・途上国の課題を個人で書き出す ・グループごとに課題を共有する ・グループごとに作成した課題を回し読みし、新たな視点をみつける ・「課題解決のためにどのような支援の例があるか？」について考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・カラーペン ・教科書 ・地図帳
3~5	発展途上国や日本の課題について考える	<ul style="list-style-type: none"> ・ポスターを作成する ・模造紙にカラーペンを利用してポスターを作成する ・ポスター項目として、タイトル・解決したい課題・高校生ができること・なぜ解決しなくてはいけないのかを設定した ・日本とのつながりを明示することを留意事項とした 	<ul style="list-style-type: none"> ・模造紙 ・カラーペン ・教科書 ・地図帳 ・タブレット ・スマートフォン
6 本時	発展途上国や日本の課題を踏まえ、高校生ができる国際協力について考える	<ul style="list-style-type: none"> ・4人または5人グループで、1班につき5分以内で発表する ・発表の形式は自由だが、要点をまとめることを留意事項とした ・すべての班の発表終了後、1人3票ずつ投票を行った ・投票における評価は、ポスター部門・発表部門・総合部門にわけて行った 	<ul style="list-style-type: none"> ・模造紙 ・カラーペン

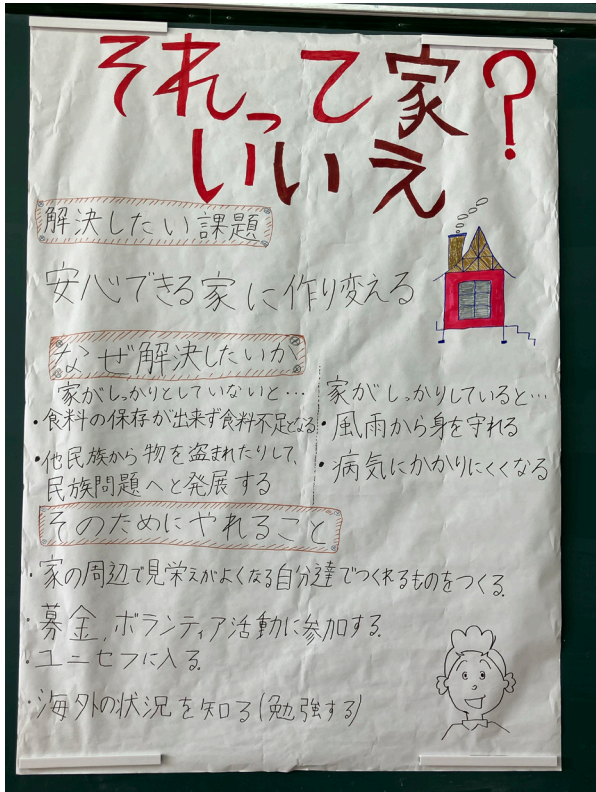
[本時の展開 (6時間目)]

ねらい	・発展途上国や日本の課題を踏まえ、高校生ができる国際協力について考える		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
5分	【導入】 「ルール説明、諸連絡」 ・司会の生徒が本時の目的、ねらい、ルール説明、注意点、発表順の説明を行う <<教員の働きかけ>> ・発表したり、意見の言いやすい環境づくりを行う	・事前に司会をやりたい生徒を決定し、説明してほしい最低限の内容を提示する ・事前に生徒とともに、本授業の概要を黒板に板書する ・生徒主体となるように板書や司会進行を生徒に任せる	
35分	【展開】 「ポスター発表」 ・7つの班がそれぞれ発表する(4人または5人グループ) ・1班につき5分以内で発表する (発表終了後のコメントシート記入も含めて5分) <<教員の働きかけ>> ・発表時間を設定したタイマーを生徒に貸し出す ・コメントシートがなくなった生徒にコメントシートを補充する	・ポスターの形式は自由とする ・要点をまとめることを事前に複数回助言する ・発表を聞く生徒はメモを取りながら聞くように助言する	
10分	【まとめ】 「投票」 ・すべての班の発表終了後、1人3票ずつ投票を行う ・投票における評価のポイントは、ポスター部門・発表部門・総合部門の3種類に分ける ・投票時間は3分、集計1分で行う ・3分経過したタイミングで、残り1分のアナウンスを代表の生徒におこなわせる <<教員の働きかけ>> ・投票時間が残り1分になった際、代表生徒にその旨を伝達する 「総括」 ・感想の記入をする <<教員の働きかけ>> 本日のまとめとこれまでの活動の講評を行う	・発表の形式は自由とする ・投票時間の管理を行う ・参加型、生徒主体を重視し、教員が全体に声掛けするのは最後の「総括」のみにする ・全体の進行を生徒に任せる	
評価規準に基づく本時の評価	・南アジアの地理的特徴を踏まえたうえで、発展途上国の課題を日本と関連させながら考えることができた ・高校生ができる国際協力について考えることができた		

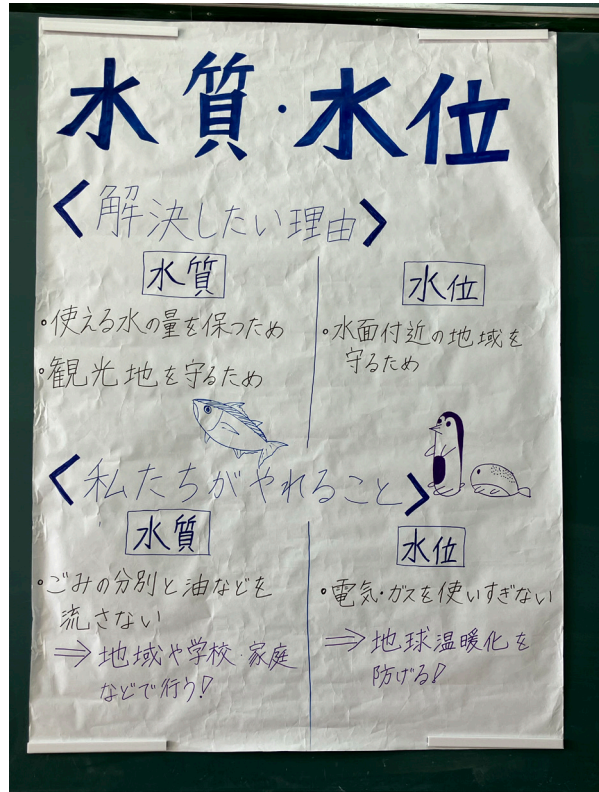
〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・単元実施の際、生徒の意欲を高める目的と、学校内の教員に国際理解教育を広めるために、研究授業として多くの教員に授業見学をしていただいた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・愛知県高等学校国際教育研究協議会(AKK)で講師をつとめた。 ・ESS 部での途上国の課題について考える取り組みを行った。 ・高校 3 年生の総合的な探究の時間に英語以外の外国語を学ぶことの意義について生徒に考えさせる活動を行った。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・班ごとに取り扱うテーマが異なり、ポスター制作を行った 3 時間分の授業は、常に個別対応が必要だった。 ・班によってポスターの制作速度が異なり、間に合わなかった班は授業後に居残りをするなどしてポスターを完成させたため、授業外での対応も必要だった。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・ポスター発表の際、生徒がポスターを手で持って掲示する方法をとったが、ポスターを持ち替えたりする手間があったので、発表する際は掲示すべきだった。 ・ポスターを作製した後、掲示する場所がなく、ポスターの活用は授業内で終了してしまった。授業終了後も文化祭などで掲示できたらよりよかった。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・派生図を用いることで、より深い理解につながったり、多様な意見がでた。 ・コンテスト方式にすることで、グループごとに様々な工夫を凝らした作品にすることができた。 ・地理的な特徴と現代の課題を結び付けて考え、これからの社会のあり方を様々な視点から考えることができた。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・「誰も考えたことがないような観点から(途上国と日本の)課題について考えて、それを(ポスター発表として)うまくまとめられたので良かった」 ・「あらためて途上国の問題について考えてみて、色々な課題があるなあと思った。今回学んだことを意識しながら生活していきたいと思った」 ・「世界中の課題について多面的な角度からみんなの視点で課題をおさらいできたのが楽しかった」 ・「(様々な課題について)考える時間があり、とてもいい時間になって楽しかった」
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒から「楽しかった」という意見が聞けたことが最もよかったことだと思う。国際理解教育や異文化理解などは、外国語科がメインだと考えられがちだが、地理歴史科や公民科でも取り扱う価値は十分にあるのではないか。また、途上国の課題について考えることは、自国の課題について考えることにもつながり、地理歴史科や公民科においては、科目の学習において、大いに役立つと考えられる。 ・また、ネパールでのごみ問題に着目し、生徒へ話したところ、一部の生徒が校内の畑に捨てたままになっていたビニールごみなどの清掃活動を行うという効果があった。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書『基本地理A』(二宮書店) ・地図帳『高等地図帳』(二宮書店) ・『環境学習実践者向けESDガイドブック ESDははじめの一步』(名古屋市)

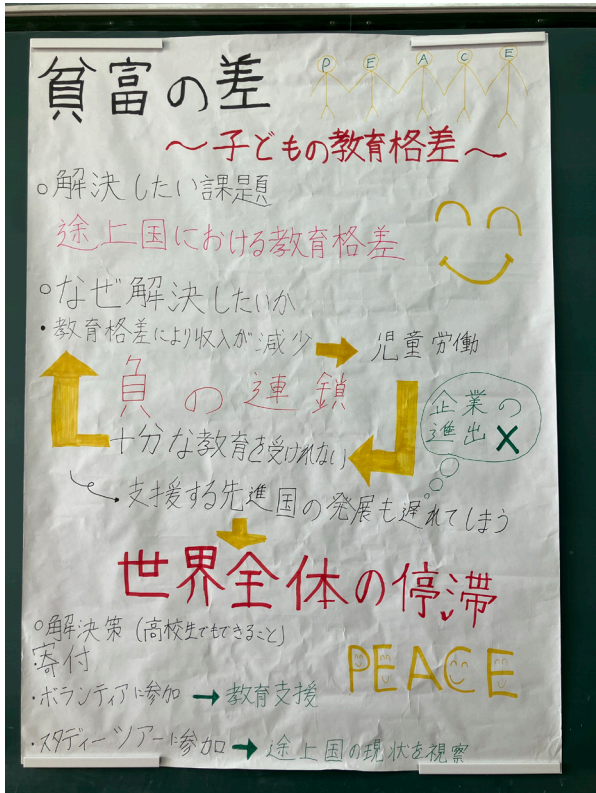
[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



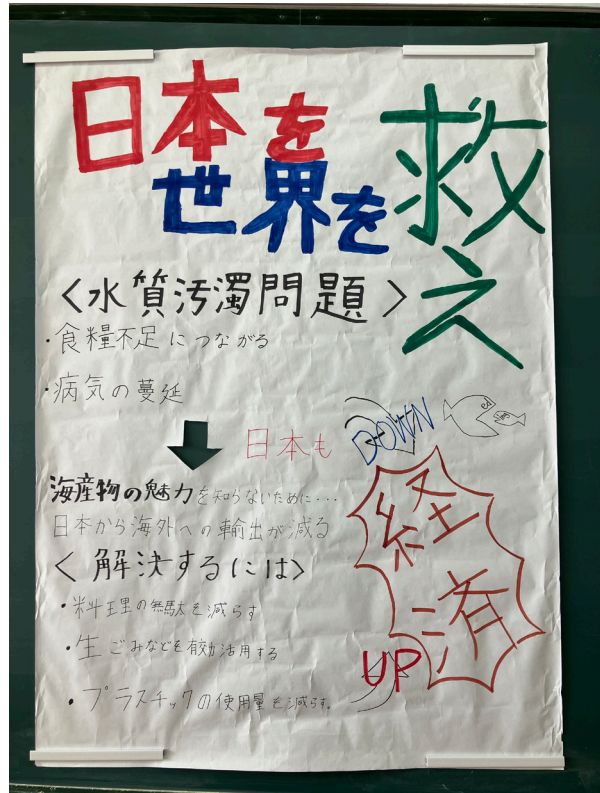
▲ 制作したポスター1



▲ 制作したポスター2



▲ 制作したポスター3



▲ 制作したポスター4

We' re the world.

学校名	愛知県豊明市立豊明中学校	授業者氏名	河村 知里
対象学年 (人数)	中学校1年生(200名)	実践年月 (時数)	2023年 12月 (2時間)
担当教科等	英語		
単元名 (活動名)	We' re the world.		
実践する 教科・領域	英語、学活、総合的な学習		
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 (○) / 多文化共生 (○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 (○) / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 () / 環境 () / 平和 (○) / 開発 (○)</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 (○) / 社会参加 (○)</p>		
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の中の日本やネパールの立場を知り、世界とつながることの大切さを考える。 ・地球に住む1人としてできることを考え、行動するきっかけをつくる。 		
単元の 評価規準	知識および技能	<ul style="list-style-type: none"> ・世界や地域の問題について知る。 ・〈want to〉の文構造を理解している。 	
	思考力、判断力、 表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・世界や地域の問題について伝えるために、自分がしたいことについて、〈want to〉を使った文で表現できる。 ・世界とつながることの良さと課題を考えることができる。 	
	学びに向かう力、 人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・世界や地域の問題について、自ら考えそれに対して自分ができる行動について考える。 	
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・温暖化など一つの国だけでは解決が難しい課題が増えている。また、日本は外国人労働者や外国籍生徒が増えている。そのような状況下にいる上で、世界とのつながりを知り、世界全体で取り組むべき課題について自ら考え行動する力が必要だと考えたため。 		

[単元計画 (全8時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	ネパールについて事前アンケート調査を行う。	○ネパールについて知っていることの調査を行う。 ・ネパールの位置や食事、言語など知っていることを出す。 ○ネパールの人達に聞きたいことをまとめる。 ・英語でネパールの人たちに聞きたいことを言う。	・愛知県国際交流協会「私たちの地球と未来 ネパール版」
2	ネパール語について学ぼう！	○ネパール語でメッセージを書こう！ ・英語、ネパール語、日本語で将来の夢を書く。	
3	ネパールと肯定的に出会おう！～文化編～	○好きな食べ物や出身地から世界とのつながりを知る。 ・アイスブレイク【4つの角】 *好きな食べ物 *出身地 ○写真クイズ ・トイレの写真 ・信号 ・お茶 ・商店街の様子	・ネパールで撮影した現地写真
4	ネパールと肯定的に出会おう！～学校編～	○動画クイズ ・ネパールの学校の様子を見て、日本の学校との似ているところと違うところについて気付く。	・ネパールで撮影した現地動画
5 本時	日本とネパールの食糧自給率について知ろう！	○食料自給率とは何かを知る。 ○日本の食料自給率だけでご飯を作るとどうなるか体験する。(イラストを使用) ○輸入食品がなくなったらどうなるかを、派生図を書いて考える。	・NHK for School 「食糧自給率」
6 本時	日本の外国人労働者とネパールの出稼ぎ労働者について知ろう！	○日本の総人口と外国人労働者数の変移について知る。 ○外国人労働者 職業別ランキング【ランキング法】 ○日本にいるネパール外国人労働者【ジグソー法】 ○外国人労働者がいなくなったらどうなるかを、派生図を書いて考える。	・「外国人雇用状況」の届出状況まとめ
7	世界とのつながりについて考えよう！～もの編～	○「昨日お世話になったもの」を書き出す【ブレンストーミング】 ○書き出したものをジャンル別にグループ化する。 ○どの国から来たものかをタブレットを活用し、調べる。 *どの国からの輸入が多いかを調べ、1位の国を書く。	
8	今後世界とどう関わるか考えよう！	○今課題だと思ふものをたくさん出そう！ ○世界が取り組むべき課題と日本が取り組むべき課題【二次元軸】 ○行動宣言(want to を使った文を書く)	・「Sustainable Development Report 2023」

[本時の展開 (5時間目)]

ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・食料自給率について知ろう。 ・世界とつながることのよさを知ろう。 		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 [起] 10	1、日本の食料自給率を知る。 (1) 食料自給率とは何かを知る。		・NHK for school 映像「食料自給率」
展開 [承] 10 (20) [転] 20 (40)	2、日本の食料自給率だけで生活する場合を考える。 (1) 輸入なしの食生活について体験する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員の指示で、画用紙を開く。 ・ 感じたことを全体で共有する。 3、輸入なしの生活について考える。 (1) 日本が鎖国し、輸入品がなくなったらどうなるかを考える。〈派生図〉 (2) 他の班が派生図に書いたことを見て回る。〈ギャラリー方式〉 <ul style="list-style-type: none"> ・ 良いと思った意見には星マークをつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 画用紙を半分に折り、その中に、日本産のものだけの食事イラストを貼っておく。 ・ 外国籍生徒も身近に感じることができるように、ブラジルやフィリピンの場合も体験させる。 	・農林水産省「食料自給率」
結末 [結] 10 (50)	4、本時を通して考えたことをまとめる。 (1) 感想を書く。 (2) 感想を共有する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 班ごとに行う。 	
評価規準に基づく 本時の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が日本の食糧自給率について知識として得ることができた。 ・生徒はネパールの自給自足生活について知ることができた。 ・生徒は世界とつながることで、どのような良い点があるのかを学ぶことができた。(生徒の振り返りシートより) 		

[本時の展開（6時間目）]

ねらい	・外国人労働者と共に生きる大切さについて学ぶ。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 [起] 5 (5)	1. 日本の実情を知る。 (1) 日本の総人口と在日外国人数を知る。 (2) 在日外国人が増えていること、市内総人口に対して、何%在日外国人が住んでいるのかを知る。	・身近に感じることができ るように、データは生徒が 生まれた年と現在のデータ を活用する。 ・都道府県データや市町 村データも活用することで、 自分事として捉えることが できるようにする。	・令和4年末現在に おける在留外国人 数について [出入国在留管理 庁]
展開 [承] 20 (25) [転] 20 (45)	2. 多くの在日外国人労働者が従事している職種について知 る。 (1) 外国人労働者仕事ランキング。〈ランキング法〉 (2) 在日ネパール人労働者について知る。 ・「介護職」「ホテル業」「農業」「飲食業」で働いているネ パール人のインタビュー資料を読んで学ぶ。 〈ジグソー法〉 ・同じ班の子に資料の説明と分かったことを伝える。 3. 外国人労働者がいなくなったらどうなるか考える。 (1) 外国人労働者がいなくなったら。〈派生図〉 (2) 考えを共有する。 ・班で出た意見を全体で共有する。	・班で相談して行う。 ・外国人労働者数が多い 職種のランキングを考え る。 ・1人1資料を担当し、班 の仲間にわかるように伝 えるように指示をする。 ・班で行う。 ・模造紙に書く時には、 考えを言った上で書くよう に指示する。 ・生徒がランキング結果 なども踏まえて考えること ができるようにする。 ・他の班では出なかった 意見を共有するように指 示をする。	・「外国人雇用状 況」の届出状況ま とめ(令和4年 10 月末現在) [厚生労働省] ・介護職:「ひょうご 介護アナウンス」 ・ホテル業:「株式 会社 Funtoco」 ・農業技能実習生 「World Favour Overseas」
結末 [結] 5 (50)	4. 本時を通して考えたことをまとめる。 (1) 感想を書く。 (2) 感想を共有する。	・班ごとに行う。	
評価規準に基づく 本時の評価	・世界とのつながりについて身近に感じたり、深く考えることができた生徒が多かった。 (生徒の振り返りシートより)		

[総括・まとめ]

<p>学習方法および外部との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・協同的な学びや生徒が主体となって学びに取り組むことができるよう、班編成やグループワーク、課題設定を行なった。 ・ICTを効果的に活用し、情報収集など自ら進んで学びに向かえるようにした。 ・外国籍生徒が多いため、外国籍生徒の出身国文化も取り入れて、学習がより充実したものになるように努めた。
<p>学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他教員へのネパール研修報告会(特に防災教育、ネパールの教育事情、国際協力の観点を中心)を行なった。 ・文化祭でネパール現地で購入した物品や現地で撮った写真を展示し、全校生徒だけではなく保護者にもネパール文化を学べる展示を行なった。 ・授業での様子は、学級通信などに載せて、保護者にも周知した。
<p>苦労した点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・より自分ごととして考えることができるように、日本の現状や他国との比較が行う必要があり、教材準備が苦労した。 ・外国籍生徒にも分かりやすいように、外国籍生徒の出身文化についても学び取り入れる必要があった。 ・外国籍生徒の自文化という認識が日本なのか、母国なのかをしっかりと把握し配慮しないと傷つけることもあるため、特に配慮した。
<p>改善点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校では、学校や学年全体として、総合的な学習における国際理解教育の授業時間設定をしっかり設け、確保する必要がある。年度はじめに国際理解教育の時間を確保しておく準備などで動きやすいと感じた。
<p>成果が出た点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が世界で起こっているニュース(例えば、イスラエルとパレスチナの問題やアメリカの選挙、ウクライナでの戦争など)に対する関心が高くなった。 ・外国籍生徒の文化についても関心をもつ子が増え、交流している様子が以前より増えた。
<p>学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールを含め、海外にあまり興味がなかったり、他国の文化を知らない生徒の多くが「海外に興味をもった」「もっと学びたい」と感想に書いていた。 ・自分も世界と繋がりたいと考える生徒が増えた。 ・ネパールだけではなく、ウクライナやイスラエルとパレスチナ問題など、学習中に世界で起こった内容も含めて話をしたことで、より世界について学びたいという学習意識が高まった。
<p>授業者による自由記述</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分も持っている専門的知識や関心については他教員にも会話などから広げていったり、管理職の先生にも伝えていったりすると、教員向けの実践報告の場を設けてもらえるなど実践の場が増えていくと実感した。身近な周りから発信していくことが大切だと考えた。 ・教員自身が国際理解教育に対する熱を保ち続け、授業に取り入れたり、行動に移したりすることが大切だと思った。
<p>単元構想・実施における参考資料等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・愛知県国際交流協会「私たちの地球と未来」(国ごとの基本情報やクイズの参考) ・JICA 実践事例・学習指導案 国際理解協力について ・「身近なことから世界と私を考える授業3『自分ごと』として学ぶ17ゴール」開発教育協会(DEAR)

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]

私は今まで一度も日本から海外に行ったことがないのでたくさんを知りたいのでとても楽しかったです！！

もっと多くの国のことを知りたい

最近よくテレビで報道されているニュースと関連付けて外国で起きていることを話してくれるのでわかりやすいです。今後も色々な国のことを学びたいです。

ネパールの人々の生活や文化など、知らないことがたくさん学べたので良かったです。

ネパールやイスラエルは日本と比べると信号がなかったり、電線の線がたくさんあったり、日本では考えられない面白いことがたくさんある！私も実際に行って、さらに日本との違いを探したい！

ネパールに関してはあまり知識がなく、名前だけ知っている国だったのが、前よりもどんな国なのかがわかって、楽しかったです。イスラエル、パレスチナ、ウクライナは、なぜ戦争になっているか、今どういう状況なのかが理解出来ました。ニュースや聞いたことのあるだけだったことが色々とわかって、嬉しかったです。今後も日本以外の国のこともたくさん知りたいです。

日本以外の国に行ったことがなく、あまり興味がなかったし、私は、ネパールという国自体を知らなかったもので、どういうものがあるのか、日本と比べて、なにが違うのかということが学べてよかったし、ネパールだけでなく、他の国のことも同じようにに知れて、楽しかったし、もっと考えが深まりました。

・どのような文化で、どのように暮らしているのか

もっと他の国のことを知りたいと思った

おんなじ人間だから知れば知るほど楽しくなると思いました。

同じ世界に住んでいてもルールや言語、歴史など色々違って行くんだなと思いました。ご飯食べる時はネパールでは手で食べるでも左手で食べると左手でお尻拭くから左手で食べたら汚いと言われるのは初めて知りました。海外には不思議がたくさんあるなと思いました。

外国のことを知ることで有名な所、食べ物などを知れて楽しいなと感じました。今後もこのような外国のことについて学ぶ時間が必要だと考えました。

▲ 生徒の感想例

考えたことはみんなそれぞれに違って考えも色々あって日本の好きなものもあったり色々な国とこうやって繋がって行けることってとっても良いことなんだなと思いました

ネパールのお話を聞いて実際にネパールの人にあって仲良くなりたいと思いました。それでネパールを楽しみたいなと思いました。

▲ 生徒の感想例

最近よくテレビで報道されているニュースと関連付けて外国で起きていることを話してくれるのでわかりやすいです。今後も色々な国のことを学びたいです。

世界にはまだ、自由で豊かな生活がおくれていない、人がたくさんいると、学んだ。

今後は、募金などをし、世界を明るくしたいと思った。

ガザ地区の問題やロシアとの戦争について詳細がうまく理解できなかったけれどとても深刻な状況であることや私達の助けが必要不可欠であることがわかりました。これからは募金箱などを見つけたら率先して募金をしたいし、国際的な理解を深めるために自分から調べて自分から理解を深めて協力をしてけたら良いなと思いました。

考えたことはイスラエルやパレスチナやウクライナの戦争早く終わってほしいと思った。今後学びたいことは今問題になってることや国の文化、国の歴史について学びたい。

▲ 生徒の感想例

みんなが暮らしやすい Izumi Town を ALT に提案しよう

学校名	石川県金沢市立泉小学校		授業者氏名	鈴木 友紀
対象学年 (人数)	小学校5年生(109名)		実践年月 (時数)	2023年 10月～11月 5時間(単元全体 10時間)
担当教科等	英語科			
単元名 (活動名)	Unit5 Where is the post office?～みんなが暮らしやすい Izumi Town を ALT に提案しよう～			
実践する 教科・領域	道徳科、英語科			
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 (○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 () / 環境 (○) / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 ()</p>			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールと日本の文化について理解することで、自分たちにできることは何かという視点で両国共通の課題について考えることができる (道徳科) ・両国共通の課題を踏まえた持続可能な街の施設について考えることで、自然を大切にしようという思いをもつことができる (道徳科) ・自分たちの考えた施設を ALT に英語で紹介することができる(英語科) 			
単元の 評価規準	知識および技能	・道案内の施設紹介の表現の仕方を理解することができる(英語科)		
	思考力、判断力、 表現力等	・ALT に伝わるように工夫しながら道案内や施設紹介をすることができる (英語科)		
	学びに向かう力、 人間性等	・ALT に伝わるように工夫しながら道案内や施設を紹介しようとしている (英語科)		
	評価の視点	<p>【物事を多面的・多角的にとらえている様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真や資料から、ネパールと日本(泉校区)の良さや課題、両国共通の課題に気づき、自分たちのできることは何かという視点で、話し合っている <p>【道徳的価値についての理解を自分とのかかわりで深めている様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両国の課題を解消し持続可能な社会や地域を目指していくために、「自分だったら」と自分とのかかわりの中で、環境に配慮し、自然を大切にしようとする思いを深めている (道徳科) 		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・今暮らしている校区の良さに改めて気づくとともに、校区を含め日本の課題についても考えられる活動を取り入れた。また、さらに視点を広げられるように、ネパール(外国)の良さや課題について知るという学習を取り入れ、日本と比較したり共通点に気づいたりすることができるようにした。 ・日本や世界を知ることにとどまらず、自分たちが暮らす未来に向けて、持続可能な暮らしという観点で、自分たちの暮らしている校区をさらによくするにはどうすればよいかを、具体的な施設を考案することで自分事としてとらえられるようにした。 ・ALT をゲストとして招き、自分たちの校区を案内しながら、新たに考案した施設を紹介するという活動を通して、既習語句と新出表現を組み合わせた英語表現の仕方を学ぶことができるようにした。 			

[単元計画 (全5時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	・ネパールと日本の文化の良さについて理解することができる	<p><ネパールや日本の良さは？></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネパールの写真から気づく良さを書き出す 【フォトランゲージ】 ・各班の模造紙を回して内容を確認する 【回し読み】 ・各班ごとに発表する ・校区地図から見える地域の良さを書き出す ・各班ごとに発表する ・両国それぞれの良さをまとめ、ネパールを身近に感じる 	<ul style="list-style-type: none"> ・1/4 模造紙(各班) ・水性ペン(各班) ・ネパール写真(8種類) ・泉校区地図(各班同じ地図)
2	・ネパールと日本の文化の課題について理解することができ、両国共通の課題に気づくことができる	<p><ネパールや日本の課題は？></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネパールの写真から気づく課題を書き出す 【フォトランゲージ】 ・各班の模造紙を回して内容を確認する 【回し読み】 ・各班ごとに発表する ・資料から気づく日本の課題を書き出す 【ジグソー法】 ・各班ごとに発表する ・両国それぞれの課題をまとめ、両国共通の課題に気づく 	<ul style="list-style-type: none"> ・1/4 模造紙(各班) ・水性ペン(各班) ・ネパール写真(8種類) ・資料「優しい英語でSDGs!」(合同出版)
3 本時	・両国共通の「課題」を乗り越えるための取組について知り、自分たちにできることは何かという視点で、課題解決のポイントを整理することができる	<p><課題解決のポイントは？></p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の取組を知る 【ジグソー法】 ・各班ごとに発表し、アルビス株式会社で働く人の思いを知る ・ネパールの取組を知る 【ジグソー法】 ・各班ごとに発表し、ラブグリーンで働く人の思いを知る 【エピソードシート】 ・みんなが暮らしやすい施設のポイントになりそうなキーワードを整理する【ポップコーン方式】 	<ul style="list-style-type: none"> ・1/4 模造紙(各班) ・水性ペン(各班) ・資料「環境報告書」(アルビス株式会社HP)(8種類) ・資料「Love Greenの活動」(Love Green Japan HP)(8種類) ・エピソードシート
4	・両国共通の課題を踏まえた持続可能な街の施設について考えることで、自然を大切にしようという思いをもつことができる	<p><ポイントを踏まえた施設を考えよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで考えたい施設を考え、4つまでにしぼる ・各班の施設アイデアを見比べ重ならないように全体で調整する ・みんなが暮らしやすい施設を図や言葉で、模造紙にまとめていく ・それぞれの班の施設のアイデアや描き方を参考にする 【ギャラリー方式】 ・みんなが暮らしやすい施設を再度班でまとめ完成させる 	<ul style="list-style-type: none"> ・1/4 模造紙(各班) ・水性ペン(各班) ・A4 用紙
5	・自分たちの考えた施設をALT に英語で紹介することができる	<p><考えた施設をルカ先生に提案しよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・各班ごとに、校区地図を使い、地図に示された施設の場所まで道案内をする ・施設の図を使い、施設の名前や施設でできることについて紹介する 	<ul style="list-style-type: none"> ・泉校区地図(新) ・4時の模造紙(各班の施設)

[本時の展開 (3時間目)]

ねらい	・両国共通の「課題」を乗り越えるための取組について知り、自分たちにできることは何かという視点で、課題解決のポイントを整理することができる		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 (10分)	1 前時までの振り返りをしよう (1) どんな良さや課題があったかな ・日本とネパールの共通課題について「ゴミ問題」、日本ではさらに「食品ロス」についても問題になっていた (2) みんなの街の施設にも直接関わる問題は ・「ゴミ問題」「食品ロス」「エネルギー問題」を考えていくことが必要だ <課題解決のポイントは？>	・良さと課題について振り返ることで本時の学習問題につながるようにする ・取り上げる課題を整理することで本時で取り扱う環境問題に焦点化できるようにする	・前時までにまとめた表を提示 ・1/4 模造紙(各班) ・水性ペン(各班)
展開 (30分)	2 日本やネパールの環境問題解決の取り組みを知ろう (1) 日本ではどのように取り組んでいるのかな【ジグソー法】 ・「アルビス株式会社」・・・ゴミを減らす・出さない・エネルギー減 プラスチック使用量削減、廃棄物削減、リサイクル回収BOX、LED 照明、レジ袋使用量削減、マイバック・マイバスケツト運動推進、リサイクル活動の推進 ・アルビスの取り組み方針(思いや願い) (2) ネパールではどのように取り組んでいるのかな 【ジグソー法】 ・「ラブグリーンネパール」・・・再利用・資源を活かす・無駄にしない・持続可能・循環型農業 植林、苗床育成、バイガス装置、IPM 農法、研修、溜池、家畜飼育支援、改良家畜小屋 ・ラブグリーン 鈴木さん ビルマさん(思いや願い) 【エピソードシート】	・「何のために」「どんな取り組みをしているのか」と問い整理させることで、必要な情報を探せるようにする ・人に着目させることで、取り組みだけでなく、人々の思いや願いに気づけるように資料を提示する	・資料「環境報告書」(アルビス株式会社 HP)(8種類) ・資料「Love Greenの活動」(Love Green Japan HP)(8種類)
終末 (5分)	3 それぞれの国での取り組みから気づいたことをもとに課題解決のポイントを整理しよう 【ポップコーン方式】 ・植林(植物を植える)をする ・環境保全の情報を発信する ・ゴミを分別する、回収する ・エネルギーを使いすぎないもの選ぶ ・ゴミを減らす(ロス削減)	・自分たちでもできそうなことという視点で整理することで、自分事として考えられるようにする	・エピソードシート
終末 (5分)	4 今日の学習を振り返ろう ・各自の振り返りを書く ・グループ交流をする	・ワークシートに振り返りを書くことで、自分の思考を整理して伝えることができるようにする	
評価規準に基づく本時の評価	・資料を通して、両国共通の「課題」を乗り越えるための取組について知り、それぞれの班で出し合った情報をもとに、課題解決に向けてのポイントを整理することができたか。 (発言・ワークシート振り返りより)		

[総括・まとめ]

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・参加型の手法を取り入れ、グループ活動時間を短く設定することで、児童は積極的に資料を読んだり、気づいたことを書き出したり、話し合ったりするようになった。 ・教師海外研修で撮影した写真、購入してきた実物を紹介することで、児童はネパールについて興味を持ち異文化に触れることを楽しんでいる様子が見られた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・校内若手研修での・開発教育指導者研修・海外研修・授業実践報告会(2023年12月5日) ・全校での人権教育の取り組み(2023年12月人権週間 友達いいところビンゴ) ・全校へのネパール紹介クイズ(2023年9月 12年生英語 ST 3~6年授業【英語科】1時間)
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールの良さと課題に気づかせるために写真を選ぶこと ・ネパールでの様子を自分事としてとらえさせるために、日本の生活に置き換えて考えられるようにする手立て ・児童に提示する資料の内容吟味
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・提供した資料の情報量が多すぎたため、授業内で児童が十分に深め考えるところまで至らなかった。元の資料をもとに、児童に伝わりやすいように、文言を平易なものに変えたり、種類を厳選したりすることで、児童自身がより深く思考できる授業になると考えられる。 ・英語科の単元の中に、道徳科として4時間を組み込む形で実施したが、考えた施設を英語で表現することをゴールにしたため、扱う表現が難しくなり、紹介する内容が制限され、考えた施設を十分に説明することができなかった。日本語で紹介するゴールにして他教科で実施し、紹介する相手を保護者や地域の方とすることで、児童が学んだ視点を共有できる構成にしていけたらよいと考える。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールのことを知ることを通して、日本や自分たちの住んでいる地域のことについて考えるきっかけを与えることができ、自分事として考える児童の姿が見られた。 ・新たな施設を考案するという点では、考えることの難しさ以上に、こうなったらいいという児童の素直な思いを引き出すことができた。 ・4時間を通して、児童同士が自ら話し合おうとする姿が見られるようになってきた。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<p><児童の振り返り抜粋></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1時・・・日本のいいところもネパールのいいところもたくさんあるので他の国もいいところはたくさんあるのかなと思いました。 ・第2時・・・全然知らなかったことが問題になったり課題になっていることが分かりました。自分も人ごとだと思わないようにしたいです。ネパールも日本もゴミの問題が深刻で、もしかしたら世界でもゴミは問題ではないのかなと思いました。 ・第3時・・・日本は二酸化炭素をたくさん使ってるので、太陽電池や水力発電、風力発電を使うことが大切だと思いました。次はポイントを使って創りたい建物を考えたいです。 ・第4時・・・色々な案を出し合い、最終的に緑をイメージした二酸化炭素を出さないようにする建物の案ができました。プラスチックの削減も取り入れました。 ・第5時・・・今までのことを生かしてうまく言えました。自信をもってルカ先生に話すことができました。ルカ先生のように話せるように英語を磨いていきたいと思いました。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・児童に英語を学ぶ意義について考えられる授業作りをしたいと考え、教師海外研修に参加した。日本に戻り、授業を考える中で、児童自身が英語を使って楽しかった、伝わったという経験を増やしていくことで、学ぶ意義以上に、学びたいにつなげられる授業作りをしていくことが大切だと、改めて考えさせられた。今回の単元では、英語を使っての部分では不十分だったが、ネパールや日本の現状を知っていくことで、世界に興味を持たせることも非常に大切だと感じた。世界に興味を持てれば、必然的に英語に触れる機会が増え、英語を使うことを通して世界の問題を解決していくことにつながると気づかせることができるからだ。英語に特化するのではなく、さまざまな教科との兼ね合いで児童の学びが促されており、そのつながりを教師自身が把握し、児童と学びをつないでいくことが必要であると考えた。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・「やさしい英語でSDGs！」(合同出版) ・「環境報告書」(アルビス株式会社 HP) ・「Love Greenの活動」(Love Green Japan HP) ・ネパールの写真(16種類) ・エピソードシート ・泉校区地図

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



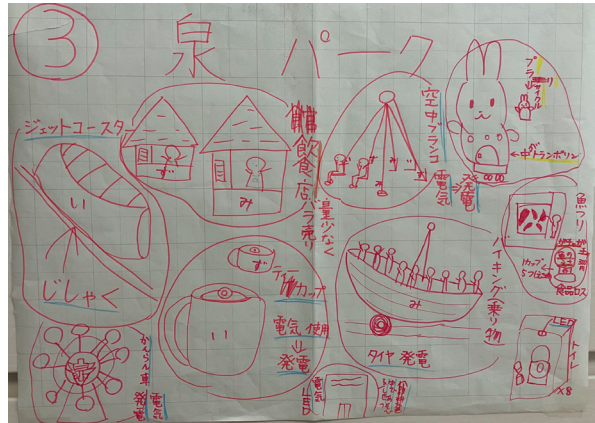
資料を見ながら内容を話し合っている様子(第3時)



ポイントを踏まえた施設を考えている様子(第4時)



児童の考えた施設1



児童の考えた施設2

English version		☆☆☆	自分の力でいっしょできる
		☆☆☆	自分の力でいっしょできる
		☆☆	友達や先生といっしょならできる
		☆	もう少し練習や努力が必要
Unit 5 Where is the post office?	Unit Goal みんなが暮らしやすいIzumi New TownをALTに提案しよう!		
Today's Goal 道案内の言い方を 知ろう	Today's Review 1 達成度 ☆☆☆☆ 9月3日 2 気付き・学び 今まで学んだことをしっかり思い出せました。 3 次の課題 次は、今までのことを生かして新しいことを学びたいです。		
建物や位置 の言い方、道 案内の言い方	1 達成度 ☆☆☆☆ 10月10日 2 気付き・学び 地図を見て道を考えることができました。 3 次の課題 ブロックとコーナの使い方を、しっかりとしたいです。		
位置や道案内 を上級に伝え られるようにしたい	1 達成度 ☆☆☆☆ 10月18日 2 気付き・学び ブロックとコーナをしっかりと使分けすることができました。 3 次の課題 道案内で止まる言い方を覚えたいです。		
ALTに依 わる紹介を しよう。	1 達成度 ☆☆☆☆ 10月26日 2 気付き・学び 自分はコンビニの名前を言うだけで、全然ダメです。 3 次の課題 ころがあるのでもっと覚えて、ALTの人としっかり会話したいです。		
	1 達成度 ☆☆☆☆ 10月30日 2 気付き・学び 私のグループは今日、1人お休みだったので、練習して 3 次の課題 さかたれがよおかも決まってるようにできたの 単字を覚えているようにしたいです。		
	よみとる力がついたと思いましたが、よみとる力 を別の教科でも生かしたいです。		

振り返りワークシート(表面 英語科用)

Nepal and Japan version		☆☆☆	自分の力でいっしょできる
		☆☆☆	自分の力でいっしょできる
		☆☆	友達や先生といっしょならできる
		☆	もう少し練習や努力が必要
Unit 5 Where is the post office?	Unit Goal みんなが暮らしやすいIzumi New TownをALTに提案しよう!		
2	1 達成度 ☆☆☆☆ 9月5日 2 気付き・学び ネパールは、ネパールで日本とは違うよさ 3 次の課題 がありません。1枚の写真からたくさんのことを知りました。		
4	1 達成度 ☆☆☆☆ 2 気付き・学び 今まで自分はあまりニュースなどを見ずか かたいい？ たって問題なども分からなかつた。これからは問題を に解決 したい。		
6	1 達成度 ☆☆☆☆ 10月19日 2 気付き・学び 日本とネパールでそれぞれ課題に対し 考えていることが分かりました。なので、私は、 考えていることが分かりました。		
8	1 達成度 ☆☆☆☆ 10月24日 2 気付き・学び 私は、コンビニのこうこうなどを考えて、本当の 考えよう！ コンビニにもあるものがたいていあったので日本 Good Point ももたいたいことをいっしょしようとしていることが よく分かりました。今日考えたことを英語で 伝えるようにしたいです。		

振り返りワークシート(裏面 道徳科用)

世界の貧困を僕らが救う！ーフェアトレードで自分にできることー

学校名	三重県四日市市立日永小学校		授業者氏名	竹内 綾音
対象学年 (人数)	小学校6年生(30名)		実践年月 (時数)	2023年 10月～11月 (7時間)
担当教科等	6年生担任(教科担任外国語・書写 他国語 道徳 総合)			
単元名 (活動名)	世界に目を向けて意見文を書こう			
実践する 教科・領域	国語科			
学習領域	A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 () B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 () C 地球的課題 … 人権 (○) / 環境 () / 平和 () / 開発 (○) D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 ()			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・世界には様々な暮らしがあり、各国の課題である極めて貧しい世界を強いられている家庭や学校に行けない子供がいる事に気づく。 ・学校に行けない子供の生活が分かる資料から、不当な取引による貧困の過酷さを知り、改善するための「フェアトレード」という仕組みを知る。 ・「フェアトレード」と自分の関わり方を考え、自分にできる支援方法を原稿用紙にまとめる。 			
単元の 評価規準	知識および技能	<ul style="list-style-type: none"> ・フェアトレードの取り組みを知り、自分の生活に取り入れる方法や関り方を考え、資料をもとに自分にできる支援方法を原稿用紙にまとめることができる。 		
	思考力、判断力、 表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に行けない子供の生活が分かる資料から、不当な取引による貧困の過酷さを想像し、改善するためのフェアトレードという仕組みを活用するためにはどのように行動すれば良いかを考えることができる。 		
	学びに向かう力、 人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・世界には様々な暮らしがあり、先進国や発展途上国など関係なく、各国の課題として極めて貧しい生活を強いられている家庭や、学校に行けない子供がいることに気づき、改善策としてフェアトレードという仕組みを活用して自分にできる支援方法を見つけようとする事ができる。 		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・フェアトレードという取り組みを知るだけでなく、生活で活かすためにどうすれば良いかを考えることで、より身近に他国への支援の必要性を感じ、行動に移すため。 ・世界には様々な暮らしがあり、各国の課題である極めて貧しい世界を強いられている家庭や学校に行けない子供がいる事に気づくことで、どの国も助け合いの精神が必要であることに気づき、フェアトレードという仕組みを上手く自分の生活にも取り入れることで救うことができると気づくため。 ・海外と聞くと欧米文化を想像する児童が多く、ステレオタイプな見方に気づき、世界の課題はそれぞれの国だけの問題ではなく、各国が同じ悩みを持っていることを知り、お互いに助け合う精神を持つことが国際理解には重要だと考えるため。 			

[単元計画 (全7時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1 本時	世界には様々な暮らしがあり、各国の課題である極めて貧しい世界を強いられている家庭や学校に行けない子供がいる事に気づくことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ●「海外」の暮らしをイメージする。 ●日本・韓国・アメリカ・ネパール・ガーナの5か国の暮らしをイメージし、紹介する。 ●国によって違う様々な暮らしの様子があることに気づき、その中にも貧困の課題があることに着目する。 ●各国の「子供が子供らしく生活することができる国」の順位を伝える。 ●貧困課題を抱える家庭の子供が、学校に行くことができない現状があることについて知る。 ●貧困は連鎖することに気づく。【貧困の輪カード】 	パワーポイント 写真集「Where Children Sleep」 End of Childhood Index Ranking 2021
2	学校に行けない子供の生活が分かる資料から、不当な取引による貧困の過酷さを知ることができる。	<生産地の暮らしから見える物> <ul style="list-style-type: none"> ●好きなお菓子を聞く。【ポップコーン方式】 ●子供たちに身近なチョコレートの原材料であるカカオの生産地出身ゴットフレッドさんの生活を資料(ACEスマイルガーナプロジェクトホームページより)で見る。【分担読み】 ●「ものすごく大変な仕事をする小さな手／ゴットフレッド」を読む。 ●貧困の輪カードのように起こる負の連鎖防止方法を考える。 	パワーポイント
3	貧困問題を改善するための「フェアトレード」という仕組みを知り、身近にあるフェアトレード商品に気づくことができる。	<公正な取引> <ul style="list-style-type: none"> ●貧困の輪を断ち切るためにどうすれば良いかを考える。 ●フェアトレードという仕組みがあることを知る。 ●フェアトレードマークや身近にあるフェアトレード商品・国外(ネパール)のフェアトレード商品を実際に知る。 	パワーポイント
4	「フェアトレード」と自分の関わり方を考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ●フェアトレードの取り組みについて資料を基に考え、日本での実績をデータで読み取る。 	フェアトレードジャパン資料
5	「フェアトレード」と自分の関わり方を考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ●フェアトレードの存在や仕組みをもっと日本でも知ってもらい、取り組みに参加してもらうためにどうするべきか。また、自分がどう行動するかを考える。 	フェアトレードジャパン資料
6	「フェアトレード」に関して自分にできる支援方法を原稿用紙にまとめることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ●フェアトレードの存在や仕組みをもっと日本でも知ってもらい、取り組みに参加してもらうためにどうするべきか。また、自分がどう行動するかを考え原稿用紙にまとめる。 	フェアトレードジャパン資料
7	「フェアトレード」に関して自分にできる支援方法を原稿用紙にまとめることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ●フェアトレードの存在や仕組みをもっと日本でも知ってもらい、取り組みに参加してもらうためにどうするべきか。また、自分がどう行動するかを考え原稿用紙にまとめる。 	フェアトレードジャパン資料

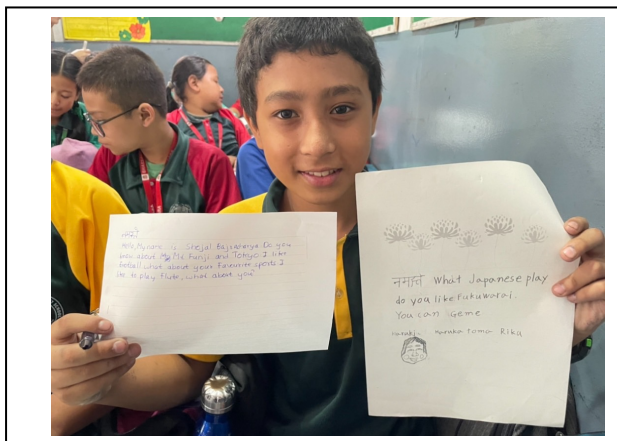
[本時の展開 (1 時間目)]

ねらい	<p>・世界には様々な暮らしがあり、各国の課題である極めて貧しい世界を強いられている家庭や学校に行けない子供がいる事に気づくことができる。</p>		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
1	<p>●「海外」の暮らし(街並み・食事・家など)の様子をイメージする。</p> <p>●日本・韓国・アメリカ・ネパール・ガーナの5か国の暮らしをイメージし、①主な食事②主な街並み③子供とその子の子供部屋(写真集「Where Children Sleep」より)を紹介する。【ブレンストーミング】</p> <p>●国によって違う様々な暮らしの様子があることに気づき、その中でも貧困の課題があることに着目する。</p> <p>●韓国7・日本21・アメリカ43・ガーナ125・ネパール137の国と数を知る</p> <p>●End of Childhood Index Ranking 2021 (THE TOUGHEST PLACES TO BE A CHILD より)掲載の順位の数字であることを知らせ、各国の「子供が子供らしく生活することができる国」の順位であることを伝える。【クイズ形式】</p> <p>●貧困課題を抱える家庭の子供が、学校に行くことができない現状があることについて知る。</p> <p>●貧困は連鎖することに気づく。【貧困の輪カード】</p>	<p>欧米諸国のイメージが出やすい。ここではそのまま進める。</p> <p>先進国から発展途上の国まで、イメージしやすい国を選び、この後の活動のため子供にフォーカスする。</p> <p>主に発展途上の国の部屋を見て、部屋数や家具等が十分でないことから貧しい生活と考える子供たちの意見を持たせたまま、数字を見せる。</p> <p>欧米諸国をイメージした際に、裕福であるという捉えをしていたが、実は貧困の問題を抱えており、それは国ごとの課題であり、世界の課題であり、私たち自身の課題であることに気づかせる。</p> <p>次回の〈生産地の暮らしから見える物〉で紹介するカカオの生産地出身ゴットフレッドさんの生活に繋げる。</p> <p>貧困の原因は連鎖しており、輪になる事をカードで考えさせる。</p>	<p>写真集「Where Children Sleep」</p> <p>End Of Childhood Index Ranking2021THE TOUGHEST PLACES TO BE A CHILD</p> <p>貧困の輪カード</p>
評価規準に基づく本時の評価	<p>・世界には様々な暮らしがあり、先進国や発展途上国など関係なく、各国の課題として極めて貧しい生活を強いられている家庭や、学校に行けない子供がいることに気づくことができる。</p>		

[総括・まとめ]

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・写真集「Where Children Sleep」 ・ End of Childhood Index Ranking 2021 ・フェアトレードジャパン 等資料の活用
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・6年外国語[What country do you want to visit?] 発表のデモンストレーションとしてネパールの現状を伝える活動を行った。 ・4・5・6年生対象外国語クラブでネパール BOX を使用した異文化理解学習を行った。 ・OJT 研修として教職員に対してネパールと国際理解についての講座を行った。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールってどこ?と聞かれる所から始まるため、概要説明から話をする必要があった。 ・子供たちがフェアトレードを全く知らず、身近にあることすらも知らなかったため、どれほど良い効果のある取り組みかを実感させることが難しかった。 ・教職員に向けての研修では、ネパールや発展途上の国に対してのイメージから、現状とのギャップを知ってもらう事はできたが、そこから身近な生活の中での国際理解を考えてもらうことが難しかった。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールの国がどこに位置し、何が有名かを説明する必要がある点。 ・フェアトレードとはなにか。また、必要性を感じさせる授業づくりをする必要がある点。 ・国際理解の重要性を一緒に考え取り組むところまでする必要がある点。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールを知ってもらうことで、日本との関りも深くあることを知ってもらうことができた。 ・フェアトレードの効果を実感してもらうために、まず生産地の貧困問題がどれほど重大であるのかをゴットフレッドさんの生活が分かる資料や、本人が想いを綴った詩を見せることで実感させることができた。 ・多国籍にルーツを持つ児童に寄り添う必要性を感じてもらうことができた。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本ではフェアトレードが全然広まっていないことを知った。私も知らなかった。知らせるために商品棚にフェアトレードの説明を書いておけば手取りやすくなると思う。(A児) ・フェアトレードの活動を知って、授業後にコンビニにフェアトレードマークのついたチョコを見つけた。こんなところにあったのかと驚いた。(B児) ・私は、フェアトレードを知らなかったけれど、好物のバナナやチョコが対象の商品にあったから、今度からは高くてもそれをおやつに買ってチョコバナナを作って食べようと思う。(C児)
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・国際理解の必要性をネパールへ行って強く感じ、支援とは助けることではなく「助け合う事」であることを実感した。これを伝えられるように今後も考える活動を授業に取り入れていきたい。 ・フェアトレードを題材に実践を行ったが、支援の方法としてまだまだ自分たちの生活でできることがあるはずだと感じた。それを子供たちと共に見つけ、実践までを行いたい。 ・他人への興味、日本への興味、が薄れている昨今。海外への興味までたどり着けるように教科全体を通して子供たちへの指導を行っていきたい。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・貧困の輪 Poverty Trap [開発のための教育] ・JICA 開発教育の意義と授業作りのポイント ・身近なことから世界と私を考える授業

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



▲ 外国語クラブの子供とネパールの小学生が手紙の交換



▲ 外国語 What country do you want to visit?でいきたい国をネパールで発表しようとする子どもたち



▲ ネパールの生活や小学校について解説



▲ ネパールの子どもたちと手紙の交流後英語に自信を持ち、海外の人に堂々と話しかける様子

今の自分、未来のジブン～いま、わたしができること～

学校名	石川県金沢市立扇台小学校	授業者氏名	西村 学
対象学年 (人数)	小学校6年生(30名)×2	実践年月 (時数)	2024年 1月 (9時間)
担当教科等	全科		
単元名 (活動名)	世界の未来と日本の役割		
実践する 教科・領域	社会科、(国語科、総合的な学習の時間)		
学習領域	A 多文化社会 … 文化理解 () / 文化交流 () / 多文化共生 () B グローバル社会 … 相互依存 (○) / 情報化 () C 地球的課題 … 人権 (○) / 環境 (○) / 平和 (○) / 開発 (○) D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 (○) / 社会参加 (○)		
単元目標	日本の役割について、地球規模で発生している課題の解決に向けた連携・協力などに着目して調べ、国際社会において我が国が果たしている役割を考え、表現することを通して、我が国は、平和な世界の実現のために国際連合の一員として重要な役割を果たしたり、援助や協力を行ったりしていることを理解できるようにする。また、世界の人々と共に生きていくために大切なことについて自分たちができることを考えようとする態度を養う。		
単元の 評価規準	知識および技能	・我が国は、平和な世界の実現のために国際連合の一員として重要な役割を果たしたり、諸外国の発展のために援助や協力を行ったりしていることを理解している。	
	思考力、判断力、 表現力等	・地球規模で発生している課題の解決策と我が国の国際協力の様子を関連付けて、国際社会において我が国が果たしている役割を考えたり、学習したことを基に今後、我が国が国際社会において果たすべき役割を多角的に考えたり表現したりしている。	
	学びに向かう力、 人間性等	・グローバル化する世界と日本の役割について、主体的に問題解決しようとしていたり、よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとしている。	
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	写真や映像を見たとき、その世界はこの地球上のどこかであることは誰もが分かっているはずなのに、私たちは、自分の生活がそこにつながっていると感じながら日々の生活を送ることは難しい。その世界に対して自分は何ができるのか分からず、結局はどこか遠い国のこととして自分の気持ちを処理してしまいがちである。それはなぜだろうかと考えたとき、そういう意識を幼少時代から持ち続ける訓練をしてこなかったからではないかと思う。なぜなら、私たちが子どもの頃は、そこまでグローバル化を意識する機会や学習がなかったからである。しかし、ここ20年でグローバル化の波はあっという間に世界を包んでしまった。加えて、状況を改善できる選択肢があったとき、それはすべての世の中の人間がもてる選択肢ではない。さらにその選択肢は1ヶ月後にあるのかも分からない。ならば、その時代に生きる子どもに対し、自分の中に選択肢がいくつあるのかを考え、行動に移していくことに大きな価値を求めることが必要である。しかし、人は、実感をともなった興味のあることにしかなかなか行動に移せない。だからこそ、身近なモノでいかにその感覚・想像力を自分が生きる世界に近づけていくかが肝要である。題材として扱うチョコレートは、とても身近な食べ物であり、つながりもあるため、児童は関心や意欲を持ちやすい。そのため、将来にわたりチョコレートに触れるたびに自分を見つめ、世界とのつながりを意識し、地球市民としての「自分の在り方・生き方」について考え続けていくことが期待できる。		

[単元計画 (全9時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1 本時	<ul style="list-style-type: none"> 世界の様々な課題の一つである貧困について知るため、カカオ農家の収入が少ないと、どんなことが起きるのかについて考えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近なチョコレートがどのような過程を経て自分たちの手元に届いているのかを知る。 その過程で消費者が払うお金の大部分が途中の業者に行ってしまうことを理解する。 農家の収入が少ないとどんなことが起こるか貧困カードで循環図をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 通常の貿易の仕組みを説明するスライド 「開発のための教育(日本ユニセフ協会)」の貧困カード HP「ACE」
2 本時	<ul style="list-style-type: none"> 収入が低いことが引き起こす様々な問題の悪循環を打破する方法の一つであるフェアトレードのよさについて理解し、今、自分にできることを表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> フェアトレードチョコレートはなぜ高いのかについて予想する。 予想を確かめる調べ活動を通じて、「人にも地球にもやさしい」フェアトレードの良さを知る。 フェアトレード商品にはどのようなものがあるのか紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> フェアトレードの仕組みを説明するスライド ネパールで購入したフェアトレード商品
3	<ul style="list-style-type: none"> ネパールのフェアトレード団体 ACP 工場の活動の様子を知り、声を聞き、生産者が実際どのような恩恵を受けているのか理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時の貧困の悪循環図をもとに、ネパールの児童労働や識字率(男女別)等のデータを提示し、ネパールが抱える大きな問題を捉える。 前時で紹介したフェアトレード製品が作られた ACP ネパール工場内の働いている人や作業の様子を知る。 ACP ネパール工場がどのようなことを大事にしているのか、生産者にはどんなメリットがあるのか知る。 世界の様々な課題を解決するために日本や世界はどのような活動をしているのか関心をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ネパールの児童労働や識字率就学率等のデータ 見学時に撮影した写真や動画
4 5	<ul style="list-style-type: none"> 国際連合の特色や各国連機関の取り組み、日本の人々の活動を調べることを通して、国際連合が行っていることや日本の人々の活躍を理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際連合や日本の関わりについて調べる。 ユニセフなどの取り組みを調べ、その働きや日本の取り組みを調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> HP「国連 KIDS」 HP「教えて！ユニセフ 子どもと先生の広場」 NHK「緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で」の動画
6	<ul style="list-style-type: none"> 持続可能な社会の意味やSDGsなどの取り組みを調べることを通して、世界や日本には現地の人々と協力して環境保全に努める多くの人々がいることを理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「持続可能な社会」の意味や具体的な取り組みを理解する。 「持続可能な開発目標(SDGs)」について調べ、持続可能な社会を実現するための取り組みがあることを理解し、これからの日本の取り組みを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> HP「SDGs CLUB」
7 8	<ul style="list-style-type: none"> JICA 海外協力隊や NGO で活躍する人たちの話や資料から、日本の国際協力の様子について理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ODA の意味や JICA 海外協力隊の具体的な取り組みを調べる。 NGO の意味をとらえ、具体的な取り組みを調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀 ~川原尚之」の動画
9	<ul style="list-style-type: none"> 国際社会における課題を解決していくために、自分たちができることは何か追究しようとするすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 世界の課題が十分に解決されているかを調べ、自分たちができることを考える。 解決のためには改めて何が必要かを考えさせながら、今の自分にできること、将来どのようなことがしたいかを明らかにし、それを国語科の学習と関連させスピーチとして発表する。 	

[本時の展開 (1・2時間目)]

ねらい	<p>・通常の貿易から引き起こされる児童労働などの問題を考えることを通して、その問題の悪循環を打破するフェアトレードのよさについて理解し、今、自分にできることを表現することができる。</p>		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 5分	<p>1. 貿易ゲームの「良い貿易とは？」の児童の感想を紹介し、今日は「新しい視点」で貿易について考えることを伝える。</p>		<p>・児童の振り返り</p>
展開① 40分	<p>2. クイズをし、児童の関心を高める。 ・チョコレートは1家族の購入額が金沢は全国1位なんだ。 ・日本は約80%をガーナから輸入しているんだね。</p> <p>3. 95円で買ったチョコレートがカカオ農家からどのような経緯(貿易)で手元に届くか理解し、消費者が払ったお金の大部分が途中の業者に渡ってしまい、農家の収入が非常に少ないこと(約2万円)を伝える。</p> <p>4. 本時の課題を確認し、予想をする。 農家の収入が少ないと、どんなことが起こるのか ・カカオ作りをやめると思う。でも新しい仕事あるのかな。 ・お金が無いし、盗んだりして犯罪が起きてくると思う。</p>	<p>・コミュニケーションをとりやすい雰囲気をつくるために和やかに進む。</p> <p>・経緯をプレゼンソフト使うことで視覚的に理解しやすくする。</p>	<p>・通常の貿易の仕組みを説明するスライド</p>
展開② 40分	<p>5. 貧困カードを配付し、貧困の悪循環をつくるグループ活動を通じて、問題の構造を発見する。</p> <p>6. 映像資料で現地の状況を具体的に捉え、ガーナの現状について検証する。 【児童労働】2003年は10人に1人→5人に1人 【識字率】2008年は65%→80% 【初等教育卒業】70%</p> <p>7. 悪循環を断ち切り、問題を解決する方法を考える。 ・収入を増やしたり、児童手当や食料を配付すればいいよ。</p> <p>8. 悪循環を断ち切る一つの方法としてフェアトレードを紹介するためにフェアトレードチョコレートを提示し、475円という値段を伝え、課題を確認し、予想する。 フェアトレードチョコレートはなぜ高いのか ・高い原材料を使っているのだと思うよ。</p> <p>9. チョコレートの包み紙を調べる活動を通じて、フェアトレードについて理解を深める。</p> <p>10. フェアトレードの製品にはどんなものがあるか紹介する。</p>	<p>・ギャラリー方式で他のグループの考え方を知り、席に戻った後に自分のグループで共有する。</p> <p>・映像を視聴することで、問題点についてより具体的に捉えられるようにする。また、「このクラスの○人の内○人が…」と数値で例えることで問題意識を強く持たせる。</p> <p>・値段を伝えた後、500円分、どちらを買うか問う。同じことを学習後にも問うことで変容が見える。また、「買う」という行動を見つめ直すことができる。</p> <p>・児童は必ず「食べてみたい」というので準備しておく。食べることでより意欲や関心が高まる。</p> <p>・「児童労働をさせているのは誰なんだろう？」と問うことで、消費者である自分たちがその当事者の1人であることに気づけるようにする。</p>	<p>・「開発のための教育(日本ユニセフ協会)」の貧困カード</p> <p>・「世界がもし100人の村だったら」(ポニーキャニオン)</p> <p>・HP「ACE～ゴットフレッドさんのケース～」</p> <p>・フェアトレードチョコレート(ピープルツリー)</p> <p>・包み紙人数分</p> <p>・フェアトレードの仕組みを説明するスライド</p> <p>・フェアトレードショップ製品写真</p> <p>・授業者がネパールで購入したフェアトレード商品</p>
まとめ 5分	<p>11. 振り返りを交流する。 ・フェアトレード製品が作られているところを見てみたいな。</p>		
評価規準に基づく 本時の評価	<p>・本時は導入部分であり、「学びに向かう人間性」での評価を記したい。児童の振り返りには、「自分の中で『公平』という言葉がただの公平ではなく、きちんと納得できるという意味が付け加わった」、「相手のことを思いやるやさしい心を持てれば世界の大きな差も縮まっていくのではないか」、「これからチョコレートを買うときに思い出そうと思った」等、たくさん世界を変えたい！という思いに溢れているものが数多くあった。このことから、よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとしている姿が見て取れる。</p>		

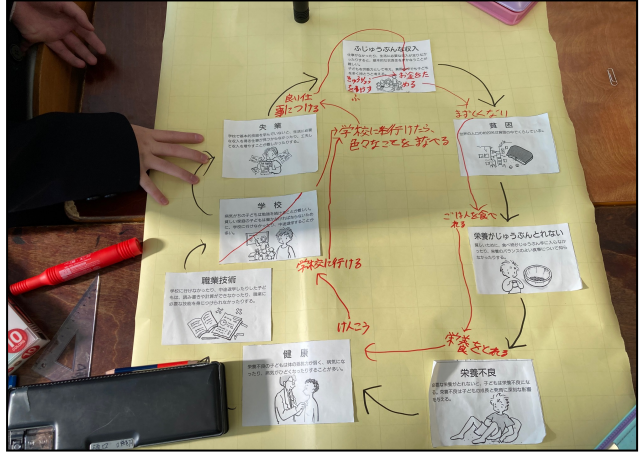
〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・貧困の悪循環を各グループで考えた後は、他の考え方を知り、見方を多面的にするためにギャラリー方式で共有を図る。その後、全体の意見を聞きながら、クラスの貧困の悪循環を完成させることで考えの深まりが見られた。 ・まず児童自身に悪循環を断ち切る方法を考えさせることで、能登半島地震の支援とつなげて考え、支援の意味を自分たちで見出す姿勢が見られた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員にネパールの研修報告会を行った。 ・単元計画の1～3時は、ねらいを変えて4年生(2クラス)、5年生(2クラス)にも実施した。事前に各担任と展開の相談を行い、各担任にはT2として板書をお願いした。 ・他校児童にもゲストティーチャーとして研修の学びを伝えに行った。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・社会、国語、総合的な学習の時間、道徳など教科横断的な学習をどのような順序で行えばより学習効果が高まるのかカリキュラムを考えること。 ・各学年に応じて教科の特性を考えた上で「ねらい」を変えること。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい学びを得るたびに、「自分にできること」「仲間とできること」「社会のできること」の3つの視点で「できること」を増やしていく。学習の終盤にはX軸を行動の主体となる単位、Y軸を難易度とし、自分の考えた「できること」がどこに分類されるか位置づけていく。それをもとに「ランキング」や「できることビンゴ」に整理し、国語のスピーチ原稿作成につなげていく。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・児童自ら授業を行った当日、家の中にフェアトレード製品がないか調べ、翌日嬉しそうに報告してくれた。 ・児童自ら保護者をお願いをしてフェアトレードショップに訪れた。 ・職員に国際理解教育に興味を持つ人が出てきた。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の勉強の前まではフェアトレードなんて知らなかったし、チョコレートを食べる時にカカオ農家のことなんて考えなかったけど、この勉強をして、次からは児童労働をさせていないフェアトレードチョコレートを食べてみようと思いました。大人にもフェアトレードを知っている人はいるだろうけど、詳しく、深くはその製品の向こう側は知らないと思うので、「高い」という一面的な見方ではなく、「想像力」を使って、「自分が買うことで…」と考える人がたくさんになるといいなと思いました。 ・今日、フェアトレード製品が高い理由を学びました。自分たちは今までただ「おいしい」とニコニコ食べていたけれど、辿っていけば自分たちのせいでもあるような気がして、情けなくなり、苦しい子どもたちの心が聞こえてくるような感じになりました。この授業をして値段への思いが改まったし、世界から児童労働やモノを安く買ったたくさんなどのことが無くなればいいなと思いました。
授業者による自由記述	<p>子どもたちはこれから、何度も何度もチョコレートに出会うだろう。そのたび、そのチョコレートの「向こう側」を少しでも想像し、考えることをくり返していくことができれば、世界は変わるのではないかと。子どもたちの感想から、その可能性が十分感じられることが授業者としてうれしく思う。求められて動くのではなく、自分の意志で、社会や世界など自分の周りを「変える」ために「いま、自分にできることは何なのか」と問い続け、行動に移す子どもたちの姿をこれからも教師として追い求めていきたい。</p>
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・月刊ジュニアエラ 2010年3月号(朝日新聞出版) ・NHK 地球データマップ～世界の「今」から「未来」を考える～(NHK 出版) ・NGO「ACE」ホームページ ・「コミュニティトレードal(アル)」が発行した新聞・チラシ

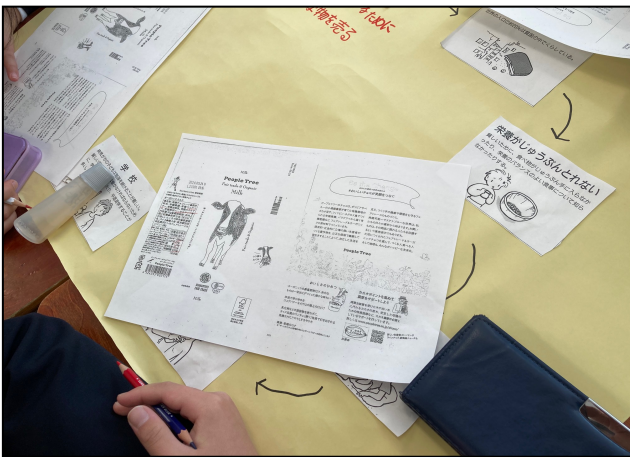
[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



▲ 収入が低いことから起こる問題の循環図をつくる様子



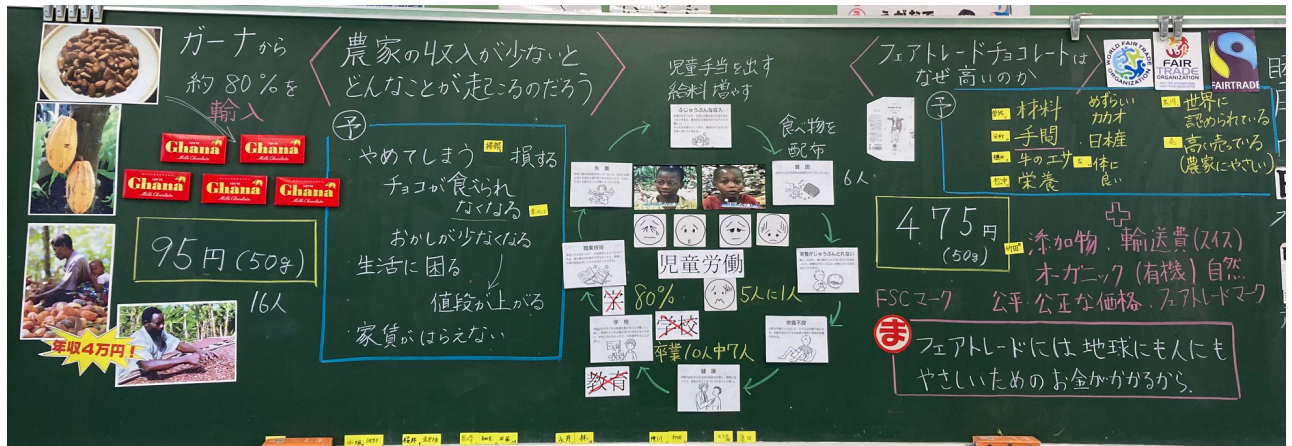
▲ 循環図をもとに断ち切る方法を考えている様子



▲ フェアチョコが高い理由を包み紙から考える様子



▲ ネパールのフェアトレード製品(手袋)を確認する様子



・私は学校に行けない子どもや休憩もとれない子どもたちがいるんだと学びました。私が学校で「当たり前」にしていることができない子どもがいることにびっくりしました。もっともっと知りたくなりました。

・今日のフェアトレードの授業で前に買い物に行ったときに〇〇(会社名)のオリジナル製品の隅にそのマークがあったことを思い出しました。最初見たとき、「これは何だろう」と思っていたのが「あれはフェアトレードマークだったんだ!」と分かったのが嬉しいです。これからフェアトレードマークを見つけたらそれが結構高めでも買ってみようかなと思いました。

▲ 授業後の児童の振り返り(前ページ以外)

みんな なかよし だいさくせん！！

学校名	名古屋市立富士見台小学校	授業者氏名	森谷 朋香
対象学年 (人数)	小学校1年生(27名)	実践年月 (時数)	2023年 9月 (6時間)
担当教科等	全教科		
単元名 (活動名)	みんな なかよし だいさくせん		
実践する 教科・領域	学活、道徳、生活		
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 (○) / 多文化共生 (○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 () / 環境 () / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 ()</p>		
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールについて知り、多様な文化や価値観の面白さに気付く。 ・他者とのよりよい関係づくりのために大切なことを考え、行動する。 		
単元の 評価規準	知識および技能	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールについて知り、多様な文化や価値観があることに気付くことができる。 ・違いを受け止めることの大切さに気付くことができる。 	
	思考力、判断力、 表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・他者とのよりよい関係づくりのために大切なことを考えることができる。 	
	学びに向かう力、 人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・他者とのよりよい関係づくりのために自分ができることを考え行動することができる。 	
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールには、日本とは違う文化や習慣が多くあった。それらについて知ったり体験したりすることで、視野を広げ、多様な価値観を受け入れることができるようになってほしいという願いをもって、このプログラムを作った。 ・「多様は面白い」「違いを否定するのではなく、受け止めることが大切」ということが、自分たちのクラスでも同じことが言えることに気付き、自分事として捉えられるようにした。 ・振り返りの時間を十分に設定し、自分が感じたことや気付いたことを文章化して考えを深めたり、友達と共有して考えを広げたりすることができるようにした。 		

[単元計画 (全6時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	ネパールの文化や学校の様子を知ることで、世界を身近に感じ、関心をもつことができるようにする。	① クイズに答えて、ネパールの街や暮らしの様子について知る。 【フォトランゲージ、クイズ】 ② グループで日本とネパールの写真の仕分けクイズをして、共通点や相違点を見つける。 【フォトランゲージ】 ③ 「おどろいた!」「すごい!」「似てる!」「もっと知りたい!」などの思ったことを個人で振り返り、ワークシートに書く。グループと全体で共有する。	写真、動画 写真、A3紙 振り返りシート①
2	ネパールの文化体験をすることで、異文化の面白さに気付くことができるようにする。	① 簡単なネパール語を知る。【クイズ、体験】 ② ネパールと日本の伝統音楽や民族楽器を体験する。【体験】 ③ 日本とネパールの音楽の共通点や相違点を個人で振り返り、ワークシートに書く。グループと全体で共有する。	スライド 動画、楽器 振り返りシート②
3 本時	違いを否定される場面と肯定される場面のロールプレイを見ることで、違いを受け止めることの大切さに気付くことができるようにする。	① 違いを否定される場面のロールプレイを見て、困ることをペアで考え、全体で共有する。 【ロールプレイ】 ② 違いを肯定される場面のロールプレイを見る。【ロールプレイ】 ③ 違いを受け止めたら、どんないいことがあるかを個人で振り返り、ワークシートに書く。グループと全体で共有する。	振り返りシート③
4	他者とのよりよい関係づくりのために大切なことを考え、行動することができるようにする。	① 「みんな なかよし」になるために大切なことや必要なことをグループで書き出す。ギャラリー方式で共有し、自分のグループで出なかった意見に♡マークを付ける。 【ブレインストーミング】 ② やってみようと思うランキング1~3位を個人で決め、グループで共有する。【ランキング】 ③ 1~4回目の授業で知ったこと、思ったこと、気付いたことを振り返り、その中で家族に伝えたいことをワークシートに書く。	半模造紙、ペン A4紙、ペン 振り返りシート④ 今までの振り返りシートや教材データ
5・6	すごろく作りを通して、1~4回目の学びを振り返り、家族に伝えることができるようにする。	① 1~4 回目の授業の内容で、印象に残っていることを選び、カードに絵と言葉でかく。 (一人3枚) ・なかよしカード: なかよしのために大切なこと →○マス進む ・おじゃまカード: なかよしを邪魔するもの →○マスもどる ・ネパールカード: ネパールのことで驚いたことなど ② グループですごろく台紙にカードを貼る。 ③ できたすごろくで遊ぶ。(授業参観でも保護者と一緒に遊ぶ。)	今までの振り返りシートや教材データ カード、すごろく台紙

[本時の展開 (3時間目)]

ねらい	・違いを否定される場面と肯定される場面のロールプレイを見ることで、違いを受け止めることの大切さに気付くことができるようにする。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
	<p>① ネパールの文化や習慣で、日本との違いを確認する。 「自分たちと違うところは？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手で食べる ・トイレを流さない ・数字 ・言葉 ・ダンス ・楽器のかたち、色、音 <p>② 違いを否定される場面のロールプレイを見て、困ることをペアで考え、全体で共有する。【ロールプレイ】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px; text-align: center;">へんなの</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px; text-align: center;">いやだ</div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 200px; margin-bottom: 10px; margin-left: 50px; text-align: center;">だめだめ、こんなの</div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 150px; text-align: center;">見たことないもん</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px; text-align: center;">やめて</div> </div> <p>③ 違いを肯定される(受け止める)場面のロールプレイを見る。 【ロールプレイ】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 80px; text-align: center;">すてき</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 150px; text-align: center;">よくみたら似てる</div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 200px; margin-bottom: 10px; margin-left: 50px; text-align: center;">ちがうから、おもしろいね</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 250px; margin-bottom: 10px; margin-left: 50px; text-align: center;">知らないことを知って楽しい</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 200px; margin-bottom: 10px; margin-left: 50px; text-align: center;">一緒にやると、楽しいね</div> <p>④ 違いを受け止めたら、どんないいことがあるかを個人で振り返り、ワークシートに書く。 グループと全体で共有する。</p>	<p>・前時の振り返りシートや写真資料を見せて思い出しやすくする。</p> <p>・違いを否定されるとどんな気持ちになるか、どんなことが起こるかを考えさせる。</p> <p>・違いを肯定されるとどんな気持ちになるか、どんなことが起こるかを考えさせる。</p> <p>・クラスの中でも一人一人違いがあり、それを受け止めることが大切であることを確認する。</p> <p>・違いを受け止めることは、「みんな なかよし」のために大切なことの1つであることを確認する。</p>	<p>写真 前時の振り返りシート</p> <p>振り返りシート</p>
評価規準に基づく本時の評価	<p>・違いを否定する場面と肯定する場面両方のロールプレイを見て比較することで、違いを肯定することの大切さを、実感を伴って理解することができた。</p> <p>・ネパールと日本の違いだけでなく、自分のクラスの多様性にも体感的に気付かせるような時間があるとよかった。</p>		

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・肯定的に出会う場面で、民族舞踊の動画を見せたり楽器などを触らせて体験させたりすることで、「面白い」「ふしぎだ」などの感覚を強く味わえるようにした。 ・毎時間、振り返りの時間を充分にとることで、気付いたことや思ったことを文章化したり共有したりすることができるようにした。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・同学年の他クラスやクラブ活動で授業実践の一部を行い、ネパールについて知ったり、異文化の面白さを体験したりできるようにした。 ・授業参観で、子どもが作ったすごろくを保護者と一緒にやることで、ネパールについて知ってもらえるきっかけとなった。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・違いを否定・肯定するロールプレイの方法に悩んだ。今回は、教師が演じ、それを見て感じたことを子ども同士で交流させたが、子どもが演じてもよかったかもしれない。 ・振り返りの発問の仕方や文章の書かせ方に悩んだ。毎回文章で書かせたが、1年生にとっては大変だったように感じたので工夫できるとよかった。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・今回は、日本とネパールの違いのことから、違いを肯定・否定する場面をロールプレイで示したが、それだけでなく、友達同士などの身の回りでも違いを肯定、否定する場面があること具体例をロールプレイ等で示せば、さらに行動の変容につながると感じた。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化を知ったり体験したりすることの面白さに気付いたことで、家庭でネパールのことを話したり、世界の様々な国の情報収集をしたりしていた。 ・「みんな なかよし」を意識して、友達との挨拶や言葉遣い、接し方を考えて行動する姿が見られた。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<p>次ページに写真で記載</p>
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・「小学1年生でも国際理解教育はできる！」ということを伝えたいです。私自身もこのことを忘れずこれからも実践していきたいです。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・教師海外研修での写真や動画

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]

①ネパールの ことを して、どんな きもちに なったかな？
3つまで まるを つけよう。

おどろいた	すごい	おもしろい
いつてみたい	すてき	いいな
わくわくする	たのしい	もっと しりたい
たてる	()	()

② その きもちを えらんだ りゆうを かいて みよう。

にほんどネパールにかせん
せんちがうとおもったけど
にてるところもあつてびっくり
したからです。

▲ 振り返りシート①

①ネパールの いろいろな たいけんを して きづいた
にている ところや にほんど ちがう ところを かこう。

にているところ
おかねのかたちがにいました。
しおのいろがにいました。

ちがうところ
おかねのえかにほんどちがうか
れたしおのかたちがにほんどち
がうにいました。

▲ 振り返りシート②

①ちがいを うけとめたら、どんな いいこと があるか かこう。

いいきもちもたふになれる
うれしい おもしろいところを
えがおになる いっしょに
あそべる いいことばが
えの たのしい

▲ 振り返りシート③

ネパールウィークの じゅぎょうで したこと、きづいたこと、
おもったことで、かそくにも つたえたい ことを かこう。

ネパールにはいろいろなものがあ
るネパールにはいろいろなものがあ
りました。ネパールにはほんどはあ
ちがうところがありました。ネパ
ールにはちがうところがありま
たのネパールにはほんどあつた
てるものがありました。ネパールには
ちがうところがありました。ネパール
にはいろいろなものがあつたです。

▲ 振り返りシート④

ネパールの
かたちがおもしろ
うかつたよ。

ダンスが
おもしろかつたよ。

カレーみたいなが
いっしょにあつてびっくり
したよ。

サラングの
まよがきまつた
からたのしか
たよ。

▲ すごろく ネパールカード

なかよしになるため
に、こえをかけるとい
いよ。
マスすすむ

なかよしになるため
に、こえをかけるとい
いよ。
マスすすむ

なかよしになるため
に、こえをかけるとい
いよ。
マスすすむ

なかよしになるため
に、こえをかけるとい
いよ。
マスすすむ

▲ すごろく なかよしカード

けんかすると
なかよしになれないよ。
②マスもどる。

▲ すごろく おじやまカード

いじわるする
となかよし
になれないよ。
④マスもどる。

虹色(私+あなた+世界)=？

学校名	静岡県御殿場市立御殿場中学校	授業者氏名	渡邊 亮祐
対象学年 (人数)	中学2年生(240名)	実践年月 (時数)	2023年12月～2024年2月 (5時間)
担当教科等	社会科・国語科		
単元名 (活動名)	虹色(私+あなた+世界)=？		
実践する 教科・領域	社会科・総合的な学習・道徳		
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解() / 文化交流() / 多文化共生(○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存() / 情報化()</p> <p>C 地球的課題 … 人権(○) / 環境() / 平和() / 開発()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識() / 市民意識() / 社会参加(○)</p>		
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> 世界も私たちも多様であることを知り、多様だからこそ支え合って生きていくことが大切であることに気付く。 肯定的に「ありのままの私」「ありのままのあなた」などの違いに出会い、その違いを受け止めるとともに尊重することの大切さに気付く。 		
単元の 評価規準	知識および技能	<ul style="list-style-type: none"> 私たちの生活は違いに支えられていることや違いがあるからこそ豊かな生活ができていくことに気付くとともに、その反面、違いによる問題も多く発生していることを理解できる。 アクティビティや話し合いなどを通して、誰もが偏見を持っていることや、その偏見を差別という行動に移してはいけなことを理解できる。 アクティビティなどを通して世界には違いに苦しむ人々が多いことに気付くことができる。 	
	思考力、判断力、 表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ネパールと日本の共通点や相違点に気付いたり、世界の違いが生む問題や、私たちに中にある偏見や差別意識を見つめたりする活動を通して、自分にとって違いは何か考え、自分なりの考えを表現することができる。 違いや偏見、差別による問題をなくし、誰もがありのままの自分でいられるために自分ができることを考えることができる。 	
	学びに向かう力、 人間性等	<ul style="list-style-type: none"> 自分が世界や社会の違い＝多様性から生まれる豊かさに支えられていることに気づき、また、その違い＝多様性から生まれている問題があり、また、それに加担し得る偏見や差別意識は誰の中にもあることを理解した上で、誰もがありのままの自分でいられるためにできることを考え、それを実行し、誰にとっても居心地の良い安全な社会を作り出そうとしている。 	
単元設定の 理由・意義 (児童生徒観、 指導観、教材 観から)	<ul style="list-style-type: none"> 中学生になり、思春期真っ只中の生徒たちは、周りの友人と「仲良くしたい」「より良い関係を築いていきたい」と考えている反面、その関係性の中で見られた少しの「違い」を受容できず、関係がうまくいかなくなってしまったり、それが悪化してしまうといじめや不登校など、深刻な問題に繋がったりすることがある。生徒たちが互いの「違い」を肯定的に受容し、誰もが「ありのまま」を認め合い、より過ごしやすい、誰にとっても居心地の良い集団になってほしいと願い、本単元を設定した。 本単元は、「違いを楽しむ」「違いは豊かさ」「違いの生む問題」「違いを乗り越えるために」という流れで展開していく。まず、初めの段階では、違いを楽しみ、肯定的に受け止めながら、自分たちがその違い＝多様性に支えられて生活していることに気付くことを期待している。違いの良さを感じられるような展開を作っていく。その後は、違いが生む問題について世界に目を向けるとともに、自分たちのことにも焦点を向けていく。違いを受け入れ、誰もが気持ちよく過ごせるために一人一人ができることを考え、それを実行していこうという気持ちを単元を通して育んでいきたい。 		

[単元計画 (全5時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	<p>★違いを楽しむ★</p> <p>・アイスブレイクやネパールクイズを通して、自分と周りの友人、世界との違いを知るとともに、その違いを肯定的に受け止め、それぞれの良さとして楽しむことができる。</p>	<p>* 私たちとネパール、どんな違いがある? *</p> <p>① アイスブレイク【4つのコーナー】 →自分と仲間との共通点や相違点を知る。 →自分と仲間との違いを楽しむ。</p> <p>② ネパールクイズ →肯定的にネパール、世界と出会う。 →世界との違いを楽しむ。世界の多様性の面白さを味わう</p>	<p>・よりよい未来をともに学び・ともに創るファシリテーターのための参加型アクティビティ集 コミュニケーション編—他者に関わる力を育もう— ・ネパール現地写真</p>
2	<p>★違いは豊かさ★</p> <p>・自分たちの身の回りのものや普段から生活を支えてくれるものについて改めて見直すことを通して、私たちの生活は世界の違い＝多様性に支えられていることに気付くことができる。</p>	<p>* 私たちの世界は多様である。＝豊かである *</p> <p>① アイスブレイク【3つのホント、1つのウソ】</p> <p>② 私が冬休み中にお世話になったもの →冬休み中に自分が使った、お世話になったものをリストに上げていく。【プレスト:リスト】 →自分の生活に欠かせないものに♡、海外と繋がりのあるものに☆をつける。 →私たちの生活は世界に支えられている!</p> <p>③ もしも、世界が多様でなかったら・・・ →世界が多様ではなく、全く同じ国だったらどうなる? メリットやデメリットから広げていく。【プレスト】 →最悪の結末だと思ふものベスト3を決めてマークする。 →世界が多様だからこそ、私たちは豊かに暮らせる</p>	<p>・よりよい未来をともに学び・ともに創るファシリテーターのための参加型アクティビティ集 コミュニケーション編—他者に関わる力を育もう—</p>
3	<p>★違いが生む問題を 知る・気付く★</p> <p>・世界には「あって良い違い」「あってはいけない違い」があることに気付くとともに、その違いが、さらなる格差などを引き起こすことに気付くことができる。</p>	<p>* 違いは豊かさ、だけど・・・ *</p> <p>① アイスブレイク【同じところ、違うところ】</p> <p>② 日本とネパールの違いは? →生活・学校・文化の写真から、「同じ」「違い」を探す。 →違いを「あっていい違い」「あってはいけない違い」に分類し、最もあってはいけない違いベスト3を決める。</p> <p>③ 違いが続いたらどのような社会になるのだろう。 →考えられる影響について、考えを広げていく。【プレスト】 →違いが様々な問題を連鎖的に生み出している。</p> <p>④ 世界における「違い」の現状を知る →世界がもし百人の村だったらを読む。読みながら、空欄に当てはまる内容を考える。 →あってはいけない違いが世界には溢れている</p>	<p>ネパール現地写真 実物</p> <p>世界がもし 100 人の村だったら 2020 (総務省統計局「世界の統計」/国際 NGO オックスファームデータ他)</p>
4	<p>★違いが生む問題は、 私ごとである。★</p> <p>・私たちの身の回りにも違いが生む問題があることに気付くとともに、違いが生む偏見や差別意識は誰もがもつものであると理解できる。</p>	<p>* 違いが生む問題、どこにある? *</p> <p>① アイスブレイク【宇宙人がやってきた】</p> <p>② 今の「私たち」の中にある違いによる問題は? →「社会」「学校」「その他」で見られる問題を考える【プレスト:リスト】 →深刻だと感じる問題にドクロマークをつける。</p> <p>③ 日本における人権問題における現状を知る。 →資料を読み、全員で問題を共有する。 →違いによる問題は、海外の問題ではない。</p> <p>④ 問題は私たちの周りにある? ない? →アクティビティ「愛さえあれば」「世間のせい」「愛さえあれば」・・・他人事は良くても自分ごとになったら? 「世間のせい」・・・「みんな」って誰? 自分ではないか?</p> <p>2 差別が続く原因は? 【因果関係図】 →意見を広げ、自分も当てはまると思うものに丸をつける →誰にも偏見・差別意識がある。</p>	<p>人権啓発活動重点目標 17 項目の現状 (法務省)</p> <p>愛さえあれば・世間のせい (高知県教育委員会『みんなで作る人権学習～さいしよのネタをわたします～』)</p>
5 本時	<p>★多様性、ありのままの私、 あなたを認める。 互いの違いを尊重し合う★</p> <p>・違い＝多様性を認め合い、誰もがありのままにいられるために、自分ができることを考え、宣言する。</p>	<p>* 違い＝多様性を認め合って生きていくために *</p> <p>① 「違い」をもう一度見直そう【プレスト:リスト】 →ネパールでのエピソードをグループで読む →エピソードの概要とそこから感じた「違い」を挙げていく。 →違いを「あっていい違い」「あっていけない違い」に分類。 →私たちは大きな違いを認められる。小さな違いは?</p> <p>② 私たちはなぜ「違い」を認められないのだろう。 →考えを整理する。【因果関係図】</p> <p>③ 私の「虹色宣言」 →多様性を認め合い、ありのままに生きていくためには? →自分にできることを3つ挙げる。 →多様性を認め合い、誰もがありのままにいられる、居心地の良い社会にするために、自分にできることは?</p>	

[本時の展開（5時間目）]

ねらい	・違い＝多様性を認め合い、誰もがありのままでいられるために、自分ができることを考え、宣言する。										
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料								
導入 5分	<p>* 違い＝多様性を認め合って生きていくために *</p> <p>1 前回の振り返り →振り返りから、前回の授業で特に印象に残ったこと、考えさせられたことをグループで共有する。 ・自分の中にも偏見や差別意識がある。 ・自分の身の回りにも、違いが生み出す問題がある。</p>	<p>・振り返りプリント(個人の振り返り・教師作成のリマインドシート)を用いて、前回の学びの内容をリマインドする。</p>	<p>・振り返りプリント</p>								
展開① 15分	<p>2 「違い」をもう一度見直そう。【対比表】 →ネパールエピソードをグループで担当を分けて読み合う。 * 自分が担当したエピソードを読み、そこから私たちとの「同じ(共通点)」「違い(相違点)」を考え、タブレット上に意見を出していく。 →全員が意見を出したグループから、 ①担当したエピソードの概要 ②エピソードから気付いた、考えさせられた「同じ(共通点)」「違い(相違点)」の2点をグループ内で共有していく。 →共有後、自分たちが見つけた違いを分類する。【対比表】 「あって良い違い」「あってはいけない違い」に分類する。 →分類後、分類したシートをもとに、「あっていい違い、あってはいけない違い」がそれぞれどのような特徴があるかグループ内で話し合う。</p> <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="width: 50%;">あっていい違い</td> <td style="width: 50%;">あってはいけない違い</td> </tr> <tr> <td>・文化の違い</td> <td>・命の関わる</td> </tr> <tr> <td>・考え方の違い</td> <td>・その人らしさに関わる</td> </tr> <tr> <td>・命にかかわらない</td> <td>・アイデンティティ</td> </tr> </table> <p>→私たちは文化や国ごとなどの大きな違いは認め合える。しかし、その人らしさや尊厳に関わる違いは認められない？</p>	あっていい違い	あってはいけない違い	・文化の違い	・命の関わる	・考え方の違い	・その人らしさに関わる	・命にかかわらない	・アイデンティティ	<p>・タブレットでエピソードを配付。4人組のグループで分担して、7つのエピソードを読んでいく。 ・クラウドで意見を共有し、それぞれの「同じ」や「違い」が可視化できるようにする。 ・対比表を2種類使う。 1 「同じ(共通点)」「違い(相違点)」 2 「あって良い違い」「あってはいけない違い」 ・各グループを回りながら、話し合いを整理するとともに、意見をともにつくりあげていく。</p>	<p>・ネパールエピソード資料7編</p>
あっていい違い	あってはいけない違い										
・文化の違い	・命の関わる										
・考え方の違い	・その人らしさに関わる										
・命にかかわらない	・アイデンティティ										
展開② 10分	<p>3 私たちはなぜ「違い」を認められないのだろう。 →考えを広げていく。【因果関係図】 →納得する意見に○をつける【ギャラリー方式】</p>	<p>・話し合いに加わり、一緒に意見を付け足していく。</p>									
終末 15分	<p>4 私の「虹色宣言」 →多様性を認め合い、ありのままで生きていくために必要だと思うことをグループであげる。【プレスト】 →納得する意見に○をつける【ギャラリー方式】 →多様性を認め合い、誰もがありのままでいられる、居心地の良い社会にするために、自分にできることは？ →自分にできることを3つ決め、自分の「虹色宣言」にする。</p>	<p>・グループ→個人の流れ位することで、誰もが自分なりの「虹色宣言」を持てるようにする。</p>									
振り返り 5分											
評価規準に基づく 本時の評価	・これまでに学習したことを生かし、違い＝多様性を認め合い、誰もがありのままでいられるために、自分ができることを考えることができている。										

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・現地の学校とオンラインでの交流なども考えたが、実施内容的に難しく、交流するのであれば、互いにとって肯定的に認め合い、楽しく学べる機会にしたいと考え、今回の交流は断念した。 ・タブレットを用いるとともに、毎時間振り返りを記入した。また、教師からリマインドシートを毎時間提示し、前時での学びを毎時間振り返りながら学習を進めた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・教師海外研修での学びや出来事をお便りにして配付した。 ・私だけが授業実践者になるのではなく、学年部の先生に学びや各時間のねらいなどを共有し、それぞれの学級で実践を行った。 ・子どもたちの学習の成果を学年部で共有し、日々の生活に生かした。
苦勞した点	<ul style="list-style-type: none"> ・時間の確保が難しく、発行したお便りと実施時期が大きく空いてしまった。 ・「肯定的に出会う」ことを意識したが、自分は「面白い」「たのしい」と感じたことでも、生徒によってはそうは感じないものもあり、誰にとっても「肯定的に出会う」ことの難しさを感じた。 ・各時間の間にも時間が空いたため、子どもたちの思考が時間ごとにぶつ切りにならず、繋がりのあるものにするためにリマインドシートを作成した。書く時間に繋がりを持って臨むことを強く意識した。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・肯定的に出会う場面で、現地の学生との交流を設ける。実際に現地の人と話した上で授業に入ることで、当事者意識が増した状態で授業に臨むことができる。 ・授業者間でのねらいの共有を密に行うとともに、年間全体を見通して効果的に授業を組み込んでいく必要がある。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・世界との距離が少し縮まり、外国へ興味を持つ生徒が非常に増えた。 ・人権感覚を養うという意味で、学年全体で意義のある学びをじっくり深めることができた。 ・生徒だけでなく、教員の中でも開発教育・国際理解教育に興味を持つ人が増え、輪を広げることができた。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・偏見は誰もがもっているものだが、それを行動に移す差別は絶対にすべきではないかと思った。また、世間に笑われる、などとよく言うが、よくよく考えてみたら世間とは自分自身のことだと気づき、差別や人権のことについて他人ごとではなく自分ごととして捉えることができた。 ・他国との違いは豊かさや良さを生んだり自分たちの生活を豊かにしてくれるという利点もあるが、その違いが貧困や差別を生んだりしてしまっていることを知り、とても心が痛んだ。また、1日300円以下の生活をしている人が多くいる中で私は裕福な暮らしをしているうちの1人なんだということを強く感じた。食料もままならない生活をしている人が何億人いるということを絶対に忘れないようにしたい。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・実物や、実際の経験は何よりも豊かな、子供の心を動かすものであると感じた。ネパールエピソードを読みながら「温かい国だな・・・」と呟く子どもおり、また、保護者にもそれを読んでいただくことで、今回の学びの輪を広げることができた。 ・学びのリマインドは非常に効果的であった。こういった学習は、いかに自分ごとに行えるかが大切であると思う。そのため、各時間に自分が最も印象に残ったことを共有、また、教師からリマインドすることで、繋がりのある学習が展開できた。 ・「明るく真剣に」と毎時間呼びかけた。内容は深刻なものもあるが、どの授業も真剣に学ぶ生徒の姿に感動するとともに、頼もしさを感じた。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・よりよい未来をともに学び・ともに創る ファシリテーターのための参加型アクティビティ集 コミュニケーション編—他者に関わる力を育もう—(NIED・国際理解教育センター)

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



▲ タブレット中心に行った。学びの足跡を残すことができ、それをリマインドするという面でも効果的であった。



▲ 本単元の1時間目は、学年で一齐に行った。
今日の私の学び

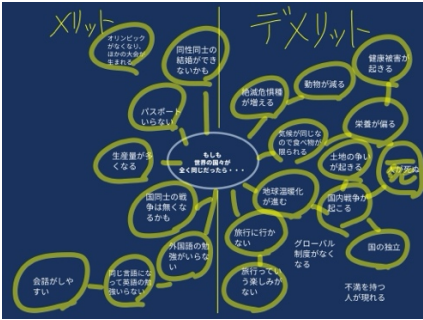
私はネパールと日本は全く違う文化や暮らし方と知っていましたがどのようなところが違うのかあまりわかっていませんでした。でも先生の話を聞いてネパールの人たちはこんな生活をしているんだ！こんな文化があるんだ！と知ることができました。やっぱりインターネットで調べるとあまりリアルさが無い見ているよりも面白さが感じられないけど、実際に体験した人の話を聞いたり、ゲーム形式でやったりでも面白かったです！より頭に入った気がしました。とっても楽しかったです！



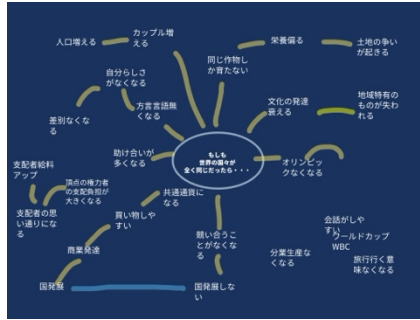
▲ ビクラム歴のクイズは、子供たちにとって特に驚きが大きかった。
今日の私の学び

ゲームをしてみても同じ地域、同じ学年の子でも違うものを望んでいて、何を思っているのかは一緒だけど、理由は違ったりして一人一人違うんだなと思った。同じように世界では、同じ地球にいて同じ人間だけれども、違う考え方をしている人が多くいて面白いなと思った。ネパールのゲームでも驚いた。特に西暦やカレンダーが違うところにとでもびっくりした。時間が経つても西暦や月も違うとは思わなかったし、年齢+にするのかなどとても疑問に思った。

▲ 1時間目の振り返り。違いを楽しむ様子や、実物や実体験はより好奇心や興味を引き出すものだと感じた。



▲ 2時間目、「もしも世界が全く同じ国だったら・・・」よく意見をつなぎ合い、考えを深めることができた。



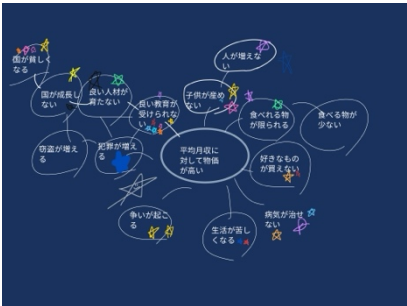
今日の私の学び

- 多様性という言葉は漠然としていて、よくわからなかったけれど、多様性って意外と身近だと知れた。
- 人と意見が食い違う時、あの人も私と同じ意見で、心だったら分り合えたのかなと思うことがあるが、様々な人がいるからこそそのメリットもあるのだなと気付かされた。
- それぞれ違う特色を持っている国同士い所を見つけ合い、支えで行けばすごく大きな力になるのに、紛争や戦争が耐えないのはすごく悲しいことだなと改めて思った

今日の私の学び

気候などが国で違うから楽しく生活することができると思った。国の特産物があることで健康に過ごすことができると思ったので国の違いはとでも大切なことだと思った。国と国の違いを使って支え合って生活していると思ったので国の違いを大切にしていきたい。自分の国と違う文化を否定するのではなく尊重していきたいと思った。また、1人1人の個性があることも大切だと思ったので個性を大切にしていきたいと思った。

▲ 2時間目の振り返り。違いによる豊かさや、そこから発展した考えに及ぶ子もいた。



▲ 3時間目。特にあってはいけない違いを選び、それが続くとどんな社会になるのか考えた。

今日の私の学び

他国との違いは豊かさや良さを生んだり自分たちの生活を豊かにしてくれるという利点もあるが、その違いが貧困や差別を生んだりしてしまっていることを知り、とても心が痛んだ。また、1日3000円以下の生活をしている人が多くいる中で私は裕福な暮らしをしているうちの1人なんだということを強く感じた。食料もままならない生活をしている人が何億人いるということを絶対に忘れないようにしたい。

今日の私の学び

ネパールと日本の違いを探してどれだけ日本が環境に恵まれているかがとてもよくわかりました。そのおかげで私達は不自由なく、生活ができています。でも一方でも日本でも栄養が不足している小さい子供など、恵まれない環境で育った人もまたいるということを再認識しました。そのような人たちがいるということを忘れずに生きていこうと思えた授業でした。

▲ 3時間目。次第に、違いによる問題に気付き、考え始める様子を感じられた。また、自分の身の回りの環境などにも目を向け始めるような意見が出た。

① スーパーマーケットの会話
「お相手の人は「○○」らしい」
→「○○」に入る言葉は??

愛さえあれば・・・

年取が少ない
元犯罪者 外国人

② 「愛さえあれば・・・」 「世間のせい」
読んで感じたことを書いてみよう
周りのせい、世間のせいという言葉を使って、自分を守っているように聞こえる
知らず知らずのうちにこなしてしまっているかもしれない人権差別は、どこまでが差別なのだろうか

① スーパーマーケットの会話
「お相手の人は「○○」らしい」
→「○○」に入る言葉は??

愛さえあれば・・・

- 元々犯罪者だった
- 障害者
- 低収入
- バツイチ
- キャンブルやってる
- 同性愛者

② 「愛さえあれば・・・」 「世間のせい」
読んで感じたことを書いてみよう
世間が悪いと言っても自分も世間のうちの1人なんだというのを強く感じた。また、普通や当たり前を基準にして考えているのではないかと思った。

① スーパーマーケットの会話
「お相手の人は「○○」らしい」
→「○○」に入る言葉は??

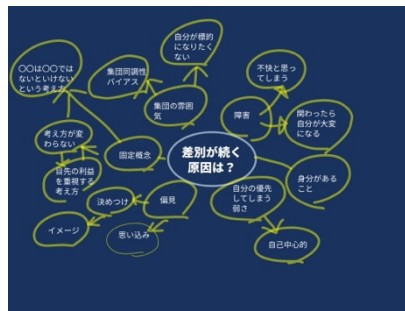
愛さえあれば・・・

障害者
貧乏
借金がある

② 「愛さえあれば・・・」 「世間のせい」
読んで感じたことを書いてみよう
多数派の人たちが自分の意見は多数派だと思って世間のせいにして。少数派にならないためにみんなが多数派の人たちに合わせようという差別などが起こってしまおう。

▲ 4時間目。「愛さえあれば」「世間様へ」のアクティビティを行った。偏見や差別意識が自分自身の中。そして誰の中にもあることを改めて見直した。

社会	学校	その他
<ul style="list-style-type: none"> 高齢化 少子高齢化 長時間労働 人材不足 バウハラセクハラ 振り込め詐欺 	<ul style="list-style-type: none"> 教育の老朽化 SNSでのトラブル バリアフリー化 	<ul style="list-style-type: none"> 親子喧嘩 虐待 地震



▲ 4時間目。因果関係図で、「差別が続く原因」について考えた。アクティビティの内容を踏まえて答える意見が多く、じっくりと話し合いながら意見を出し合い、繋げ合う姿が見られた。

今日の私の学び

- 「みんなが言っているから」「みんな持っているから」「世間が許さない」「世間的にどうなの」全部聞き覚えのある言葉で、あまり疑問に思ったことがなかったけれど、「みんな」や「世間」という言葉こそ差別や偏見のきっかけとなってしまうし、自分が意識していないうちに差別的な言葉を使ってしまうこともあるので、自分にも、周りに人にも差別意識はあるということを理解し、自分の言動をもう一度見直していきたい。

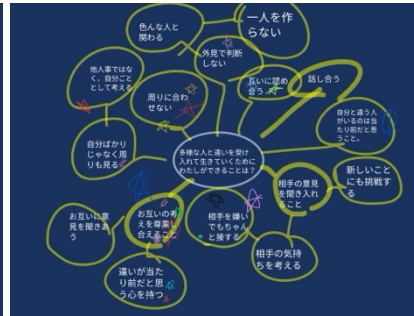
今日の私の学び

偏見は誰もがもっているものだが、それを行動に移す差別は絶対にすべきではないかと思った。また、世間に笑われる、などよく言うが、よくよく考えてみたら世間とは自分自身のことだと気づき、差別や人権のことについて他人ごとではなく自分ごととして捉えることができた。

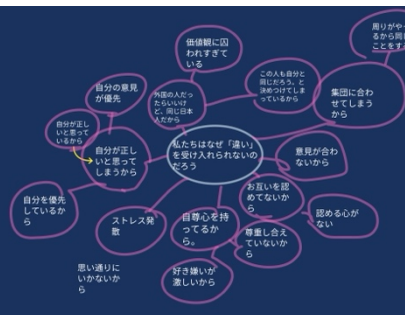
▲ 4時間目。振り返りでは、意識しないうちに誰もが偏見や差別意識を持っている、ということについて改めて考え直すような振り返りが多くあった。特に、「みんないってるよ」の「みんな」は誰なのか、それは自分ではないか、というところに、多くの気づきや意見が集まった。

私たちの「同じ」	私たちの「違い」	その他の気づき
<ul style="list-style-type: none"> ザッカーをする 差別が禁止されている 差別が生み出されている 	<ul style="list-style-type: none"> カスタ制が残っている さまざまな民族がいる 二重のバイパスの多い人が多く住んでいる 水通水がそのままだ 日本より差が着いていない 	<ul style="list-style-type: none"> 名前で身分がわかる 日本より治安が悪い いじめが無い さまざまな民族がいる 家族と呼ぶ ジェスチャーが通る ハグをする

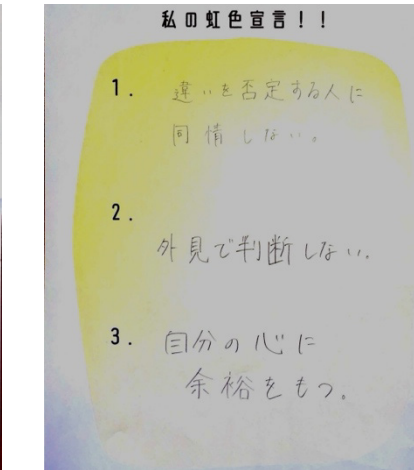
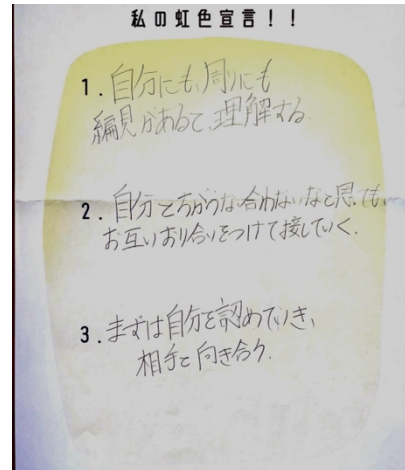
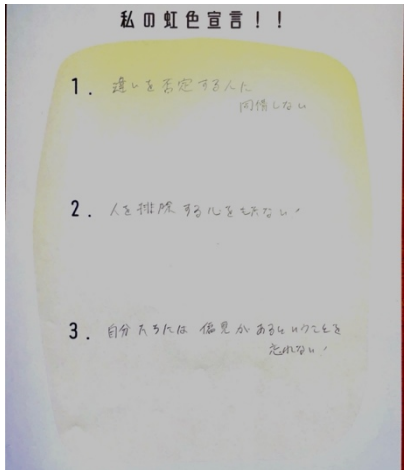
あっていい違い	あってはいけない違い	判断が難しい違い
<ul style="list-style-type: none"> ザッカーをする 差別が禁止されている ジェスチャーが通る いじめが無い さまざまな民族がいる 家族と呼ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> カスタ制が残っている さまざまな民族がいる 二重のバイパスの多い人が多く住んでいる 	<ul style="list-style-type: none"> 水通水がそのままだ 日本より治安が悪い 日本で差が着いている 日本で差が着いている 日本で差が着いている



あっていい違い	あってはいけない違い	判断が難しい違い
<ul style="list-style-type: none"> 日本の事情を知らない 差別が禁止されている ジェスチャーが通る 高いバイパスを多く持っている 	<ul style="list-style-type: none"> 産業が低い 犯罪が多い アパレルのブランドが有名 ヘルメットを多く持っている 	<ul style="list-style-type: none"> 年取が低い バイクが車中に隠れている 上水道が飲めない バイクが車中に隠れている 上水道が飲めない バイクが車中に隠れている 上水道が飲めない



▲ 5時間目。エピソードから同じと違いを見つけ、それを「あっていい違い」「あってはいけない違い」に改めて分類した。その後、なぜ違いを受け止められないのかを因果関係図で考えた後、多様な人と違いを受け入れて生きていくために私ができることは？について考えた。これまでの学びを生かして考えを広げることができた。



▲ 5時間目。「私の虹色宣言」として、多様な人と違いを認めあい、ありのままに過ごしていくために自分ができることを3つ決めて、宣言を行った。学習内容を生かした前向きな内容がとても多く、単元を通して繋がりをもちながら考えることができたと感じた。

VI. 研修全体のふりかえり・評価

● 研修受講者アンケート結果から

1. 研修の満足度について

研修受講者のうち9名が、5段階評価の最上である「とても満足できた」に回答しており、満足度の高い研修であったことがわかる。【設問1】

設問1；研修は、あなたの期待（あるいは目標達成の支援）を満足させるものでしたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても満足できた	9	90%
2	満足できた	1	10%
3	ある程度満足できた	0	0%
4	あまり満足できなかった＋満足できなかった	0	0%
	全体（無回答1名除く）	10	100%

2. 開発教育・国際理解教育の実践について

(1) 実践時間及び前年度からの変化

研修受講者の一人平均実践時間は7.5時間であった。最短3時間から最長13時間まで多様な実践が行われた。【設問2】

実践時間の前年度からの変化では、研修受講者の全員が「過年度よりも増加した」としている。

【設問3】その理由の主なものは以下のとおりであり、研修に参加してモチベーションが高まったり、開発教育・国際理解教育の手法がわかったりしたことが要因であったといえる。

設問2；開発教育・国際理解教育の延べ実践時間

No.	選択肢	回答者数	割合
1	1～2時間	0	0%
2	3～5時間	3	30%
3	6～10時間	5	50%
4	11時間以上	2	20%
	合計実践時間数	75	時間
	1人当たり平均実践時間	7.5	時間／人

設問3；過年度に比べた実践時間の変化

No.	選択肢	回答者数	割合
1	増えた	10	100%
2	変わらない	0	0%
3	減った	0	0%
	全体	10	100%

<実践時間が増えた理由（主なもの）>

◇教師海外研修に参加し、実際の現場を目の当たりにしたり、様々な人と出会ったことで自分のモチベーションが上がった。自分のモチベーションが上がった。

◇具体的な手法がわかり実践への抵抗が減った。応用しやすい手法をたくさん知ることができた。

◇自分が伝えたいこと、知ってほしいことが増えたから。

◇最新情報が増えたから。手法が増えたから。意欲が高まったから。

◇1年間を通して、総合学習を中心にプログラムが組めるようになったから。

◇参加型の手法を、授業の色々な場面で取り入れられるようになったから。

(2) 実践内容の深まりについて

研修受講者のうち7人が「とても深まった」、残り3人も「深まった」と「ある程度深まった」としている。【設問4】

その理由の主なものとは以下のとおりであり、研修に参加して関心が高まったり、開発教育・国際理解教育の手法がわかったりしたことが要因であったといえる。

設問4；前年度に比べて本年度の実践内容はどうようになったと思いますか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても深まった	7	70%
2	深まった	1	10%
3	ある程度深まった	2	20%
4	あまり深まらなかった+深まらなかった	0	0%
	全体	10	100%

<実践内容が深まった理由（主なもの）>

- ◇ネパールについて自分が体験したり感じたりしたことだったので、熱量をもって面白さや不思議さを伝えることができた。
- ◇児童が参加するためにどのような手法があるのかの選択肢が自分の中で増えたこと。
- ◇多様な価値観に出会えたことや世界とのつながりを感じさせたこと
- ◇買い物ひとつをとっても、その背景を考えるようになった。
- ◇様々な情報を集めるようになった。フェアトレードに関する授業で各方面の資料を取り入れた。

3. 学習者のより良い変化について

研修の学びを活かして学校で当該教育の授業実践を行った結果、学習者により良い変化があったかとの設問に対し、「とても変化があった」が8人、残りの2人も「変化があった」「ある程度変化があった」であり、研修受講者全員が、学習者のより良い変化を感じ取っていることがわかる。【設問5】。

設問5；開発教育・国際理解教育の実践により学習者により良い変化がありましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても変化があった	8	80%
2	変化があった	1	10%
3	ある程度は変化があった	1	10%
4	あまり変化はなかった+変化はなかった	0	0%
	全体	10	100%

より良い変化の内容として多かったのは、「開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった」が9人、「自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった」が8人、「学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った」が6人、「自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった」及び「自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った」が5人などとなっており、多様な面でより良い変化があったことがわかる【設問6】。

設問6；学習者にどのようなより良い変化がありましたか。(複数回答)

No.	選択肢	回答者数	割合
1	開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった	9	90%
2	自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった	8	80%
3	学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った	6	60%
4	自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった	5	50%
5	自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った	5	50%
6	話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった	3	30%
7	自らの生き方や共生について考えるようになった	3	30%
8	自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にする意識が高まった	2	20%
9	その他	0	0%
	全体	8	100%

4. 研修内容への評価

(1) 現地研修

<よかったこと（継続してほしいところ）>……ホームステイ 6、学校 5、ACP1、JAAN1

◇現地の雰囲気を知れること(沖) ◇ホームステイ、ACP、各学校(荻)

◇ホームステイが良かった。学校に2校も行けて良かった。JAANの方々と会えて良かった。(河村)

◇学校訪問、授業(鈴木) ◇ホームステイ。また、その2日目。(渡邊)

◇最も心に残り、授業につながられたのはホームステイ。やはり日常的な関わりとゆったりとした時間と空間が沈黙思考の機会を与えてくれ、問題意識が心に生まれてきた。(西村)

◇ホームステイと現地の学校の視察があったので、本当に感謝しています。(大島)

◇学校現場に複数訪問できたこと、学校現場以外の場所にも訪問できたこと、ホームステイで非日常(現地の日常)を体験できたこと、学んですぐにアウトプットする時間があったこと、高い志を持つ仲間たちに出会えたこと(石川)

◇日々、インプットしながらアウトプットの場としてワークショップがあり、自分の考えを整理しながら、周りの仲間の意見、考えを聞いて参考になった。(渡邊)

◇教育関連の場所。子供達に教えることのできるプログラムで学びになった。(竹内)

<より良くするための提案>

◆何も無い午前中があった方がよい(荻)

◆もっと日数があるとよかった(森谷)

◆学校の授業はどちらも相手が下校を遅らせてのものだったので、慌ただしく、午前に授業ができ、児童生徒とふれあう時間ももっとほしかった(特にカリデビ)。(西村)

◆どこ(CWINやACPなど)に行っても聞きたいことがありすぎて時間が足りないと感じたので、内容はあのままでもよいから日程に余裕をもってはどうかと思う。(西村)

(2) 事前研修、出発前説明会、事後研修①**<よかったこと（継続してほしいところ）>**

- ◇今年度のままでよい（石川）
- ◇事前も丁寧に教えてもらい、不安なく行くことができた（竹内）
- ◇事前にたくさん会うことでコミュニケーションがとれた（沖）
- ◇研修のチーム作りを丁寧にいただいたおかげで、最高のチームで学ことができた（大島）
- ◇チーム、個人としての目標、目指すところが共有できた（渡邊）
- ◇とても丁寧に教材化の流れをサポートしていただき、勉強になるとともにとても頼りになった（渡邊）

<より良くするための提案>

- ◆事前研修で十分になりきれなかったので、事前研修の時間を増やしてほしい（鈴木）
- ◆授業実践にいかせるかどうか、前年度までの実践までの様子をもう少し詳しくきいてイメージできたらよかった（鈴木）
- ◆事前の教材収集シートが多岐に渡りすぎていて考えを複雑にってしまった点はあると思う
「集めなきゃ」「聞かなきゃ」という思いが強すぎて、その場で生まれる問いや思いをなかなか大事にできなかった点もあったように思う（西村）

(3) 全体を通して

- ◇すごく自分の中のモヤモヤが解決した。行って良かったし、これからもネパールとのつながりや仲間との繋がりを大切にしていきたい。これからも広げるぞ！！（河村）
- ◇出発前から帰国後、最後の報告会発表まで、たくさんのご準備ありがとうございました。学び続けられて感謝している。（鈴木）
- ◇JICA 中部ではネパールが初めてだったので、僕らは仕方ないですが、来年度以降の受講者は様々な「準備（心、見方や考え方、物等）」という面からも過年度受講者の話を聞く、関わる機会があってもよいかもしれません。研修報告書等で分かることもありますが、今回の研修を通じて「人と人が関わり合う」ことで学べること、感じられることもあると思うので。そうすれば、来年度はさらにステップアップした研修になるのではないのでしょうか。僕たちにとっても大阪？かどこかのネパール研修の動画はとても参考になったので。（西村）
- ◇次年度の教師海外研修チームにとって、最高の研修になることを祈っています。（大島）
- ◇4年越しに叶った教師海外研修は、これからの人生の糧になるようなかけがえのない時間となった。もう一度参加できるならもう一度参加したい。（石川）
- ◇今までの研修でいちばんの学び、経験になりました。これをきっかけに、仲間も世界も自分の視野も何もかもが大きく広がった。また、今後の自分の様々な実践のモチベーションがとても大きくなかった。1年間、素晴らしい研修、学び、サポートをありがとうございました。（渡邊）

● 実践内容の評価

※実践報告書の内容について下記の指標から評価を行った結果をまとめた。

評価は、3人の評価者が、実践度合いを「全くなし」0点～「特にあり」5点まで点数化しその平均値で行った。

1 開発教育・国際理解教育における「学習者の学びの3つの柱」に関する指標

指標① 柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」次のような学びがあるか。

- ① 訪問国を身近に感じられるようになる。
- ② 自分たちとは異なるやり方、考え方、文化をオモシロイ!それもアリ!と思える。
- ③ 自分の当たり前が世界の当たり前ではないことに気付く。
- ④ 自分の中のステレオタイプ/思いこみに気付く。

指標② 柱2：学習者が、「日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」次のような学びがあるか。

- ⑤ 多様な中にも人々の暮らしや感情・希望には多くの同一性があることに気付く。
- ⑥ 人、ものなどを通し、日本と訪問国がつながっていることに気付く。
- ⑦ 訪問国と相互に依存しあい、途上国から様々な恩恵を受けていることに気付く。
- ⑧ 海外で頑張る日本人の想いや活動内容から、生き方・働き方について考える。

指標③ 柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」次のような学びがあるか。

- ⑨ 訪問国には誇りがあると同時に、残念なことがあることに気付く。
- ⑩ 各課題の原因を知り、日本や自分たちとの関わりに気付く。
- ⑪ 各課題の現状を知り、放っておくとその国の人や自分たちにどんな影響があるか考える。
- ⑫ 課題解決のためお互いの国が学び合い、協力し合えることに気付く。
- ⑬ 訪問国の課題から、翻って日本の課題を考える。

2 学習者主体の参加型、収集教材の活用に関する指標

指標④ プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。

- ◇ 学習者の年齢・関心の程度に応じて、その意識の流れに沿ったプログラムとなっているか。
- ◇ 学習者が、「知る、気づく」に留まらず、気づきを基に、「自分にできることを考える、実際に行動できるようにするためのスキルを身につける」ことができるようなプログラムとなっているか。

指標⑤ 学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。

- ◇ 学習者が内発的に気づいたり、主体性に考えたりできる問いかけや参加型手法を使っているか。
- ◇ 知識伝達のみ・予定調和の答えではなく、学習者が学びあう中で答えを見つけたり、新しい発見ができるようなプログラムとなっているか。

指標⑥ 現地で収集・整理した教材が効果的に活用されているか。

- ◇ 現地に行ったからこそ得られる素材や情報(教材)を活用できているか。
- ◇ 教材の活用として、単に現地について知ってもらうために見せたりするだけでなく、教材をもとに、「想像する」「読み取る」「対比する」「表現する」などができるような加工や問いかけの工夫があるか。

1. 「学習者の学びの3つの柱」についての実践度

教師海外研修では、3つの学びの柱に沿って、現地での情報収集や実践プログラムづくりを行った。各授業実践に、3つの学びの柱がどれだけ盛り込まれたかについて、受講者の実践報告書の評価を行った。その結果は下表のとおりである。

各柱の実践度を見ると、「柱1：訪問国に肯定的に出会う」、「柱2：日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」、「柱3：共通の課題について共に考え・共に越える」の各実践度は「十分にあり」水準の受講者が6～7人、その他の受講者も「あり」の水準となっている。

学びの3つの柱からみた実践内容の評価結果

学びの柱	実践度(上段:人数、下段:割合)		
	十分にあり 3.5点以上	あり 1.5点以上 3.5点未満	なし 1.5点未満
柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」次のような学びがあるか。	7 70%	3 30%	0 0%
柱2：学習者が、「日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」次のような学びがあるか。	7 70%	3 30%	0 0%
柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」次のような学びがあるか。	6 60%	4 40%	0 0%

2. 「学習者主体の参加型、収集教材の活用」についての実践度

本研修では、開発教育・国際理解教育を通して、世界における共通の課題解決に向けた行動につながるプログラムの作成、学習者の主体的な学び合いを支援する参加型手法の活用ができる指導者育成をめざしている。また、海外研修においては、現地で得られる教材を活かして実践をすることも求めている。受講者の実践において、関連する3つの指標について評価した結果は下表のとおりである。

各指標ともに、「十分にあり」水準の受講者が7～8人、その他の受講者も「あり」の水準となっている。

参加型・現地教材活用の実践度からみた実践内容の評価結果

参加型・現地教材の活用	実践度(上段:人数、下段:割合)		
	十分にあり 3.5点以上	あり 1.5点以上 3.5点未満	なし 1.5点未満
プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。	8 80%	2 20%	0 0%
学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。	8 80%	2 20%	0 0%
現地で収集・整理した教材が効果的に活用されているか。	7 70%	3 30%	0 0%

2023年度 教師海外研修報告書

発 行 2024年3月

発 行 者 独立行政法人国際協力機構 中部センター（JICA中部）

〒453-0872 名古屋市中村区平池町4丁目60-7

Tel : 052-533-0220 (代表) Fax : 052-564-3751

<http://www.jica.go.jp/chubu/>

